
クローバー：コード

坂津狂鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー：コード

【NZコード】

NZ876Y

【作者名】

坂津狂鬼

【あらすじ】

壊せ、命と同等の価値がある物を。
それはメールから始まる壊し合いゲーム。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです。

参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持つています。
参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいます。

参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません。

敗退条件は、ものの破壊です。

敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます。

勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます。例えそれが命であつても。

なお参加者それぞれのコードは《無影無踪》《非観理論》《否定定義》《完全干渉》《干渉不可》《禁思用語》《異見互換》《結論反転》《絶対規律》となつております。

ゲーム開始時刻は明日の0:00からでなければなりません。
くれぐれも殺し合いと勘違にならないように。これはあくまで壊し合いです。

それではご検討を祈ります

「月は何で明るいと思う?」

「そんなもん、太陽光を反射しているからに決まってんだろうボケ」
「人は空に大きく輝く月を見上げながら話し合ひ。」

「何それ。夢が無さすぎるでしょ」

「ロマンチストになれるような人生は送れなかつたからな」
「どんな人生を送つても、人は夢を見たり奇跡を信じたりするもの
よ」

「夢を見たところでそれは夢でしか無くて、奇跡を信じたところで
何かが変わる訳じゃない」

「……………それもそうね」

「随分と諦めが早いんだな」

「諦めるしかない人生しか送れなかつたからね」

「……………そうか」

沈黙の間も二人はずっと月を眺め続ける。ただ何の目的も無く。

「俺は」

二人のうちの一人が、沈黙に耐え切れなくなつたためか独りでに呴
く。

「俺はここから抜け出す」

「無理だよ。無謀だよ。無力な貴方には絶対に出来ない」

「……………そんなすぐには否定することも無いだろ」

「ここから抜け出すなんて無茶を言うからいけないんだよ」

「無茶じゃない」

「無茶だよ。絶対に無理。不可能。諦めるべきだよ」

「無茶じゃない。絶対に無理じゃない。不可能じゃない。諦めるべ
きじゃない」

「急にどうしたの? ホームシック?」

「別に。家族なら昔、目の前で殺されたからホームシックではない

だろ

「ならどうしてここを抜け出すなんて言うの？ 当てもあるの？」

「当てもない。目的も無い。ただ、ここで終わるつもりも無い」

「バカなの？ バカでしょ？ バカなんでしょ？ ここから抜け出

すなんて絶対に無理なのに何でやるうとの？」

「だから無理じゃない。お前が協力してくれれば可能だ」

「誰が協力したところでここから抜け出すなんて

「絶対に出来る。俺は全てを欺いて見せる」

「なんだ、夢の一つ見れるじゃない。そんな哀れで儂い夢の一つ」

「夢じやない。現実に変えてやるよ」

「……何を言つてゐるの？」

「簡単な事だ」

間を置き、答える。

「欺いてみせる、世界も神様も。だからお前は俺を信じて協力してくれればいい」

~~~~~

「……」

朝日が眩しく、堪らず目を覚ます。

どうやら俺はいつの間にか寝ていたみたいだ。しかもソファで。

お蔭で体の節々が痛い。首を傾げただけで、関節がバキボキ鳴り響く。

寝惚けた頭で壁に掛けてある時計を見る。

時刻は4：44。捉え方によつては幸せと死遭わせに分かれてしまうような数字だ。

4という数字はややこしい。

死を意味したり、四つ葉のクローバーのように幸せの象徴だつたり。幸運と不幸が織り交ざつた数字である。

まあ俺は数字に不気味さを感じる事が少ないため、不幸の象徴やら  
と考えた事が無い。

だからといって幸運の象徴とも考えた事は無いが。  
にしても、体が痛い。一度とソファで寝るものか。

そんな事を心に決めながら、冷蔵庫へふらふらと向かう。

ちなみに俺の現在の住家はダイニングキッチンであるから、数秒で  
冷蔵庫に辿り着いた。

まあキッチンが別な場所にある家は相当な豪邸か、昔の建築物かの  
どちらかだろう。

ともかく俺は冷蔵庫の中身を探る。

……スカである。空。新品同様の中身無し。

ふざけるなよ、あの野郎。

そう思いながらも朝っぱらから怒声を撒き散らしたら近所迷惑にな  
る事だろ？。

残念ながら俺は周りに気を遣える男であるため、静かに財布を持つ  
て家を出た。

理由は簡単。24時間365日営業の利便性社会の骨頂、コンビニ  
に行つて朝飯を確保するためである。

早朝の街は妙な静けさを帯びながらも、深夜よりかは人の気配を感  
じやすい。

日の光というものは人を引き付ける効果があるのかもしれない。  
いや、生物皆、蛾のように光に惹き付けられる習性があるのかもし  
れない。

一体全体、光に何があるっていうんだ。

あんなもの、ただ眩しいだけじゃないか。

あんなもの、あんものこそ一番、穢れている。

ポケットの中で何かが振動する。

家に置き忘れたと思っていた携帯がメールを着信したためだ。

にしても誰だ？ こんな朝っぱらにメールなんてしてくるドアホは？

『ちいはシーチキンおにぎりが良い』

なんてメールを送つてくるドアホとドアホを足してドアホを掛けた  
ようなドアホは？

いやまあ俺の記憶が欠落していない限り、こんな生意気なドアホは  
一人しか思い浮かばないんだが。

つていうかアイツだろ？ 冷蔵庫の中身を空にしやがった張本人は  
「ハア……」

溜息を吐きながら携帯の待受け画面を見る。

画面の真ん中に「デカデカ」と時刻が表示され、その右上に小さく何年  
何月何日何曜日かが表示されるシンプルな待受け画面。

今日は、11月8日月曜日。俺が転入生として高校に通う日だ。

「一輝、これシーチキンじゃないツナマヨ」

1時間近く朝の街を散歩し、コンビニで立ち読みをして、計一時間近く外に出でた俺が最初に言えに入つてから30秒後に言われた一言だ。

「別にツナマヨもシーチキンも変わらないだろ」

「変わるよ。大きく変わる。産業革命レベルで変わる」

絶対に大袈裟に言つてやがる。

「つーか、そんなに文句言つなら食うな。代わりに俺が食うから」

「一輝に食われるくらいならいい」として捨てられた方がマシってツナマヨが言つてる

ツナマヨは喋りません。

俺は溜息を吐きながら先程から文句を言つてくる主の方を見る。腰まで伸びきつた銀色の髪、左右で瞳の色が違ういわゆるオッドアイ。右が青で、左が黄色……じゃなくて琥珀色だっけか。

ともかくそんな日本人と言つ枠組みを超えている容姿をしている少女。

名前は濁川千秋。にじかわちあき戸籍上は俺の義理の妹ということになつてゐる。

まあ、なんやかんやコイツとは付き合ひが長いから義妹と言つつかは幼馴染や親友とかの部類に入る気がする。

仕方が無く、俺の義妹である感じだ。仕方が無く。

そんな銀髪少女は散々文句を言つていたツナマヨおにぎりを一口で頬張り、口元にご飯粒を付けるという定番の絵面になつていった。

これを教えずに学校で恥をかく義妹の姿を見たいという悪意を持つて何が悪い、いや悪くない。

「ん？ 私の顔に何か付いてるの？」

あまりに俺が長い間千秋の顔を見ていた為、反射的にそんな事を訊いて來た。

「お前のやの色違いの田はいつ見ても不思議さを感じるな、て思つてたんだ」

「他人が気にしている事をやうつと書ひ。一輝つて本物じテリカシ一が無いよね」

「生活力が無いよりかはマシだ」

大体、二日前までゴミ屋敷だったこの家を一般生活が出来るレベルまで掃除してやつたのは誰だと思つていやがる？

俺だぞ、俺。

到着早々この家の惨状を目の当たりにした俺が、寝る間も惜しんで二日間！

カビやらゴキブリやら異臭やら何かよく分からぬキノコやらを撃退して、やつと終わつたと思つてソファに横になつたらいつの間にか寝ていて、体の節々が痛く、それでも朝食をと思って冷蔵庫を開ければ中身が無く、仕方が無くコンビニへ行つての途中にシーチキンおにぎり買って来いと言わたした上に、買って来たらツナマヨだと文句を言わたこの俺の感情が分かるか！？

銀髪でオッドアイだからつてお嬢様でも無いお前が料理、掃除、洗濯やらの家事全般が出来なくて良いわけにはならないだろ？が！

そもそも何なんだよ！　掃除をしている時だつて！

近所の方々は『あらカメラは何処なの？』つて完全にテレビの特番とかで掃除していると勘違いしているし！

そのまま立ち話を続けてこつちの作業を遅らせるし…　こつちの人員は独りなんだからわざわざ掃除してるときに邪魔すんなよ…つていうか有名なゴミ屋敷にすんなアア…！

「……一輝、全部口から出てるよ」

「お前に聞こえるように言つてたんだよ…」

このダメ人間精神満点の銀髪女がつ。

俺の自分用に買つてきた鮭とシーチキンと昆布のおにぎりを数十秒で食つて終わり

「ちよつと待つて！　今シーチキン有つたよね…？」

「黙れよ銀髪。一々細かい事にこだわる事こんだけよ」

「細かいつて言つたか、わざわざシーチキンがあるのこりこりシナマ

ミ『』えたのー?」

「その自分のことをちいって呼ぶ癖をいい加減直せつて言つてんだろ。ガキじゃないんだから」

「ガキとかガキじゃないとかそういうの関係無いよー。ちいのシーチキンを取りやがつて、吐け!」

殴りかかるうとする千秋を片足で押さえつけながら優雅にお茶を飲む。

よし、朝食も取つたし、真面目な話でもするか。

「おい千秋。本当に居るんだよな?」

「……居るよ。間違いない。確認した」

両手をブンブンとアホのよつに振り回すのを止め、千秋が答える。

「三人だっけか?」

「一人に減つたよ。《否定定義》と《非観理論》が協力して《完全干渉》を倒したからね」

「それぞれの名前は?」

「《否定定義》は鋼冦梓美。《非観理論》は虎杖紀重。その両名とも、今日から一輝が通う高校に居るよ」

「知ってるわ。だからわざわざ俺はそこ高校に転入するわけだしな」

もう一口お茶を含ませた後、俺は面倒臭そうに言つ。

「……《完全干渉》はもう反応無しなのか?」

「案外そうじやないんだよね。面白い事に」

「何が面白いんだよ」

「ヤニヤと不快な笑いを浮かべる千秋に俺は問いかける。

「まずは《非観理論》だけね、使用者が途中で変わつてるんだよ

「どうやって?」

「前使用者の日記帳……正確には記録帳を見たら、簡単に次の使用者になつちやつたの」

「それが《完全干渉》にも起つてると?」

「そんな感じかな？ ちいにも詳細はよく分かんないから」

「使えない女」

「酷ツ！」

「そんな事より、もうそろそろ準備しないと学校に遅れるぞ」「ああ、本当だ」

慌ててどこかに行つた千秋。

俺はと言えば、そんな千秋の無鉄砲な行動を「バカだなあ～」なんて思いながらゆつくりとお茶を飲んでいた。

……つて、何で俺はそんなに優雅に過ごしているんだよ！？  
俺、今日が初日だからいつもより早く出なきゃいけないんじやないのかよ！！

残っていたお茶を流し込み、バカにしていた千秋と同じ行動を取つていた俺がいた。

あらすじ書かなきや いけなによな  
あ

「コード。

俺や千秋はそう言つてゐる。

所謂、超能力や異能のようなものだ。

他には、仮想空間具現化現象などと言つた堅苦しく長かつたらしい  
名称もあるそうだが、俺達は「コード」と言つてゐるから、コードで統  
一する。

「コード」の概要は、自分のルールだ。言い換えれば、自分だけの極論  
や暴論。

それを能力のように使つことが出来る。

いくつかコードにも共通したルールがある。

一つ目。能力として使用できるルールは一人一つまで。変更はでき  
ない。

二つ目。コードは何かを指定しなければ発動できない。

三つ目。コードは現実世界では使えない、という風に誤認してしま  
う。

俺が知りつむ限りでは「この三つがどのコードにも共通した事項であ  
る。

一つ目、二つ目までは異能系の漫画などによくある設定だと思つか  
ら詳細は言わない。というか書いて字の如くだ。

三つ目に関しては、少しややこしい事になるため説明しにくいのだ  
が。

簡単に言えば、思い込みや先入観が先導して、結果、三つ目の共通  
事項が生まれたということになる。

まあそもそもこれら全て、俺が考査したのではなく受け売りなのだ  
が。

ともかくそんな不思議な能力（？）であるコードは、実は俺と千秋  
も使える。

使えるからといって、だからどうした、という話なのだが。

「濁川一輝です。父の仕事の事情でこちらに転入してきました。これから宜しくお願ひします」

自己紹介のときに黒板に氏名を書くなんてのは、アニメや漫画とのみの設定なのだろうか？

そう俺が思った原因是、単に自分が担任教師に黒板に名前を書いてくれと言われなかつたからである。

わざわざ自分から名前を書いたとしても、図々しい奴だと思われるだろうからそのまま言葉のみの自己紹介をした。

しかし驚いた。

自分の席は一番端の廊下側の一一番後ろの席だと思っていたのだが、ちょうど俺の転入に合わせて席替えなんてものをして、結局、俺は中央の一一番後ろから一番目というなんとも微妙な席に座られたのだった。

自分のくじ運の無さとその微妙な位置に俺は驚いた。

まあそんな事はともかく。

午前の授業を平然と乗り切り、昼休み。

当然、弁当など持参しているわけもなく、行きの途中でコンビニに立ち寄る時間もなく、虚しい昼を送っている最中、千秋からメールがあつた。

『ちいのお昼ご飯がない。ぐださい』

間髪入れずに返信には『だが断る』と打ち、俺は自分の教室を出で校内の散策を始めた。

出た理由は簡単。

なんとなく、そろそろクラスの奴らの一人が一人が話しかけてくる様子を取つていたからだ。

人と接するのが苦手、というわけではないが、あまり交友関係を無駄に広めても行動しにくくなるだけである。

だから余り人と喋らない根暗な性格を貫き通そうと意識した結果、こんな行動を取ったわけだが。

「一輝、弁当」

廊下を適当にぶらついていたら千秋と会った。まあなんたる偶然。俺に差し出してくる千秋の手にぶつ刺すシャーペンが無くてガツ力りだ。

「千秋、情報」

もう千秋とは学校で会つても一度と口を利かないことを心の中で誓いながら、俺は千秋に聞く。

「それより弁当」

そう返してきた千秋の頭を驚掴みし、無理やり場所を移動する。つていうか「コイツは何だ？ 何なんだ？ 朝から俺をまるで自分の執事か何かと勘違いしてるとんですか？」

「痛い痛い痛い痛い、ごめんなさい放して」

謝辞を入れてきたので俺は仕方が無く、千秋の頭を放す。

「《否定定義》と《非観理論》についての情報。今すぐに言つ」

「今、鋼凧梓美也虎杖紀亜もそれぞれの教室で昼食を取っています。ちいもお弁当食べたいなー」

「お前、自分の事をちいとか言つて恥ずかしくないの？ それともわざとキャラ狙つてやつてるの？」

いい加減、昔からの癖を直せよ千秋。溜息を吐きながら俺はそういう。

しかし、《否定定義》《非観理論》の両者とも接触をわざと避けているのか。

それとも、定期的に……例えば校外やメールのやり取りなどで接触しているのか。

こちとら早く、この一人と接触したいんだが。まあ焦つても仕方がないか。

ともかく千秋に一人を見張らせておくのが一番無難だりつ。

「おい、千秋」

「ちょっと待つて。一人とも動いた」

千秋が何か携帯とかを見るわけでもなく、焦点が合つてない視界のまま俺に言つ。

「一人はどこに？」

「……特別教室棟の階段、多分そこに向かつてる」

「わかった。行ってくる」

「え、もう仕掛けるの！？ 早過ぎない！？」

今度はしっかりと俺に焦点を合わせて、千秋が反対してくる。

「殺し合いをするわけじゃない、話し合つだけ。それと少し教えてやるだけだ」

「絶対に争い」となると思つ。ならなかつたら奇跡」  
ジト目で俺の評価を表してくれるなんて、なんて妹だ。あとでお仕置きが必要かもしれない。

「あつちが一方的に警戒して攻撃をしかけてすべて失敗するだけだ。何の問題もない」

コードは火を出したり、水を操つたりする魔法的なものじゃない。  
まあ使い方によつては出来るだらうけど、そんな最初から物理的破壊をもたらすような危険な代物じゃない。

限りなく、周りに被害は出ないだらう。

「……特別教室棟、2階と3階の間の踊り場に一人とも集まつたみたいだよ」

千秋が正確な位置を教えてくれたため、俺はいそいでそこに行く。  
まあでも、見送りまでジト目じゃなくても良いじゃないか千秋さんよ。

展開早いよね。 さうだよね。  
まあ まだ まだ よりも マシか。 マシかな?

「本当にありがとうございました虎杖君。貴方のお蔭でテストはバツチシ  
「いやー、もう僕は何も言えないよ。《非観理論》をカソニングの  
為に使う破目になるなんて」

男子高校生と女子高校生の話し声が聞こえる。

……って当たり前か。ここは高校なわけだし。  
しかしこの特別教室棟つてのは白昼なのに人気が無い。放課後にな  
れば部活などで賑やかになつたりするんだらうけれど。  
まあそんな事はどうでもいい。

さつさと俺も《否定定義》と《非観理論》のお喋りに参加しなきや  
な。

「いやー、それは確かに驚くな。『コードをそういう風に使うと』  
「……ツ！？」

三階の踊り場に登場した謎の学生を最初に見たのは《否定定義》使  
用者である鋼凧梓美。

後に続いて《非観理論》使用者である虎杖紀亞も謎の学生を見上げ  
てくる。

謎の学生たる俺は平然とした顔で「あ、ドヤ顔決めといった方が良か  
つた」なんて事を思つていた。

「誰？ 虎杖君の知り合い？」

「……いいや違う。今日ウチの学校に来た2年の転入生だ」  
「別に《非観理論》を使って調べなくたつて名乗つたのに  
俺の口から《非観理論》という言葉が出た事によつて、さうに一人  
が警戒を強める。

ん~、なんかマズい。この一人に漂う緊張感は完全に臨戦態勢を整  
えてるつて感じだ。

別に暴力やコードを振りかざして一人を屈服させよつとなんて微塵  
たりとも考えていないのに。

「どうせそつちには《非観理論》があるから自己紹介する必要も無いんだけど……まあ、小さい時に散々仕込まれた事だからな。礼儀は通さなきや」

戦闘前の敵キヤラとかが言いそつた台詞だなあ、なんて若干傍観者を気取りだした内心を無理矢理引き戻し、俺は一人に自己紹介をする。

「俺の名前は濁川一輝。使うコードは《無影無踪》。自らと自らが触れた物質を消し隠す事が出来るんだ」

「コード……？」

鋼凧梓美の方が俺の言葉に少しばかり首を傾げる。

「仮想空間具現化現象とも言つ。けどそれだと長いし、コードって言つた方が短くてカッコいいだろ？」

まあ正直なことを言えば、俺はカッコいいからコードと言つている。「俺がこの学校に転入してきた理由は一つ。一つはぐうたら妹の生活改善のため。一つは、お前達二人だ」

「……わたし達を殺しに来たっていいうわけ？」

「《完全干渉》やお前と一緒にするなよ殺人鬼。俺はもつと穏やかな人間だ」

鋼凧梓美は少し眉を動かし、虎杖紀亜は苦笑いを浮かべる。

「俺はまあ、簡単に言えば、お前達を独断で審査しにきた」

「審査？」

鋼凧梓美がまた首を傾げてくる。虎杖紀亜の方は完璧に口を挟まない氣でいる。

まあ話す相手は一人の方が楽か。

「お前たちは分かっているだろ？が、《否定定義》と《非観理論》の組み合わせは非常に危険だ。過去、未来、現在の情報の全てを掴みきつたと言つても過言じやない」

「それで危険因子であるわたし達を独断と偏見で審査して、結果、本当に危険だと貴方が判断したら？」

「当然、殺す」

俺がそう言つた途端、鋼冚梓美が何かを投げてきやがつた。

俺はその場から一歩姿を消し、何かが通り過ぎた後、また姿を現す。

「それが『無影無踪』？ 逃げが中心のルールみたいね」

「ドアホ。人の話を最後まで聞くように、両親に教わらなかつたか？」

「生憎、その両親は小さい頃に田の前で殺されかけつてね。わたしはあんまり両親に教わつたことを信じてないの」

「そりや、『ご両親が恵まれない』

「別にそんなのわたしには関係無いつ！」

鋼冚梓美は勢いよく階段を上つて、俺との距離を一気に詰めよつとする。

このお転婆娘が、別に俺はあんた方と戦つ気は無いのによ。

俺は後ろへ下がり、どうにか廊下まで退く。

「随分と逃げ腰じやない。殺すんじやなかつたの？」

「殺すのは判断後だ。まだ判断すらしちやいない」

「なら良かつたじやない。良い判断材料ができる」

ああそうかい。このお嬢さんは俺の答えなど聞いていないといふわけかい。

上等だ。お兄さんに喧嘩を売つたらどうなるかを身を持つて知るが良い。

「そこまで死にたきや、さつさと死ねよ」

直後、二階の踊り場が丸ごと消える。

『無影無踪』。自らと自らが触れた物質を消し隠すコード。

そしてそれの使用者は俺である。俺が居た……足で触れた場所は隠す事が可能だ。

「さて、問題です。俺は先程までどこに居たでしょつか？」

「…………ッ否定！－！」

自由落下しかけていた鋼冚梓美の体は尻餅をつぶよつて踊り場に落ちる。

『否定定義』。ルールを無効化するコード。

つまりそれは、相手の理論である「コードをも無効化できる」という事。

一筋縄ではない相手だ。

……って違う！ 相手じゃない！ 僕は平和的にことを進めようと思つたのに！

いつから少しバトルっぽくなつてんだよ、バカか俺は！

ああー、これは千秋に怒られる。絶対に怒られる。そして弁当と言われ続ける。

つていうか。

「おい、お前スカートの隙間からパンツ見えてるぞ」  
ホント、最近のスカートって短いよな。冬場とか絶対に寒いだろうに。どうするだよ。

まあミニスカよりかは長いけども。本当に冬場どうするんだよ。つていうか今冬場だろどうするんだよ。

「…………殺す」

物凄く冷淡でまるで機械のような冷たさを感じる声が鋼仮面から発せられる。

ああー、俺の発言一つ一つが平和という文字をぶち壊していくなんて。

もういつその事、俺のコードは《平穏崩壊》に改名したほうが良いんじゃないかな？

鋼仮面の右手にはシャーペンが握られている。

ただの文房具だとは思うが、人によっては目に突き刺して凶器へと変貌させる天才がいるんだ。極稀に。

そしてそういう天才の雰囲気を今、鋼仮面は纏っている。  
まあ平和とは少しかけ離れたが、ここは一つ遊びを、  
「かくれんぼでも、始めようじゃないか」

s4 (後書き)

やつぱりバトルっぽくなると俺ってグダるなあ

.....

先程から何度か、鋼冨に姿が見つかってしまっている。というよりは《無影無縫》を無理矢理《否定定義》で無効化せられて見つかっているのだが。

### 《否定定義》

あらゆるルール……物理法則や常識、やつには「コードなどを無効化できる中々強く厄介なコードだ。対する」）つちは《無影無縫》。

自らと自らが触れた物質を消し隠すことができる「コード。しかし消した物質は《否定定義》によつてすぐに元に戻つそれてしまつ。

だからまあ普通に考えたら、《無影無縫》が《否定定義》に勝てるわけがないのだ。

真正面から渡り合えば、の話だが。

さて、そろそろ《無影無縫》の本来の使い方をお嬢さんに教えてあげようか。

「……チツ、どこに行つたあの変態」

鋼冨は特別教室棟の廊下にてボヤく。

謎の転入生の姿は何度か《否定定義》を使って、捉えてはいるものの、すぐにまた《無影無縫》によつて姿を消されてしまう。しかしそれでも転入生が特別教室棟にいることは分かっている。（……しかし、本当に何なの？ あの転入生は？）

虎杖に《非観理論》を使わせてもう少し調べ上げていればよかつたと、鋼冨は少し後悔する。

《否定定義》は「コードによる相手の小細工、策略に対しても強い。

しかし無効化するだけであるため、自らが小細工や策略に気付かなければ意味がない。

鋼冂自体が相手の行動を先読みするようなことを苦手としているため、情報戦そのものが弱点となつている。

鋼冂の予測では、あの転入生はそういう小細工や策略などが得意なタイプだ。

決して真正面から対決せずに相手の背後を刺すような、そんなタイプの人間だ。

（……虎杖君のところに一旦戻つたほうが良さそうね）

『非観理論』

過去未来現在のあらゆる事象が観測できるコード。そしてあらゆる者から観測されないコードもある。

しかし『非観理論』を使って観測した事象には言動、行動などの手段を持つとして干渉することが出来ない。

だが、『否定定義』を使えば、その制限を無効化することができる。つまりは、あらゆる事象の結末を観測することができるのだ。そしてその結末を変えようと足搔くことも可能となる。

簡単に言えば、相手がどういう小細工や策略を仕掛けてきてどういう結果になるのかを予知することが可能となるといつことだ。目的変更し、階段へ向かおうとする鋼冂。

しかし、進行方向の廊下の床が姿を消した。

直後、鋼冂が今まで歩いてきた廊下の床が姿を消した。

「…………否定」

近くに居る、と直感的に感じ取った鋼冂は迷う事無く『否定定義』によつてコードを無効化する。

『無影無踪』の厄介なところは見えないといつことだ。姿を捉える事が出来なければ、攻撃が当たらない。

だから迷う必要無く『否定定義』によつて無理矢理、姿を現させて攻撃を加えればいい。

その考えが間違えだつた。

「動くなよ」

鋼凪が間違いに気付くのはすぐだった。

転入生は鋼凪の田の前に現れ、包丁を首筋に当ててきたからだ。

「そんなの、持つてましたつけ?」

「いいや、これは学校のだよ。借りてきたんだ」

借りてきた?

鋼凪は転入生の言葉に疑問を抱くも、それを口に出す事はできない。不用意に喋ろうとすれば、包丁で斬りつけられてしまう可能性があるからだ。

「まあこれでやっと、落ち着いて話し合えるな

『無影無踪』の正しい使い方。

それは言つまでも無く物を消すことだ。といつかそれ以外何も出来ないのが『無影無踪』。

だからそれを最大限に活用する。

例えば鍵が掛かつて開かない調理室に入りたい時。ドアを丸ごと消し、無理矢理、侵入する。

例えば机や棚などで何処に仕舞つてあるか分からぬ包丁を探す時。棚や机を消し、入つている物を全てを無理矢理、外に出す。

この二つだけでもう窃盗し放題ではあるのだが、残念ながら俺は泥棒じゃない。

散らかした物はしつかり仕舞つて来た。証拠隠滅のためであるが。得物の調達が終われば、あとは気になるあの子を振り向かせるだけである。

……いや正確には抑止させて、話し合いに持ち込むだけなのだが。パターンとしては色々あるが、一番楽で一人つきりで話せるものを選択した。

ようは退路と進路を消し、首に得物を突きつけて相手の動きを抑制

するものだ。

そして今、それは見事に成功し無事に話し合いで持ち込むことが出来た。

「めでたし、めでたし」という事だ。

「ええーと、『否定定義』。言っておくが審査と言つても見る要点は一つだけなんだ。ほぼ確実にお前達を殺すこととは無い」と言つてもいい

「首に刃物突き付けておいて、そんな言葉が信用されると思つてるのは？」

「お前が思う思わないじゃない。俺は真実を話しているだけだ」  
おおよそだが鋼屈よりも、虎杖紀亞の方が絶対に話が通じる。

「いっは人の話を聞く訓練から小学校でし直してこい。

「見る要点の一つはお前達の情報網。簡単に言えば、他にも通じてるコード使用者がいるのかって話だ」

「殺した奴は一人いるけど、今のところはわたしは虎杖君と貴方だけよ」

「…………ついことはこっちが先だったわけか

「…………何を言つてゐるの？」

「別に。こっちの話だ。それよりも

「そこまでです」

背後から聞こえた声に、俺は田だけを向ける。

そこに居たのは千秋と虎杖紀亞だった。そして千秋は相変わらずジト目で俺を見ていた。

まあ確かに、殺し合わない言つておいて女子生徒の首筋に刃物当てるますもんね。

完全にこれは千秋に怒られる。

ほらやつぱりグダつた。  
戦闘グダつた。もうダメだ俺。 戦闘無理だ。

「一輝言つたよね？　問題無いつて」

「……はい」

「で、一輝はわざわざまで何をやつていましたか？　ちいに分かり易く説明してみてください」

「……なあ、お前いい加減ちいつて呼ぶの

「つべこべ言わずに早く。ナウ」

「……『否定定義』のコード使用者である鋼凧梓美が好戦的な態度をとった上に殺意をむき出しにされて自分の命の危機を感じましたから、自己防衛のため、鋼凧梓美の首筋に刃物を突き立てて抑止していました」

叩かれた。千秋にジト目で思いつきり俺を叩いて来た。

「一輝が交渉とかには向いていない事がよく分かつた」

「俺は交渉とかに向いてないわけじゃない。お前よりは向いてる自信がある」

「分かつた言い直す。一輝は平和的交渉には絶望的に向いていない事が詳しく理解できました」

「……返す言葉もございません」

いや別に俺が、俺のみが完全に悪いわけじゃないと思うんだよ。鋼凧にも非はあるし、そもそも鋼凧が仕掛けで来なければこっちは争う気なんて微塵も無かつたんだから。

俺のみが怒られるのは不公平って言うか……まあ公平なんてものがあるなんて信じては無いけど……絶対に千秋の言い方だと俺が10割方悪いように感じるじやんなんか。

気に食わないな……気に食わない…………。

「ウチの一輝が、本当に失礼しました」

まるで犬が誰かを噛んだりした時のように千秋が謝る。

いや、俺は犬ですか？　躾けが成つてない犬とでも言いたいんです

か？

「いえ、口クに話を聞かないで喧嘩を吹っかけた僕達も悪いわけです」

虎杖も、まるで犬同士が吠えあつた時のように苦笑いをしながら謝る。

ちょっと待て。鋼皿が犬だろうがネコだろうがダードが構わないが、俺をそれと同種のように扱うな。

俺はあんなにバカじゃない。アイツと同種にされるのだけは「免だ。

「ちい……私たちがそちらに接触した理由は、偵察の一環なんです」「審査って、さっきは言つてたんですけど？」

「まあ審査もあながち間違つてはないんですけど。私たちはあるコード使用者を探してゐるんですよ」

千秋の言つ通り。俺たち……正直言えれば、俺があるコード使用者を探している。

「そいつを見つけたらどうするんですか？」

「半殺しだ」

虎杖の問いに、千秋の代わりに俺が答える。

「あいつのコードを奪つて、精神を壊して、牢獄ヘブチ込む」

「なんだ。わたしとなんら変わらないじゃない、貴方も」

「変わるさ。殺すなんて生温い方法を取つてお前とは」

口を挟んできた鋼皿をすぐに否定し、また睨み合いになる。

つていうか鋼皿を睨んでたら、千秋に蹴られた。痛い。

「ともかく私たちが搜してこいるコード使用者は危険なんです。世界レベルで」

「……それで僕の『非観理論』を使ってそのコード使用者を探そぐと？」

「ちょっと違います。『非観理論』でも見つかるかどうか怪しいので、そんな曖昧なものには頼りません」

虎杖は少し驚いた顔をする。

まあ本来、『非観理論』は全ての事象を観測できる。

でもコードを使えば、その監視の目を掻い潜る事だって可能だ。

虎杖が驚いたのは、こいつがまだそれ程多くの……『否定定義』と『完全干渉』の二つのコードしか近くに無かつたからだろ？。

「私たちが接触した理由は、私たちが追つているコード使用者がそちらに接触してないかを確かめるためです」

『否定定義』と『非観理論』。

この二つが揃えば、無限に未来を予知できる。

出来れば、味方につけたいコンビである。まあ俺は鋼凪とは気が合わないと思うから味方に付けたくないんだけども。

ともかく俺が追つてるコード使用者は今何処で何を考え何をしているかが分からぬ。

だからまずは悩みの種を摘み取つていく。

取り敢えず、こいつらはまだコード使用者に会つてない。

だが、後々接触される可能性がある。だから俺はわざわざその高校に監視目的で転校してきたわけだ。

「一輝は少しはしゃぎ過ぎましたけど、私たちに敵意はありません。できればそちらと協力したいとも思つています」

「絶対に嫌だ」

嫌な気が合う俺と鋼凪は同時に言い、その直後、俺は千秋に踏みつけられた。

このヤロウ、絶対に後で覚えておけよ。夕飯はお前の嫌いなピーマンとナス炒めにしてやる。

「ま、まあこっちも多分……最低限、僕は敵意がありませんのでそちらに協力したいと思います」

踏みつけられている俺の姿を見て、口を押えてバカにするように鋼凪が笑っていたので俺は唸り牙を剥きながら威嚇していた。

……じゃなくて、苦笑いをしながら虎杖が返事をする。

取り敢えずこれで、千秋と虎杖の協力関係は結ばれたわけだ。

ただ一つ言える事があるとするならば。

その後、放課後の体育館裏で俺と鋼凪が喧嘩をしたことを知つたら、

もう次は千秋が激ギレして折檻してくるかもしれないという事だ。

「…………チツ」

転入初日の騒動から数日後。

俺が起きた時刻は4：27。

いつも学校に行ってる時間は7：00。

遙かに無駄に早起きしてしまった模様だつたため、朝食と弁当を作つたりしていったわけなんだが……。

現在時刻は6：30。

そろそろ眠り姫、千秋を起こしに行くべき時間か。  
つていうかアイツ。そんなに夜更ししてるわけじゃないのに、むしろ夜の8時には寝てるような子供のような生活を送っているのに、何でこの時間までブツ通しで寝れるんだ？

……まあ一番打倒な理由は精神的な疲労だろ？。

容姿のこととでとやかく言われないわけが無い。俺は知らないがイジメなどもあるかもしない。

まあイジメなんて物をされれば、千秋はその倍返しで相手の精神をズタボロにぶち壊すこと間違いないが。

「入るぞー……」

元「コミ屋敷」、現俺の住処であるこの家。

2階まである一戸建てで、まあ物凄く広いわけでは無いが、家族単位で暮らすには問題無い広さがある。

その2階の部屋の一つのドアを開け、俺はノックもせずに中に入る。千秋の部屋。ベットとクローゼット、それに縦長のデカくて全身が見れる鏡……姿見が一つ置いてあるだけだ。

まあ本来なら無駄なプリンタやらペットボトルやら缶やらが散乱していたのだが、つい最近、俺の手によつて全て片付けられた為、現在はこうしてシンプルかつ綺麗な部屋となつてゐる。

……んな苦労話はどうでもいい。

ベットに薄いタオルケットを一枚掛けて寝ている千秋。

秋も暮れ始め、もう一ヶ月しないうちに12月になるのにタオルケット一枚は寒かるうに。

「おい、起きろよ眠り姫

そう言つてタオルケットを引き剥がす俺。

そして、その直後、静かにまたタオルケットを丁寧に掛けて上げたのは、決して千秋を可哀想だと思ってやつたわけじゃない。まさか義妹であり幼馴染のようなものであり親友でもある千秋が裸ワイシャツで寝てるとは思わなかつたからです。

裸ワイシャツでタオルケット一枚…………こいつは風邪を引きたいのか？

「おい、千秋。さつさと起きろ。学校遅刻するぞー」

無理矢理起こす方法から、体を揺さぶつて起こす方法にチエンジ。数秒後、のそりと千秋が起き上つてきた。機嫌が悪そうな顔をして。

「…………ちい、吐くかと思った」

「吐く物も食つちゃいないだろ。さつさと朝飯食え」

そう言つて俺は千秋の部屋から出て行き、1階に下りダイニングに一人分の食事を用意する。

俺はもう千秋を起こしに行く前に食い終わつてゐるから、千秋の分だけを用意する。

十数秒後、千秋が騒がしく階段を下り制服姿で俺に向かつて喚き散らす。

「一輝！ 見てないよね！？ ちいのその…………見てないよね！？」

「ああ、見てない。それにしても人間の体つて凄いよな。昔は貧相だつたものも今では大きく豊かになつてゐるんだものな。俺さつき驚いたやつたよ」

「それつて何の話！？」

「にしても裸ワイシャツにタオルケット一枚は止めておけ。もうそろそろ寒くなつてくるんだから風邪引いちまつぞ」

「見たなあ！？」

千秋が朝から柄にもなく無駄に大はしゃぎしている。何故だろ？  
あ、バカで寝起きだからか。

「おいおい千秋、胸倉を掴むな。行儀が悪いだろ」

「行儀も礼儀も仁義も知つたものかあ！ ちいの恥ずかしい姿を見た限り、一輝の死は確定しているう！」

「恥ずかしいと思うなら、ちゃんと服着ればいいじゃないか。それに俺はお前の裸を見たわけじゃないし、ワイシャツ越しだつたし。それと後、下着越しでもあつたな」

「だからその下着姿が恥ずかしいってちいは言つてるの！」

「ワイシャツが有つた。問題無い」

「うるさい黙れ一発殴つて記憶を抹消してやる一輝のバーカ！」

「ハア…………6：42。賢いお前なら意味分かるよな？」

俺が現在時刻を言つた途端に急いで朝食を摂り始める千秋。

本当、バカつて扱い易くて楽だわ。

そう思いながらテレビを……付けたくても我が家にはそんな物は無いので、新聞を……読みたくても我が家はそんな物を取つていない。

仕方が無いので、携帯でニュースを見る。

政治、経済、その他諸々。スポーツと芸能は除いてる。興味が無いからだ。

暇ならニュースを見る。義父……まあ俺と千秋を引き取つたクソ野郎に昔教え込まれたことの一つで、俺にとつてはちょっとした一環になつてきているものだ。

ニュースは出来事の断片的な部分しか伝えられないが、多くの情報を得られる。

その多くの情報の中には、時々コード使用者が起こした事件も含まれている可能性すらある。

それに、コードなんて異能を持っていて悪用をしないのは平和ボケで頭がマンネリ化したような奴かよつぱど正義に憧れたバカ野郎しか居ない。

だから月一のペースでコード使用者が起こした事件が入つてゐるはず

だ。

そんな風に、義父は言つてたような気がする。  
まあその後に、その事件を見つけられるかどうかはお前の洞察力や  
直観次第だけだ、と付け加えていたが。  
直観なんて哲学的な言い回しでムカついたことを今でも覚えている。  
しかしまあ…………。

「送検中の強盗致死罪の男が逃走。今朝方、この市内で目撃された  
情報あり……か」

「普通の人からしたら怖いね、それ」

朝食を呑み込みながら、千秋がそんな感想を呴く。  
まあそうだろう。普通の人も、普通じやない人も警戒すべき事件だ。  
この市内は思つたよりも物騒かもしだれない。

グダる。 いつそ、 もう本番へ入ってしまおうか?

「……え、今なんて言つた?」

放課後、千秋に呼び出された俺は、誰も居ない、なんとも不気味な教室にて話を聞いていたのだが。あまりにも唐突で、といつか予想の斜め上なことを言つてきただので、もう一度と聞き返してしまつた。

「だから、今日ウチに梓美ちゃんと虎杖君を招いて親睦会をやるからと思つ……」

分かつた。千秋はきつとアホなんだ。

「……ねえ一輝。ちいの話聞いてる?」

「聞いてない。聞かない。聞きたくない」

「何? 梓美ちゃんが来るのが恥ずかしいの?」

よく分からぬが、多分アホの千秋なりに俺をからかおうとしているんだろうつ。

しかし残念。俺は少しでもムカつく台詞を言われると徹底的にそいつを虐めたくなつちゃう性格なのだ。

「……嘘である。しかし千秋の場合は、それは真実になる。」

「まあ恥ずかしいな。わざわざ家に来てもらつてお前の裸ワイシャツ姿を見て帰つてもらうのは。いくら義兄でも恥ずかしい」

「いや、あれはそのええと……つていうか見たんでしょ! ちいのその……朝の姿!」

「見た見ないはこのさい関係無い」

「関係ある!」

「重要なのは、お前がはしたない姿で寝ていた事だ」

「うつ……」

「お兄ちゃんは驚きだ……まさか妹が……血が繋がつてはいないとはいえ、俺の妹がそんな変態趣味に目覚めたなんて……」

「変態趣味つて何!? 一体、ちいが何に目覚めたつていうの!?」

「露出だろ？」

「田覚めてない！」

「いいよ、もう。自分に嘘を吐かなくたって。お兄ちゃんは驚かな  
いよ、妹が露出狂でも」

「そこはむしろ驚くべきでしょー? つていつかちには自分に嘘な  
んて吐いてない！」

「もつとい……お兄ちゃんは妹が露出狂でも見捨てたりしないから。  
むしろ喜ぶから」

「喜ぶつて何! ? 一輝の方が変態じやない! ?

「バカ野郎! 男は皆、変態なんだよ! おっぱいに至福を感じる  
んだよ! ?」

「～～～～～ツ! ! 变態! 最低! 一輝なんか死んでしまええ  
!」

「さて、千秋を一通り弄り終わつたといひで」

「今までの全部[冗談だつたの! ?」

「ああ冗談だ。男は皆、変態なんかじやない。男は皆、狼なんだぞ。  
覚えとけ」

「まあ確かに一輝は狼っぽいけど……」

「俺が狼? つまりそれって………。」

カツコいいつて事か! いやあー、千秋も嬉しい事を言つてくれる。  
本来なら狼つてのは嘔吐きや独りぼつちとかを意味するのに、カツ  
コいいという風に使うとは。

中々良いセンスしてるじゃないか千秋。  
まあそんな事はどうでもいい。

「鋼凧と虎杖を誘つて、ウチで親睦会をしてもいいぞ」

「えつ! ? ホントに! ?」

「ああ。一応あの一人には色々言わなきやいけない事があるし……  
追加で忠告もしどきたいしな」

「……忠告?」

「まあともかくウチで色々と話をしよう。千秋は一人を誘つてくれ。

俺は……まあ料理でも作つて待つてるよ

「分かつた」

そう言って、千秋は教室を出て行く。

さて……… 鋼盆が嫌いな料理は何だらうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

濁川家に四人が集まり、取り敢えず堅苦しそうな俺の話は後回しで料理を囮んだ。

そして大方、食事が終わつた頃。

「濁川先輩つて、モテますよね」

まさかそんな言葉が鋼盆から出るとは思わなかつた。

余談だが、鋼盆と虎杖は高1。俺と千秋は高2なので一応あの二人は俺たちの後輩となる。

それでこの言葉だ。

さらに余談だが、鋼盆は例え自分が死ぬとしても俺に敬意を払うつもりなど微塵も無い。

つまりこの台詞を言われたのは俺と同じ苗字を持つ、千秋である。

「そんな事ないよ。告白とかされた事ないし」

「またまたご謙遜を。ウチのクラスでも時々噂としてでますもん」

そりや、銀髪でオッドアイなんてブツ飛んだ容姿をした奴が学校に居ればいやでも噂になるわ。

まあそれに千秋は何故だかお胸が豊かだし、顔だつて整つている。ダメ人間つぶりを知られない学校では、モテるだらう。

「噂といえばカスも最近噂になつてますね」

「カスじゃない一輝だ」

クソバカの鋼盆が何故だかわざわざこつちに話題を振つてきた。しかし俺の噂？ こいつとの喧嘩以外は特に何かをした覚えはないんだが。

「誰も近付けようとはしない孤独でキザな転校生。まあでもその実態は覗き趣味の変態よね」

「変態は俺じゃない、千秋だ。履き違えるな」

「…………えつ？」

鋼冂は俺の台詞の意味が分からずフリーズして、千秋は顔を赤らめて下に俯いてしまっている。

いやあー絶景。面白いくらいに良い眺めだなあ、おい。

まあそんな事はどうでもいいか。そろそろ本題に入ろうつか。

「で、どうだつた…………俺が作った飯の感想」

「これ、一輝先輩が作ったんですか？ つてきり僕は千秋先輩が作つたんだと…………」

両方ともに敬語を使つてくれる虎杖。いや偉い。鋼冂は是非見習つべきだ。見習え。

「ちい……私は料理とかあんまり上手じゃなくて。一輝に作つて貰つてるの。美味しいでしょ？」

「せ、先輩。冗談はよしてくださいよ。こんなに美味しい料理をこのカスが作れるわけがないじゃ ないですか」

「何言つてるんだよ。俺はわざわざお前が嫌いそうな料理を精一杯憎悪を込めて作つてやつたんだぞ。感謝しろ」

「すいません濁川先輩。食べた料理を吐きたいのでトイレを貸してください」

「おい鋼冂。その前に一つ聞くが……案外割と美味しかつたろ？」

「美味しくない、むしろ不味かつた。『ミミ溜めに捨ててある生魚の

ような味がしたわよ』

「おかわりしたのに？」

「してない」

「僕の分も搔つ攫つていつたのに？」

「くつ…………」

虎杖も雪辱を晴らすように、鋼冂へ言つ。

つていうか取られたのに何も言わなかつたのかよ…………。

「まあお前は素直に『美味しかったです。すいませんでした』って  
言えばいいんだよ」

「何で謝んなきゃいけないの！？」

俺の台詞にまさかの鋼屁ヅチ切れ。しかし謝るのは当然だろ？  
「お前、プライドのせいだわざわざ食材を無駄にするところだつた  
んだぞ。魚を取るにしろ、野菜を育てるにしろ、肉を得るにしろ、  
手間が掛かるんだぞ。本来なら土下座ものを寛容な俺は言葉で謝る  
だけで許してやるって言つてるんだ。さあ早く」

「一輝、無茶苦茶…………」

千秋が呆れる様に言つが、とにかく俺はこの鋼屁に謝らせたいのだ。  
理由？ そこに鋼屁がいるからだよ。

いい加減、ゲームを始めようかな?  
いいやまだか。いやもういいか。いやまだだ。

「……美味しかったです、すいませんでした」

鋼屈敗北。俺勝利。

いやあ、物凄く気分が良い。余の気分は最高潮だぞ。ハーアハッハツハ！

……少し反省しようか自分。

「そう言えば一輝。なんか教室で一人に話があるつて言つてたけど「ん……ああ、そうだな」

千秋の発言で俺は真面目モードに入る。

……つていうか、俺に真面目モードなんでものがあるのだろうか？まあ、どうでもいいか。

「そういえば千秋。《完全干渉》の件はどうなった？」

「んん……あれはまだ市内にいるよ」

「ちょっと待つてよ。《完全干渉》って言つたの？」

険しい顔つきをしながら鋼屈が俺に問つてくる。

「ああ。だがまあ安心しろ、お前が今危惧している事は起こつてい

「…………？ 何を言つてるの？」

「虎杖の《非観理論》は本来のコード入手法以外で手に入れただろ。それと同じ事が《完全干渉》にも起こつてる。詳細は不明なんだがな」

「…………僕が日記帳を見たみたいに、誰かが《完全干渉》が残した何かを見たつて事ですか？」

「そういう事だ。つまりまあこの市内に《完全干渉》のコード使用者がいるつて事になるんだが」

俺は一旦言葉を区切り、少し間を空ける。

理由は簡単。

この先の言葉はあくまで俺の予測であつて確証がない。だから言つ

必要が無いかもしぬないと思つたからだ。

でもまあ、可能性が低いわけではない。一応言つておくか。

「この市内だけでコード使用者が6人以上いる状況になつたかもしれない」

「6人以上？」

千秋が少し驚いたように聞いて来る。

「ココに居る4人。そしてこの市内にいる《完全干渉》。そして今朝方の逃走犯。誰かが逃走の手助けをした可能性があるから6人以上だ」

「……逃走犯って、朝のニュースでやつてた奴ですか？」

「ああ」

虎杖の確認に、俺は短く答える。

「ちょっとニュースの記事を見ておかしな部分が有つたら調べてみたんだ。当時の大まかな状況、それと逃走犯が捕まる以前に何をやらかしたか。どちらとも調べたんだが、おかしいんだ」

「何がおかしかったんですか？」

「直観的に、おかしいと感じた」

「…………カスは頭の中もすっからかんという事が分かつたわ」

「一輝、もう少し論理的に考えようよ」

鋼凧にバカにされた上、悟つたような声で千秋にもつともな事を言われた。

こんな屈辱は初めてだ！ このクソ野郎共が！

俺だって論理的に考えたいが、相手のコードが分からぬ上に、コードによつて事実は変えられてんだから論理的に考えるのは不可能なんだよ！

比較して変わつた部分を見つけるにしても、変更前の情報がない。だから論理的に考えるのは不可！

「上等だ、この尼ども！ 証明してやるよー」

「一輝。言葉遣いをもうちょっとと考えよつよ。そんな興奮しないで「尼？ なんでいきなりア〇ゾンが出て来るわけ？」

何なんだこの女一人は！

千秋はさつきから俺を諭してくるし、鋼冂に関しては尼は隱語じやないほうの意味なんだよバカヤロウが！

「ああ、だから言うのを躊躇つたんだ。ほぼ確實にこうなるから。

「でもなんでそんな風に思つたんですか？ 直観以外にも理由があるから言つたんじゃないんですか？」

「ほぼ経験則だな」

「虎杖君、このカスを相手にしてたら自分が疲れるだけだから氣を付けた方がいいよ」

この四人の中の唯一の良心、虎杖に忠告する鋼冂。

まあ確かに、疲れるだけだから反論もできない。

「ともかく、この市内にコード使用者が集まつてゐる傾向にあるってことだ」

「あ、一輝が無理矢理話を進めた」

「こら、千秋。余計な事を言つんじやない。鋼冂が食いつくだらうが。『と、いうか、別にコード使用者が集まつたとしてもこいつが不用意に力を使わなきゃお互い気付かないんじや？』

お、鋼冂はそつちに食いついたか。よかつた。

「おいバカの鋼冂。一つ良い事教えてやる」

「何？ 言つてみなさいよカス」

「ここに集まつてきているコード使用者の目的は《非観理論》だぞ。

不用意とかは関係無い」

だからわざわざお前ら一人を我が住処へ招いたんだよ。

「でもそんな簡単に虎杖君が《非観理論》の使用者だつてバレることは」

「ある。俺たちが証拠だ。コードには使用者を探せるようなものもあるんだよ」

「…………」

鋼冂が押し黙る。先程とは違つて実際にそうだと分かつてしまふからであるつ。

「まあ、俺たちは《非観理論》……虎杖の味方だ。他のコード使用者に好き勝手にはさせない」

「他の使用者を云つて、目的の人物との関係を持たれると困るからですか？」

「まあそういう事。それにお前を助けて損になるような事は無いからな」

俺はそう言い、食器を洗いに行く。

まあ今やらなくてもいいけど、俺が言いたい事は言つたからな。後は本来の親睦を深めることを勝手に三人でしてくれや。

ほら、グダつてきたグダつてきた。

「……………メール？」

食器も全て洗い終わり、三人がボーダゲームやらトランプなどをし  
て鋼皿が大惨敗している様を優雅に眺めていると、ポケットの中  
何かが振動した。

当然、振動したのは携帯なのだが……メールのやり取りをする友達  
を作った覚えがなければ、俺の携帯のアドレスを知っているのは義父  
と千秋と外国に住んでる知り合いの程度だ。

千秋がメールをしてくるわけが無いし、義父が俺にメールをする事  
なんて無いし、外国の知り合いはゴミ屋敷を掃除している時にしば  
らくメールしないという連絡が来たし、迷惑メール対策もしている  
し。

俺の携帯がメールを受信するはずが無いのだ。

一応メールかどうかを確かめる為に、ポケットから携帯を出す。  
確かにメールを受信していた。だが内容は、

『このメールに本文はございません』

何とも奇怪な物だった。

アドレスも俺が知るものでは無いし、タイトルも無い。そして本文  
も無い。

迷惑メールでも無いだろう。ある意味迷惑なんだが。

「おいカス」

「いきなりなんだ、クソ皿」

「これって、貴方のアドレスなの？」

そう言って鋼皿は携帯画面を俺に差し出してきた。

画面に映されていたのは題名も本文も無い、俺に送られてきたのと  
同じアドレスのメール。

「千秋、虎杖。お前らも今メール受信したか？」

確認を取ると、二人とも頷いた。

……という事は考えられるのは二つ。

一つはこの市内の全員に同じメールが行き届いているという可能性。

一つは俺たちが通う学校の全員にメールが送られた可能性。

一つはコード使用者にのみこのメールが行き届いてる可能性。

多分、これしか俺たち四人の共通点は無いはずだ。

「……ツ！」

俺が思考に耽つていると、またメールを受信した。

『おめでとうございます！ 貴方は参加者に選ばれました！』

本文に書いてある文章を読んだ瞬間、直感的に俺の中で答えは一つに絞られた。

これはコード使用者にのみ送られてきたメール。

参加者……ということは何か面倒事が起こるつてわけか。

そして続けて俺の携帯がメールを受信する。

『ゲームの概要説明 参加者9名のうち一人の勝者を決めるゲームです』

『参加者全員、コード、と呼ばれる不思議な力を持つています』

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいいます』

『参加者が死亡した場合でも、物が破壊されなければ敗退にはなりません』

『敗退条件は、ものの破壊です』

『敗者は参加者の命、それと同等の物の破壊を禁じます』

『勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます』

『例えそれが命であつても』

『なお参加者それぞれのコードは』

『《無影無踪》』『《非観理論》』『《否定定義》』『《完全干涉》』

『《禁思用語》』『《異見互換》』『《結論反転》』『《絶対規律》』

『《干渉不可》』

『《となつてあります》』

『ゲーム開始時刻は明日の0：00からで、』『あります』

『くれぐれも殺し合いと勘違いなさらないよ』。これはあくまで壊し合いで、

『それでは』『検討を祈ります』

そのメールを最後に携帯は静かになつた。しばらく誰も喋らない沈黙が広がる。何が起こっているかを理解する時間である。

パニックを起こして騒ぎ出すか、冷静に判断し落ち着きを掃うかの二つに別れる時間である。

正直、鋼冚がパニックを起こしてほしい。そうすればいくらでもバ力に出来るから。

「一輝、どう思う？」

最初に声を出したのは千秋だつた。案外、皆冷静なんだな。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」

誰もパニックを起こしそうにないので、パニックになりそうな事を言つてみたが結局誰もパニクらなくて俺は物凄く残念だ。

「『非観理論』を使つたら、何を壊せばいいかバレますもんね」

「こつちには『否定定義』がいるからな。そう言つ事だ」

自分が狙われているというのに冷静過ぎる虎杖が少し心配になりながらも、一応答える。

「まあ良かつたのは参加者9名のうち、ここに約半数が集まっていることだ。それだけでも相当有利だ」

「……つまり他の奴らを潰せば後は争う必要は無いつていうわけ？」

口を挟んでくる鋼冚。だがまあ言つては正しい。

「そう言つ事。だけど不用意には動かない方がいい」

「派手に余計に動いたら、他の5人が協力する可能性があるから？」

「ああ。そうすれば不利になるのはこつちだ」

姿を隠すコード。ルールを無効化するコード。全ての事象を観測できるコード。それと千秋のコード。

これだけで他のコード一気に相手するのは無理だ。

「一人ずつ、確実に潰していくってわけね」  
鋼凪。何かお前は人を殺すとか潰すとかそういう面では頭が冴えるんだな。

何だ？ 野生の勘つてやつか？

「でも一輝。まだ一つ疑問に残るんだけど」

「分かつてゐる。賞品のことだろ」

喪失した物の復元。これはコードで行つのだろ。

だが、命まで復元できるのか？ 精神まで復元できるというのか？ 復元できるとした一体、どういうルールのコードなんだ？

人や物を復元できる、それだけのコード。

復元……元に戻す……壊れる前に……壊れる……壊して直して

また壊す……。

壊し過ぎて、物が無くなつて、壊すために直す……元に戻す……復元する。また壊すために。

……ああ、そういう事か。

「参加者『絶対規律』か

「……？」

俺に咳きに、千秋が怪訝そうな顔をして俺を覗き見る。

そんなに心配せずとも、俺は正気だ。まだ正気だ。まだ堕ちてない。

「あひや

正気だ。正気に決まつてゐる。正気じゃなきゃいけない。

自分が誰で何処に居て如何してゐるかも分かつてゐる。

まだ堕ちてない。溺れてない。嵌り込んではいない。

自分がどういう奴だかしつかり分かつて、演じてゐる。

「うひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひやひや

ひやひやひやひやハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

一輝  
?

だから千秋、心配するなって。まだ俺は正常だ。ただ嬉しいだけだ。嬉しくて嬉しく嬉しくてうれしくてうれしくてウレシクテウレシクテ、

「とてもなく気分が高揚しているだけなんだ。  
「みいーつけた」  
探してた者がやつと見つかって、嬉しいだけなんだ。

1

## s1-0 (後書き)

主人公発狂 www

いや嬉しいだけらしいんですけど、  
探し物一つ見つかっただけでここまで笑わなくとも、ねえ?  
これでやっとゲームに進めるよ……ハア。

『干渉不可』は築40年以上の、周りの住民からは魔女の館と呼ばれる雑草や木々が生い茂るボロアパートにてメールを受け取った。

「……『無影無踪』？」

連續して送りられてくるメールの中で、『干渉不可』の興味を一番惹いたものはそのコード名であった。

（……『無影無踪』って、どういう事？ アイツは確か……）

『干渉不可』は『無影無踪』とは面識がある。あるがしかし。

『干渉不可』が知っている『無影無踪』はもうすでに他界しているはずなのだ。

（アイツが生きてたって事……？ そうだとしたら……）

自分がこの手で『無影無踪』の全てをぶち壊してやらなければ。

最初の獲物を定めた『干渉不可』は静かに動き出す。

「ゲームだあ…………？」

雑居ビルの2階にある診療所にて『完全干渉』はメールを受けていた。

やつと仕事が終わったというのに、こんじかこんな迷惑メール。連續して送られてくるメールが癪に障り、思わず携帯を折つてやろうかという思考まで行きついていた。

が、ある文面を見てその気持ちは消え去ってしまう。

『勝者は失つてしまつた大切なものを復元する事が出来ます

『例えそれが命であつても』

その文面を見た途端、『完全干渉』の気持ちが大幅に揺れた。

別に何か失つてしまつた物が、どうしても元に戻したいものがあるわけではない。

ただこの一言が《完全干渉》の今までの人生を否定する」ことになっていた。

だから決める。自分がこのゲームに参加することを。

勝者を出させない為に。今までの人生を肯定するためだけに。

『禁思用語』と『結論反転』は同じ場所でこのメールを受信した。

「……ねえ『結論反転』。手を組まない？」

そして『禁思用語』が提案してきたのが協定であった。

「何故？ お前と組んで最後まで残れたとしてもお前との潰し合いだ。意味が無い」

「うちのコードは独りきりだと基本的に弱い。この参加者の名の中じゃ最弱を誇つてもいいくらいかも。だけどサポートに回ればま

ま強い」

「……つまり、お前の為に組めと？」

『禁思用語』を睨みつけながら『結論反転』は問う。

「そつちの為でもある。もしも最終的に残れたとしたら、あとは最弱の「コード使用者を潰せばいいだけ。リスクが少ないのでしょ？」

「…………まあ、他の使用者が単独で行動するとは限らないからな。いいだろ？」

そして今、『禁思用語』と『結論反転』のコンビが結成された。

「『勝者は失つてしまつた大切なものを復元することができます。例えそれが命であつても』か……」

『絶対規律』は自分の胸に手を当て、メールの文面を音読する。(もしも、これが本当だと呟つのなら……本当だと呟つのなら……)

失つてしまつた命さえも元に戻せるというのなら、自分の望む物は一つしかなかつた。

自分に一番大切なことを教え、一番大切なものをくれたあの人を生き返らせること。

自分のコードを持つてしても叶えられない儚い望みを叶えられるといつのなら。

『絶対規律』は自ら進んで参加する。

『参加者9名にはそれぞれの命と同等に大切にしている物を壊し合つてもらいいます』

その文面を見た瞬間、『非観理論』……虎杖紀亜は困惑した。

（僕が命と同じくらいに大切にしているもの……それって何だ？ 何なんだ？）

物心ついた頃には母親は居なく、父親も夜遅くまで働きその上転勤も多かつた為、友達と呼べるような関係も作れぬまま今まで過ごしてきました。

家でも外でも独りつきり。そんな自分が命と同等に大切にしている物など思いつきもしなかつた。

「どうもクソも無いな。まず最初に狙われるのは千秋と虎杖だ」一輝のその発言で自分が物思いに耽つていたことに気付いた紀亜は取り敢えずその言葉を肯定する。

「『非観理論』を使つたら、何を壊せばいいかバレますもんね」そう自らの「コード『非観理論』を使えば、自分がどんな物を大切にしているかが分かる。

しかし、そうしなければ何を大切にしているかが分からない自分が居る事がとてもなく嫌だつた。

嫌悪感に負け、紀亜は『非観理論』を使用し調べるのを止めた。

(…………ゲームなんて、ふざけてる)

一輝への質問が終わり、鋼冂はそう思つた。

正直、命と同じくらいに大切にしているものを壊し合えなんてふざけたゲームに参加はしたくなかった。

そんな事を考えた下郎を引きずり出して、ボコボコにしてやりたかつた。

自ら行つた復讐以上に酷い目に遭わせたかつた。

しかし、

(…………それをするには、わたしもゲームに参加しなきゃいけない……)

そして勝ち残るためには、参加者全員の……虎杖や濁川千秋の大切な物も壊さなければいけない。

どんな理由を並べようと、その行為は絶対に悪だ。そのくらい鋼冂も分かっている。勝ち残るためには途中で裏切るしかない。

だから決心する。自分が悪党になつてでも自らがしたい事をするために。

(…………わたしは勝者になつて、皆の壊された大切な物を元に戻して、そして主催者をブツ飛ばすッ！)

「参加者『絶対規律』か…………」

「…………？」

一輝がおかしい。そう千秋は直感的に思つた。

自分がした質問の答えとならない言葉を呴き、その顔は何か不気味な笑いで歪んでいる。

おそらく一輝は何かの答えに辿り着いた上で発言しているはずだ。

『絶対規律』。それが失った物を復元させるコードなのか？  
しかしだとしたら、何故、このゲームに参加している？  
このゲームはそもそも出来レースだつたという事なのだろうか？  
だとしたら何故『絶対規律』はこんな醉狂なゲームをするのだろうか？

出来レースならば賞品たて嘘という」となる。たた大切な物の壊し合いの虚しいゲームに変わってしまう。

参加者全員への復讐のため？ それともコード使用者への復讐？ どちらも千秋にはしつくりこなかつた。一輝もきっとそうだろ？

『文部省教科書』に三條春子にないといふ何が何なのか千秋の頭が混乱し始めた時。

一輝が堪えきれなかつたように笑い出した。

一輝  
？

思わず、千秋は一輝の名前を呼んでいた。

一輝がそこまで喜びを示すほどなく、何かに自分は未だ辿り着けない  
でいる。

どこか自分が一輝に置いて行かれているような気がして、思わず名

前を呼んでしまった。

(いやだ……)

千秋は心の中で否定する。拒絶する。嘆く。求める。

(一輝にまで置いて行かれるのは、いやだ……ッ……)

サイド（後書き）

ちょっと色々間違えちゃった。まあいいか

「…………」

目覚めたばかりの頭で携帯の時刻表示を確認する。

現在時刻、8：46。

いつもならとうに学校にいるべき時間だ。

しかし幸いな事に今日は土曜日。俺たちが通つてゐるあの学校は私立校じゃないため、入部もしていない俺がわざわざ土日に行く必要はないのだ。

しかし珍しく体が怠い。頭がまだ全然働いていない気がする。

しばらく天井のシミを数えていると下から香ばしい……いや確実に焦げている臭いが……火事か？

いや、千秋だな。

起動しなかつた脳の活動が急に活発化し、いそいで俺はキッチンへ向かう。

あのダメ人間、まさか料理を作らない俺に対し、料理で故意に火事を起こして殺すなんて暴挙に出たわけじゃないよな！？  
頭の中でいくら否定しても、無意識での殺人という不気味な言葉が浮かんできて仕方ない。

「千秋、何をした！？」

キッチンに行くと、顔中に煤を付けたエプロン姿の千秋が居た。

「…………ごめんなさい」

千秋は自らの罪状を告げずに、俺に謝罪の言葉を言つてきた。  
取り敢えず、キッチンに燃え盛る炎は確認できなかつた。  
火は出でない。しかし何かを焦がしたんだろう。まあ、不幸中の幸いかな。

「ハア……取り敢えず、お前は顔洗つて来い」

換気扇のスイッチを入れ、近くの窓を全開にしながら俺は千秋に言う。

前言撤回だ。何が幸いだ。大不幸じゃないか。よりもよつて俺の秘蔵のDVDをグリルで焼きやがつたよ畜生め。そりや焦げる臭いがしても火が出ないわけだ！ だつて溶けてんだもん！

ホントこの尼、どうしてくれよつが！！

「……だ、だつて……一輝が悪いんじやん！」

「アア！？」

このクソ野郎、俺に罪を転嫁しようとしたやがつて。

処刑だ、死刑だ、極刑だ！

「昨日ちいが覗いた時に、そんなものを見る一輝が悪いんだよ！」

「お前に価値が分かる物じやねえーんだよ！」

一体、俺の何が悪いんだ？

自分のパソコンでDVDを見て、何が悪いと言つんだ！？

俺のどこに非がある！？ むしろ勝手に覗いたうえでグリルで焼いたこのバカ野郎に全ての非があるだろ！

ちなみに、俺が見ていたDVDの内容は……パンダが生みたての実の子供を殺したり、親の酷い虐待映像だつたり、まあ大雑把にまとめてしまえば動物の子供が酷い仕打ちにあつてている映像の類を見ていたわけだ。

「あんなものに価値が有るわけが無いじやん！ あんなの見たつて

「

「俺には価値が有るんだよ。お前なら分かるだろ？」

「分かるかあ！」

千秋が怒号を上げて俺の言葉を否定する。

酷いなー、この趣向を分かつてくれると思つたのに。いや、千秋のコードなら分かつてしまつ。

『異見互換』

相手の主觀性や価値観などを解析理解する。また、相手の視界を共

有することが出来るルール。

それが千秋の「コードだ。

つまり相手の考え方や判断基準を理解することが出来る。

それを使えば、俺の物の価値だつて理解できるのだ。

だがまあ、千秋はこの「コードを大概、覗き見で使つてている。  
相手の視界を共有することができるルールを使い、俺を何処に居るかを確かめてパシリに使つたり、メールを見たかどうかを確認したうえで俺が無視したらしつこくメールをしてきたり、何か俺をパシリに使いたい時に何をしているかを確かめたり。

まあ、最初に俺が鋼皿と虎杖に接触する前にあいつらの居場所が分かつたのも覗き見のお蔭なんだが。

大体は俺をパシリに使うために乱用されている「コードだ。

本当、使いよつてはコード使用者を探せたりするんだが……

使用者が残念なため残念な使い方しかされていない。

「ともかく、俺のDVD焼いた罰として昼食は抜き。決定」

「え、待つてよー！ ちい、そんな事されたら死んじゃう！」

「死ぬほど反省しろとこつ意味だ、理解しろ」

「酷い！ 最低、外道、鬼畜、下衆、悪魔あ！」

「そうだぞ、お前のお兄ちゃんは最低で外道で鬼畜で下衆で悪魔でサディストだ。よーく覚えとけ」

「うに元ヤーーー！」

といつわけで昼飯を作らなくてよくなつたので、しばらく俺はソファに座りながらB4ノートに色々と書き綴つていた。

「ちいはお昼御飯が食べたいです。お願ひします、許してください」と言つ言葉をまるまる無視しながら。

ノートに書いている事は、ゲームの事だ。

よく分からぬあのメールから数日。鋼皿と虎杖には無闇にコードを使うなとは言つてある。

『完全干渉』『干渉不可』『禁思用語』『結論反転』『絶対規律』。この五つのコード使用者が動き出すまでこちらは動かない体勢だ。無闇に動き出さなければ、こちらのコードがバレないから。幸い、俺の予想とは違い、この中に使用者を探し出すようなコードは無さそうなのだ。

コードは大体、名前の通りのルールしかない。

『無影無踪』にしても『非観理論』にしても『否定定義』にしても『異見互換』にしても。

名前通りのルールを有している。

だから五つのコードの名前を……まあ全て漢字だからその一字一字の漢字の意味を徹底的に調べ上げた。

その結果、二つを除いた他の三つのコードは安全と判断。

残った二つ……『完全干渉』と『絶対規律』の動向を『非観理論』を使って虎杖に探らせ、その結果を元に五つのコードには使用者を探し出すコードが無いと判断した。

まあ更に、二つには『非観理論』と『異見互換』の二つがある。両方とも情報収集に向いているコードだ。

まあ『非観理論』には観測した事象には干渉できないという規制があるが『否定定義』もこちらにいる為、規制無しで情報も集め放題だ。

となると、やはり問題は……。

「……『非観理論』と『否定定義』か」

問題となるのはこの一人。今は味方であるこの一人。

まあでも、幸いなのはこのゲームが殺し合いではなく壊し合いという事だ。

殺し合いのゲームならばこの一人を終盤まで脱落させてはならない。死んでは困るからだ。

だが壊し合いのゲームなら、敗退したとしても援助を受ける。死なないから。

しかし普通に考えて、自分が勝ち残りたいから命以上に大切にして

る物を壊させてくださいと言われて『はい、どうぞ』と言つ奴なんてこの世にはいない。

つてなると必然的にあの一人とはいすれ対決することになる。

それはできれば避けなければいけない事態だ。あの一人の援助を受けなくともいいくらいに参加者が少ない終盤でなければ対立できまい。

まあ、一人の合意の上で敗退させる手法はあるが…………できればそれは緊急回避の手段として用いたい。

つまり俺がこのゲームの中盤までやらなければいけない事は一つ。一つは、あの一人のどちらかを敗退させること。しかも自らの手を汚さず。

もしも五人の使用者の誰かを利用して敗北させるとしても、こちらが疑われないようにじく自然に立ち振る舞わなければダメだ。

なんとも難易度が高いゲームだこと。

「あ、カス」  
「…………チツ」

秘蔵DVDが焼かれた2日後。まあようは月曜日。  
昼休み、昼食も食い終わったしちょっと食後の運動として廊下をふらついていたら、鋼皿とエンカウントしてしまった。

よりもよつて「コイツかよ。まだ千秋の方が良かつた。

「カス、今わたしの事を無視しようとしたよな。おい」

「クソ皿、それは大きな勘違いだ。俺はお前を無視よつとしたんじゃない。お前みたいなゴミクズだと思ったんだ」

「カスの皿は節穴ということがよく分かつたわ

「俺の皿が節穴なんじやない。お前のオーラが「ミミ」と同じだけなんだ」

「え？ 何？ 無情に残虐にブチ殺して欲しいって？ 運が良いわね。丁度護身用に改造スタンガンを持ち歩いていたのよ」

「何だよ？ 何ですか？ お前、俺に喧嘩で負けたのもう忘れちやつたんですか？ もう一度、誰が強いか躊躇直して欲しいんですか？」

「上等だよ、コラ。お前ちょっと屋上來いや」

「オオケー、分かった分かったよ。歳上に対する礼儀と作法をもう一度教えてやる」

と言つ風に喧嘩を売られ、言われるがままに屋上へ来たはいいとして。

鋼皿が居ない。というか予め遅れて来るからと言われてある。  
あの野郎……挑発もほどほどにしないとお兄さんブチ切れちゃうんだよ？

「お待たせ」

ただ変化が無い青空を平然と眺めていたら、鋼冨が片手にビニール袋を引き下げて屋上にやつと来た。

まだ昼食を取つていなかつた、というわけなのだらうか？

まあ俺のとつちやどうでもいい事だ。

なんて思つてゐると鋼冨が袋の中を漁りだし、そこから一つ、おにぎりを俺へ向けて出してきた。

「一つあります？」

「何を企んでるんだ、お前は？」

鋼冨が俺に向けて何かを分け『えよつとしただけではなく敬語で話しがけて来るなんて。

絶対に何かを企んでいるに違ひない。間違ひない！

「今から真剣な話をしたいのに、罵倒の仕合になつたら会話になりませんもん」

「……なら一つ、貰つておくかな」

差し出されたおにぎりを奪い取り、十秒以内に食べ終えた。

そのな様子を見る氣も無い鋼冨は、俺におにぎりを取られてすぐにまた袋を漁り、ロロッケパンを取り出し、食べ始めた。

自分はパンで俺にはおにぎりか。まあどつちでも良かつたんだが。

「それで、真剣な話つてのは？」

「…………ゲームについてですけど、わたしの為にわざと敗退してくください」

「…………その話、何で千秋や虎杖にする前に俺に言つた？」

返事よりも何よりも、俺はそつちの方が気になつたので鋼冨に聞いてみる。

驚いたのか、少しばかり目を見開きながら鋼冨はパンを口に運ぶ。

「よく分かりましたね。何ですか？」

「千秋はアホだから、何かあればすぐに俺に伝えてくる。だがお前の今のは初耳だ」

とこうことは千秋には伝えてない事になる。

そこから先は予測だが、おそらく虎杖に先に伝えるとしたら、鋼  
嵐の中の最低優先度にある俺に話すよりも前に千秋に話をするだ  
ろ。」

しかし千秋に話をしていないという事は、もしかしたら虎杖にもし  
てい可能性が割と高い。

まあ入ってのは無意識に番付通りに動こうとしたりするからな。  
もしかしたら、と思って言つたら当たつっていた。たつたそれだけの  
話だ。

「なんやかんやで、わたし達のグループでのリーダー格つて言つた  
ら貴方じゃないですか」

「そうか？ リーダーがいるグループだつたらもうちょっと統率性  
があると思うんだが」

「一番リーダーっぽい人つて意味ですよ。濁川先輩が頼つてるから  
でしょうけど」

「違うな。きっと俺のカリスマ性が自然と溢れ出ている結果だろ？」

「……………」 そんなわけで、一番最初に話を付けるべきは貴  
方と思つたわけですよ

「んじゃ、一番最初に聞かれた者ひじく振る舞うナビも。お前は勝  
者になつて何をしたいわけ？」

俺が鋼嵐の瞳をしつかり見て聞くと、鋼嵐は視線をずりすりとなく  
答える。

「こんな最低なゲームを考えたクソ野郎をぶん殴つてブツ飛ばして  
やりたいと思つてます」

「その為に、お前は他の8人の参加者の命と同等に大切にしてる物  
をブチ壊すと？」

「壊した物は、勝者の権限で全部復元させます。これが悪い事だと  
いう事も自覚して、貴方に頼んでるわけです」

「……………」 お前、大切な物を目の前で壊される痛みを知つてゐるか？  
「知つてますよ。わたし、実は家族を目の前で殺された経験がある  
んです」

「そりゃ……なら、なおさらだ。お前は他の8人にもあの痛みを味あわせる事になるんだぞ？」

「……分かつてます。だからこそ、そんな痛みをこれからも多くの生み出す可能性があるものを潰すんです」

「その大義名分のためなら、自分がいかに悪魔や下種や鬼と呼ばれても構ないと？」

「…………その覚悟くらいにはあります」

最後の言葉を言い切るまでしっかりと俺の瞳を見続けた鋼仮。ちよつと無駄話をするが、どこかの心理学の本に『異性に嘘を吐くときは、大概の人間が相手の目を見て話をします』なんて物が書いてあつた。

まあそんな余計な知識で、バカが考えたバカなりの誠意を無為ににするのは可哀想だろう。

だから俺はしっかりと返事を返してやる。

「断る」

「やつぱりですか……」

予期していたのか、鋼仮のショックはあまり大きくなかった。

「まあそんな強い意志があるなら、誰かに頼み込んで負けて貰うんじゃなくて、無理にでも勝てよ。そうじやなきや、敗者がやりきれないだろ」

「そうですか……そうですよね」

心のどこかでは諦めていたんだろう。どうせ交渉相手が俺だしな。

「でもまあ……お前の意志は少しばかり貰つてこぐよ」

「…………えつ？」

「奇遇な事に、俺も目の前で一度ばかり大切な物がブチ壊れたことがあるんでな。こんなクソつまらないゲームを考えるクズ野郎をぶん殴つてブチ飛ばすっていう意志くらいは、共有してやるよ」

そう言いながら、俺は鋼仮に手を振りながら屋上を後にする。

意志（後書き）

ダラダラしてると、展開が。  
つまりん。 まだ あたは好きではないぞ。  
俺。

今、俺は無謀な挑戦をしようとしている。

それは『無影無踪』を最大利用した作戦……その名も、NOZOKI。

まあ簡単に言えば、変態行為をするだけなんだけどな。

「で、なんで僕まで呼ばれたんですか？」

「当然、当作戦には『非観理論』の協力が必要だからだよ虎杖君」

「いやですよ僕は、鋼凪や千秋先輩とかに殺されるのは」

「鋼凪は大丈夫だ。アイツはコードを無効化できるがコードが使用されてるかどうかまでは分からない」

「でも千秋先輩が」

「そう問題は千秋なんだよ」

千秋のコードは『異見互換』。

視界を共有できる、という厄介なルールがある。

このコードによるバレを防ぐ手段は一つ。『否定定義』による無効化と本人がコードを使用していない時しか思いつかない。

『否定定義』……鋼凪梓美の協力を借りれない今、千秋がコードを使用しないように祈るばかりだ。

「一応、今朝のうちにコードを使用するなとは千秋に言つておいたが……アイツが俺の言いつけを守るとは思えない。この前だつて、勝手に覗かれてDVDを一つ失ったからな」

「そもそも、千秋先輩のコードがあれば覗き放題なんですけどね」「んなもんは分かつてるさ。しかし俺たちでやるしかないだろ?」

「すいません一輝先輩。勝手に僕を人数に含めないでください」

「なんだよ虎杖、ノリが悪いな? お前は女の半裸を見たいとは思わないのか?」

「いや、そんな事はないんですけど」

「なら何故!?」

「……正直なことを言いますけど、着替える女子はそこまでエロくないですよ？ 冬場だと特に、体育の授業でもジャージ着たりしますからなおさら」

「…………」

「そんじゃ僕、帰つていいですか？」

「いや、ちょっと待て！ まだだ！」

「いやもつ、わざき心の中で僕の言つたこと納得したでしょ？」

「ぐうう…………」

「大体、「コードの乱用するなつて既に言つておいて覗きのためにコード使つたことが知れたら、鍋底に今まで以上に軽蔑されますよ」

「コードは私利私欲のために使うものだ」

「…………輝先輩つて、そこまで変態でしたっけ？」

「んー……まあ、男はみな狼だからな」

「意味分かりませんよ」

「仕方ない、それじゃネタバレするか。

「千秋には、そろそろ仕掛けるからコードを使つな、つて言つておいたんだ」

「そろそろ仕掛けるつて……ゲームの事ですか？」

「ああ。まだから《非観理論》と《無影無縫》を無駄に使用して、相手方を誘き出させて貰つ

「だとしても、何故に覗きなんですか？」

「ド派手な事件を起こすよりかはマシだろ？」

「まあ、そうですけど……覗きじゃなくたつていいじゃないですか」

「《無影無縫》と《非観理論》の共通点は、相手に見えないってことだ。そこで問題。男が姿を消せる力を持ったとして大半のド変態は力をどうしようとする？」

「覗きつてことですか…………でも僕、ド変態扱いされるのが非常にムカつくんですけど」

「まあド変態とかは置いといて、正直な所、相手に俺を《非観理論》の使用者だと思わせたいんだよ」

虎杖が怪訝そうな表情をしたので、追加で説明する。

「俺の『非観理論』の使用者だと勘違いしてくれれば、その『コード

使用者は無駄足しか踏めない』

「『無影無踪』で命より大切な物を隠されてしまつてるから?」

「そういうことだ。俺を殺そうとしてもそう簡単に殺されないからな。時間が稼げる」

「でも『非観理論』なら、どんな奴からでも簡単に逃げ出せると思ふんですけど」

確かに『非観理論』は、全ての者に観測されないと『ルール』もある。

しかしどが『非観理論』を捕まえる方法などいくらでもある。

「お前はあくまで観測されないだけで、その場から消え去つたわけじゃない」

「そうですが、どうしてひしめく認識されなきゃ捕まらないじゃないですか」

「それじゃ考へが甘いって言つてるんだよ。実際に証明してやる、ちょっと来い」

不服そうな顔をしながら虎杖は俺の後に付いて來た。

計画通りッ！

「いやまさか、一輝先輩の口車に乗せられて加担するとは思つませんでした」

「口先の魔術師になれるとは思わないか?」

「同じイニシャルだからってあまり調子に乗らないでください」

虎杖は無表情ではあるが声に怒りが含まれる。

まあまあ、保健室だから良いじゃないか。

しかし、まさか今日という日に検診があるとは。なんたる偶然。ご都合主義。

「あ、入つてきましたよ

おうおう良い眺めじや良い眺めじや……ん？

ぞろぞろと保健室に入つてくる女子たちの中に、鋼仮と千秋を発見。あ、やばい実験中止だ。バレる可能性が高いとかそういうのじやない。死ぬ。

しかし、俺は《無影無踪》で姿を消している。虎杖に脱出の合図を送りたくとも送れない。

さて……どうする？ 虎杖を置いて俺だけ脱出するか？ いや、そんな外道なことは……。

「……一輝？」

千秋に名前を呼ばれた瞬间、背筋がゾクツとなつた。というか死亡フラグだ。回避不可能な死亡フラグだ。

「どうしたんですか濁川先輩？」

すぐさま鋼仮が千秋に問う。つていうか問うな！ やめろ、俺をここまで殺したいか！？

「ん……何でも無い。気のせいだと思つ」

まさかのフラグ回避！？ いや、千秋のバカさ加減に感謝する日が来るなんて。

「はい、それじゃあ上脱いでね～」

保険女医がそんな指示を出す。俺は鼻を押さえる。

いや、ただ千秋の無駄に豊かに育つた爆弾の対策だ。千秋といふとを忘れれば意識と血液を持つてかれちまう。

覗き（後書き）

タイトルからして、**酷い。**

いや俺酷い。凄く酷い。発想が酷い。全て酷い。人格が酷い。

引き続き、保健室にて。

出血はせず、どうにか一人とも生き残っている。

しかしそろそろ外に出なければ、鼻から出血されてしまう。

それにして虎杖の奴、一切表情は変えずに鼻だけ押さえて……ムツツリが。

「ムツツリとかそういうのどうでもいいでしょ」

まあそうだけども、何の覗きをしてるのに表情を変えないのは不気味だぞ？

「覗きをしたくてしてるわけじゃないんで」

だつたら部屋を出でけよ。このムツツリスケベ。

「一輝先輩、マジで一発殴らせてもらつてもいいですか？」

……なんて、何故か俺は一言も発せずに、虎杖との会話が成立してしまった。

それ程に、覗きという文化は男子にとっては共通語なのかもしれない！

しかしそれにしたって、千秋のが目にちらついて仕方が無い。

意識はしないようにしているんだが……クソ、アイツいつからあんなに大きくなつてたんだ？

「あ、次は千秋先輩の番ですね」

……ちょっとついて行くか。

「行くつて……こきなりどうしたんですか？」

お前、少し女子の胸やら脚やらを見た瞬間は興奮したけど、もうそろ飽き始めただろ？

だから少し気晴らし程度に動こうじゃないか。

「……まあ、どんな理由であれ、ここから動けるのは幸いですね」というわけで千秋のあとをテクテクとついて行く男子一囃。

よくよく思つたら、ひとつ隠れることなく見てているんだよな俺た

ち。

「コード」というのは全くもって便利なものだ。

「……一輝先輩、あれって」

そして千秋の後について行つた結果、俺たちが目撃したのは……検診で来た医師が、男だということ。

。

このクソ野郎がああああああああああああああああああああああああ

俺たちのように「コード」を使わずとも覗き放題だということのか！ ええ！？

こんな覗きの方法……おかしいだらうが…………ツー

こんな方法……卑怯だらうがあ！

あの男医師、今すぐにブツ飛ばしてやる……

「一輝先輩、落ち着いてください」

冷ややかな声で虎杖から抑止される。

お前は……許せるというのか！？ この男医師を！

俺たちのようになんかと覗き見るのはなく、堂々と女の半裸を見れるこの男を！

「いや僕たちも割と堂々と覗いてますよ？ 普通なら犯罪ものを堂々とやつてのけてますよ？」

んな事はどうでもいいんだよ！ 感情論、気持ちの問題なんだよ！

「バカは黙つて覗いておけばいいんですよ」

それでも俺はあの男医師が許せない…………ツー

しかし無駄に自分の姿を晒そうものならすぐに教育指導になつてしまふ現状なので、虎杖の言葉に従つて俺は戻つて女の半裸を舐め回すように覗まくつていた。

しかし普通おかしいだろ。

こういう女子の検診の時は、大概女医がやるもんじゃないのか？

まあ俺は、女子じゃないから分からなが。普通に考えて男医師に診てもらうよりも女医に診てもらつた方が同性として安全するんじやないだろうか？

最近はちょっとしたことでセクハラになるような世の中だ。

こういうのも、ここにいる生徒の誰か一人が親に言つて、そして親が学校側に文句を言う可能性だつてある。

だからこういうのは普通、俺の考え方だと、女医がやるといふのには男医師は！

野郎……思い出しだけでムカついてきた。やつぱ一発ぶん殴つてやろうつか？

大体、今日の検診だつてなんでこんな冬場にやるのかつて話だ。そもそも何の検診なんだよ？ 千秋がどこか不健康だつていう話は聞いたことがないぞ。

いいや、そもそも最近は俺がアイツの生活を管理してやつてるから不健康かどうかは医者よりも俺の方が分かること思つ。そして俺の見立てじや、千秋はどこも不健康じやないと思つ。

なのになんで検診？ 健康検査で一度引っ掛けからないと検診にはならない。

確かに春頃に、少し体調を崩してて検診に引っ掛けたというのなら納得いくが。

何故、春に行われた検査の再診が、秋の暮れなんだ？

偶然？ ご都合主義？

それは本当に、俺に合した都合だつたのか？ 俺に合した偶然だつたのか？

いやそもそも誰かが何かに合わせたんじゃないのか？

例えば…… そう。

鋼屈梓美と濁川千秋の両名はコード使用者であるゲームの参加者だ。

そのゲームが開始されたのはつい最近。

ゲームでは使用者の命と同じくらいに大事な物を壊し合つていうものだ。

だからこそ使用者の両名は常にその大事な物を持ち歩いているはずだ。

そこで例えばこんな検診中。教室にその大事な物を置いておけるだらうつか？

学校の治安とかは関係無しに、誰かに盗まれる可能性がある。さらには盗まれたりした時にいつかりとした事で壊されてしまう可能性も無くも無い。

だから、検診中であれ大事な物は持ち歩く。まあそれが普通だ。そして次に、男医師についてだ。

俺の常識から言って、こういう女子の検診は男医師ではなく女医がやるものだ。

なのに男医師というのは少し学校側にとつてもリスクを生じる部分がある。

だがしかし、世の中には学校側にそのリスクを忘れさせる方法がある。

いいや、その方法を使えば無理にあるはずのない検診をでつち上げる事も可能だ。

その方法の名を…………俺たちはコードと呼ぶ。

「ツー！」

「きやつー？」

覗きによつて心が通い合つた虎杖が、千秋を無理矢理その場から突き飛ばす。

俺は姿を晒し、保健室のドアを《無影無踪》によつて消し去る。さあて、こつちが仕掛ける前に相手方が接触してきやがつた。壊し合いで開始だ。

## 直前回避（後書き）

……あるえ？

おかしいな、つこさつきまで覗きをしてたスケベな話だったのに。  
何があったんだろう？

姿を晒すと言つても、そんないつまでも晒していたら「ややー、覗き魔！」と善からぬ称号を貰つてしまつ。

そんな称号は貰いたくないので、一瞬でドアに触れ、そして自分の姿と保健室のドアを消した。

そしてそのまま敵前逃亡！ だつて、一瞬であれバレたら逃げるが覗き魔の常識だから！

「……あの力ス野郎！」

俺の姿を一瞬捉えてしまつた鋼屈は、追う様に保健室を出る。虎杖も『非覗理論』で隠れたまま、保健室を出る。

「待つて、梓美ちゃん！」

千秋は多分、冷静に状況を把握し、いきなり出て行つた鋼屈を追う様に、自然と保健室を出る。

これで、全員逃亡は成功だ。

次に考へるべきは、相手のコード。

学校側の人間に無理に検診を設けさせ、さらには女医ではなく自分を推薦させるようなコード。

簡単にまとめれば相手の思考を捻じ曲げるコード。

九つのコードの内、そう言つたことができるものは『完全干渉』『絶対規律』『結論反転』の三つ。

……と言つても俺が勝手に予測したルールでの判断だが。

まあ後で虎杖に『非覗理論』を使って調べさせればいいことだ。ということは、四人で一度合流しなければいけなくなるか。

保健室から一定距離以上を離れたので、立ち止まり、姿を現す。ポケットから携帯を取り出した直後、誰からか着信する。と言つても誰だかは分かつてゐる。千秋からの電話だ。

「千秋、無事か？」

『一輝こそ、敵に捕まつてない？』

「敵に捕まる前に、教師や鋼凪に捕まりそうだ」

『これにこりたら「コードを乱用して覗きなんてしない」と。分かつた?』

「お前に、お前の「コードだけには言われたくない」

『まあ、確かにね』

「特別教室棟の2階と3階の間にある踊り場。他の一人にメールで伝えておいてくれ」

『分かった』

千秋がそう言つと同時に電話を切る。

まだ一番最後に出たはずの千秋が捕まつてないとなると、まだ相手は動き出していくのか。

一応、医師と来たから仕事は最後まで責任もつてやるつもりとかか?つまりそれは最後まで他の女子の半裸を見続けるつてことかこん畜生絶対にぶん殴つてやる。

息継ぎせずに男医師(仮名)への怨念を再確認しながら、俺は自らが指定した集合場所へ向かう。

「覗き魔」

鋼凪は集合場所についた瞬間に、それより前に来ていた虎杖と俺に向かつてそう言った。

「いや僕は一輝先輩に無理矢理連れて行かれただけで」

「そうだぞ。虎杖は女子の半裸を見たつて表情一つ変えないムツリスケベなんだ、責めるなよ」

「一輝先輩一発ぶん殴つてもよろしいでしょ?」

鋼凪がジト目で虎杖を見るからつて、俺に八つ当たりすんなよ。

「変態、最低」

鋼凪は最後にそう言い、それ以降口を閉じてひたすら男一人を睨み続けていた。

「ちい……私が最後かな?」

「ああ。そうだ」

千秋の到着と同時に、作戦会議に移る。

「虎杖、鋼凪は《非観理論》での医師が誰だか調べてくれ」

「分かりました」

鋼凪は返事をせず、虎杖だけが返していく。まあ実質、調べるのは虎杖だけだからな。

「千秋はコードを使つな」

「何で？」

「俺の予測だと敵は《完全干渉》《結論反転》《絶対規律》の三つのうちのどれかだ。《完全干渉》だった場合、逆算されてお前のコードがバレるかもしない」

「分かつたけど……私に何かできることがある？」

「《完全干渉》じゃなきや、有るんだが」

「残念ながらその《完全干渉》があの男医師の「コードみたいですよ」と調べ終わった虎杖が、そう答える。

《否定定義》によつて《非観理論》の規制が解けたからなんだが……」の連携は痛手になるかもな。

「なら今回は《無影無踪》《非観理論》《否定定義》の三人でいく。千秋は……まあ、お留守番でもしてろ」

「一輝、言い方が酷い……」

まあでも仕方が無いだろ。今回のスタメンではないんだから。さて、スタメンのスタメンによるスタメンのための戦略を立てようではないか。

「鋼凪、《完全干渉》のルールについて教えてくれ」

《否定定義》と《非観理論》は過去に《完全干渉》と対峙したことがある。

……と言つても、あの男医師と対峙したわけではないんだが。取り敢えず、誰が使おうとも《完全干渉》は変わらない。

「……自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干渉できるつてルールよ」

「他に特典は？ 『非観理論』みたいな規制とかそんな感じの」「特には。ただ『非観理論』の他者から観測されないってルールが通じるから……多分、カスの『無影無踪』によつて消し隠れるルールも通じるとは思つ」

「そうか、それは朗報だな」

「でもわたしと虎杖君の二人だけで十分よ。一度『完全干涉』を漬けたことがあるから」

「いやでも」

「確かに、虎杖君は覗きをした。でも本人の主張だとカスに嵌められたからだと言つてるの。それに間違いはない？」

「ええ、まあ」

「そう。じゃあ覗きの主犯格であるカス野郎はここで地に這いつくばるよつて土下座しながら反省してなさい。濁川先輩、監視お願ひします」

「うん、任せておいて」

「それじゃ、行つてきます」

「行つてきます」

「行つてらつしゃーい」

えつ？

え、何？ 何が今この場で起つたの？

もしかして俺、鋼凧に言いくるめられて、置いて行かれた！？

「一輝」

俺の肩に手を置いた千秋は一輝。

「土下座」

つまり本当に俺は鋼凧のようなバカに言いくるめられて、義妹の前で土下座をしなければならないピンチに陥つたということか。いやまあ、悪いのは全部俺だから仕方が無い様な気もするんだけどね。

## 作戦会議（後書き）

まあ、覗きは犯罪ですもんね。  
コードとかいう異能とか関係無しに上下座するべきですよね。  
主人公とか関係無しに。

## 説明不足

『完全干渉』…………… 春永 氷雨はるなが ひさめは、未だ保健室にて検診を続けていた。

本来なら、『異見互換』もしくは『否定定義』を捕え、命と同等に大切にしている物を破壊しているはずだつた。

しかしそれよりか前に、『無影無踪』と『非観理論』が動き出してしまつたため計画は中断。

彼らが保健室を出た時、無理に追いかけることはできかた、それをすれば氷雨の大切な誇りを穢してしまつため、仕方なく検診を続けていた。

保健室にいた女子生徒も女医も『完全干渉』によつて記憶を改竄され、四人……正確には、姿を現した三人が保健室に居たことを忘れてしまつてゐる。

無駄に騒がれても困るのは氷雨自身だからだ。

四人に脱出されてしまつた今、氷雨の最速で最適な行動は、検診を終えて四人を追うこと、である。

機械的に女子生徒を診ながら、少しばかり氷雨は後悔していた。

検診に來た医師、という設定でなければ氷雨はすぐに彼らを追つことができた。

しかし医師という設定が、今氷雨をこつして保健室に縛り付けている。

最後の女子生徒を診終わると同時に、氷雨は『完全干渉』によつてまた記憶を改竄し、すぐさまに保健室を出る。

『完全干渉』のデフォルトでの干渉範囲は20メートル。

おそらく彼ら四人全員がそれよりも離れた場所に移動したはずだ。しかも『完全干渉』のデフォルトでの干渉時間は5分。

氷雨のコードは最大5分しか使えず、しかもコードの使用を止めたからといってまた5分使えるわけではない。

氷雨本人にもいつコードの制限がリセットされるのかはイマイチ分からぬが、夜寝て朝起きたリセットされていた。

睡眠を取ればリセットされるのか、それとも24時間でリセットされるのか。

それは分らないが、取り敢えず今は関係の無い話だ。

ともかく《完全干渉》を無闇に多大に使用することはできない。記憶の改竄も一瞬でやってのけたことだ。もう一度と使いたくはない。

いや、無闇に多大に使用する必要は無さそうだ。

二人が……《非観理論》と《否定定義》の一人がわざわざ自分の元に来たのだから。

……時間は少し前に遡り……

「あれ？ 一輝、土下座しないの？」

「するが、するわけないだろ」「

踊り場に残された俺と千秋。まあくだらない雑談をするしかないわけですよ。

「つていうか一輝、どこ行こうとしてるの？」

「戦の地だよ」

「二人の後を追うつてこと？ 確かにちょっと心配だけど

「心配の域を超している。危険だ」

俺は断言する。断言するに足りる根拠もある。

「《完全干渉》は俺たち四人のコードをもうすでに知ってるはずだ」

「……知つていてるからこそ、ちいと梓美ちゃんを狙つたの？」

「鋼皿はコードが発動されることに気付かなければ《否定定義》を使わない。千秋の《異見互換》は攻撃性が一切ないコードだ。《無影無踪》で隠れられたり《非観理論》で予知されて逃げられるよ

りか、全然捕え易い」

もしも俺と千秋、鋼屈と虎杖の「コード」が逆だったら、女子ではなく男子の検診になつてただろう。

あくまで俺の予測ではあるが。

「でも、今は梓美ちゃんだつて警戒してるわけだから《否定定義》も使える。さつきよりか安全だと思つよ」

「どうだか」

千秋の言つた言葉は半分正しい。でも半分は間違つてる。

「さつきまでは気付かれずにコードを発動して一人を捕えなきやいけなかつたが、今は違う。ド派手にコードを使つてくる。《完全干渉》は時間制限のあるコードだ、ド派手にコードを使った方がやり易いに決まつてる」

「でも二人は、一度《完全干渉》を倒したことがあるんだよ?」

「それが油断に繋がる」

とこりうか、多分もう鋼屈と虎杖は油断している。

さつきの《完全干渉》の説明の時に、言い忘れた事が多分あるからだ。

「《完全干渉》は自分を中心とした半径20メートルの範囲を5分間、干渉できるつてルール。それは分かつた。だけどその干渉範囲は常にそつなの? 干渉時間は常に5分なの?」

「……あ」

そんな事は鋼屈は言つていなかつた。俺にそんなことは説明しなかつた。

まあ、元々俺を戦いに参加させる気が無かつたからかもしれないが。

「多分、鋼屈はそれぞれ最大範囲、最少時間で答えたんだと思つが

…………そこら辺が油断の元だ」

「なんで?」

「その情報は《非観理論》で調べた信憑性が高い情報ではない可能性がある」

「……? どうしてそう思うの?」

首を傾げながら千秋が問つてくる。

「俺が鋼凪に『完全干渉』のルールについて聞いた時、鋼凪は一切虎杖に確認を得なかつた」

「それは、梓美ちゃんが『完全干渉』のことを虎杖君より知つてゐからじや？」

「虎杖より詳しいわけないだろ。『非観理論』は全ての事象を観測できる、言つてしまえば辞書のようなものなんだから」

辞書よりも、ネットよりも、パソコンよりも、人間の脳が記憶という概念で勝るわけがない。

「鋼凪は虎杖に一度も確認を得なかつた。そして虎杖は一度も説明の時に口を挟まなかつた。だからもしかしたら……『非観理論』で『完全干渉』のルールを調べてないかもしない」

「それって…………考え方によつてはピンチじや」

「ピンチかもじやなくて、ピンチなんだよ」

鋼凪は最大干渉範囲が20メートルだと思つてゐる。

しかし、もしかしたら、場合によつては、その情報は偽である可能性がある。

いや、偽であるうが真であるうが、このままだと鋼凪たちは負ける。

「千秋、あの二人は今どこにいる？」

「…………保健室近くの廊下…………もう『完全干渉』と対峙しちやつてる」

もう対峙しちやつてる、か。

……チャンス、良い機会かもしれない。

『非観理論』も『否定定義』もいざれ敵に回つてしまつ『コード』だ。

もしここで『完全干渉』によつて大切な物を壊され、敗退してしまつたとしても、殺されない限りは一人の協力を後々も得られる。つまりここは、序盤戦の山場かもしれない。案外早いものだ。

この戦いで、最低限一人の『コード』使用者が敗退する。

未確定のこの結果を確定させるには、俺の援助は少し遅らさせなければいけないかもしれない。

考えがまとまると共に、俺の進路を邪魔するものを『無影無踪』で

消し去り始める。

## 説明不足（後書き）

最低ですよねこの主人公。ホントマジ最低。  
クソつてくらい最低、外道、下種のカス主人公ですよね。

「虎杖君、事前に確認しておくけど……《完全干渉》の大事な物つて何？」

「……免許証、紙の医師免許証だ」

「何でそんな物が？」

「大切な物なんて人それそれだろ」

そんな話をしているうちに、僕と鋼凪は《完全干渉》の前に着く。

「……そつちから来るとは、楽で助かる」

そう言うと共に、男医師は片腕を振るう。

それに伴つて、無数の氷の針（？）のようなものが現れ、こちらに向かつて猛スピードで……ってヤバッ！

鋼凪も僕も、頭を抱えながらしゃがみ込み、どうにか氷の針をかわす。

「鋼凪！ 何でコードを使わなかつたのさ！？」

「何を否定したらいいか分かんなかつたのよ！」

そうだった、鋼凪はそこまで頭の回転が速いわけじゃないんだつた。それに僕も何を否定したらいいか分からぬ程、テンパつっていた。奇襲なんてされるとは思つてなかつたから。

これは自分の考えの甘さのせいだな。

「虎杖君、わたしがアイツに突つ込むからサポートよろしく」

「……鋼凪、分かつてるのは思つけどこの前の《完全干渉》とは違つて……」

「分かつてる。殺す部分を身包み引っ張りながら免許証を取るつていう風にええればいいんでしょ？」

ダメだ、鋼凪は力押しでこの勝負を終わらせる氣だ。違いを少ししか分かつてない。

しゃがんでいた姿勢からクラウチングスタートのように突撃する鋼凪。

干渉範囲である20メートル圏内に入つて2秒後。

「1秒後、両側から氷の壁で押し潰される」

「否定」

鋼凧の声と共に、微かに集まり始めていた水蒸気が元の場所へ霧散する。

「1秒後、左膝を狙つて氷柱が地面から突起する」

「否定」

直後、床に凍りそこねた水蒸気が水分となつて水溜りをつくりだす。「2秒後、右肩、左胸、腹部、左脛、右踝を狙つての氷柱と天井が崩落」

「全否定」

水蒸気は元の居場所へ戻り、崩れかけた天井は普段通りのヒビが入つていらない状態へ戻つた。

これが鋼凧と僕の作戦。

『否定定義』はコードなどを無効化するという強力なものが、鋼凧自体は、駆け引きや相手の行動を読むことを苦手としている。得意なものは『否定定義』を使った力押し。「ゴリ押し。猪突猛進。」だがまあ、そんなことをすれば半径20メートル以内を自由に干渉できる『完全干渉』にあつさりとやられてしまう。

それを避けるため僕は『非観理論』を使って、『完全干渉』が鋼凧に仕掛ける攻撃を全て先読みし彼女にそれを口頭で伝える。その攻撃を鋼凧はただ否定するだけ。それだけでコードを使った攻撃全てが無効化される。

ある意味凄く恐ろしい。相手の策略や思惑を全て跳ね飛ばし、相手の元へ辿り着いて止めを刺せるのだから。

この鋼凧の猛進を止める術はただ一つ。僕を口を塞ぐ…… ようは僕を潰してしまえばいいのだ。

しかしそれも叶わない。

何故なら『非観理論』には他者から観測されないというルールがあるのだから。

観測できなければ、干渉できない。つまり『完全干渉』は僕個人に攻撃をするどころか、僕がどこに居るかも分からぬ。僕が干渉範囲である20メートルに入つても気付かれることはない。だから鋼屈への僕の予知が途切れることはない。

この作戦、僕もちょっと走らなきゃいけなくて疲れるけど、確実に

『完全干渉』を倒せる。

鋼屈の猛進を止める術はもう無い。

氷雨はなおも鋼屈へ攻撃を仕掛けながら、冷静に状況を分析していった。

こちらの攻撃はどんな死角や大量に同時に仕掛けても全て無効化されてしまう。

先程から氷雨には鋼屈の「否定」という言葉しか聞こえないが、それは多分、観測されないルールを使用されているからだ。

つまり正確にいえば、こちらのどんな攻撃も全て予知され、全て無効化されていいるというわけだ。

まったく小賢しい……。

氷雨は苛立ちと忌々しさを感じて少し嘆息を吐く。

鋼屈の聴覚に干渉し、虎杖の声を聞けなくしてしまおうか。

……ダメだ。聞こえなくなつた瞬間にすぐさま無効化されてしまう。

鋼屈の周りの音に干渉することも無駄な足掻きだ。

虎杖本人に攻撃を仕掛ける事すらできれば、鋼屈を討ち取ることなど容易いのだが……。

本人を観測できなければ、干渉する事も叶わない。

……いや、一つだけ虎杖に干渉する方法がある。

虎杖個人を干渉することが不可能ならば、全てを同時に干渉すればいいだけだ。

「……？」

鋼凧に対する攻撃が途絶えた。

諦めた……いや、そんな簡単に諦めるわけがない。

……もしかして逃走経路を確保しようとしているのか？

そう思い、僕はすぐさま《非観理論》を使って相手の行動を未来予知をする。

それを行つた事は間違いでは無かつた。でもタイミング的には遅かつた。

「虎杖君……？」

指示が途絶えたことにより、鋼凧がこちらを向いて僕の姿を確認しようとする。

それと同時に、《完全干渉》が片足で思いつき床を踏む。「鋼凧！ アイツ、干渉範囲全体に氷柱で攻撃してくる！」

## 対戦（後書き）

氷雨の考えを補足すると「取り敢えず全部攻撃すれば、当たるだろう」とことです。

言い換えるなら、下手な鉄砲数撃ちや当たる。

周りに迷惑が掛かりますので、皆さんは真似しない様にしてください。

## 「ツ 否定！」

僕の声と『完全干渉』の全域攻撃は同時にたたかれた

それでも僕たちに攻撃が届くよりも鋼正のほほ反射的に発動した《否定定義》が無効化するのが早かつた。

力押しの達人たけはある。僕なら絶対反応できなかつた。しかし油断するのはまだ早かつた。

# かぶね毛たち 『非鉤理譜』

『完全干渉』のその一言で、僕は自分の過ちは受け  
僕は元々がら空きだ。何故ならそれは他者から観測されないルール  
を発動しているから。

それゆえ干渉もされない。だからその言葉は僕がかかるにあたらしい事を示しているのではない。

示しているのは、僕の 指示か、から空をだとこい事だ。  
「ツツツアあああああああああああああつ！！！」

なんと言えばいいのだろう？ 上手い表現が思いつかない。

がのうのうがながもので両足の肉を噛み潰された鉤爪は悲鳴を上げながらその場で倒れ、仰向けになつて足を押さえる。

悲鳴にならない、まさしく絶叫を上げる鋼屁。

もう『否定定義』も機能していない。それは多分、彼女の脳が激痛の処理で埋め尽くされてしまったからだろう。

石作の書

51

もしも《否定定義》が機能していれば、まだ僕は《完全干渉》を止める事が出来た。

でも出来ない。機能していない。故に僕は、言動も行動も禁止された……ただの傍観者となることしかできない。

今考えれば、全て僕の油断が悪い。

僕が全域攻撃を予知することも、それを鋼冴によつて無効化されることも《完全干渉》には分かつていたはずだ。

《完全干渉》が狙つたのは、僕の油断。そして鋼冴梓美。始めから僕に攻撃を加える気なんて無くて、僕の指示が途絶えることを狙つていたんだ。

「さて」

《完全干渉》……春永氷雨が、空間に干渉し、一瞬で鋼冴の前に移動する。

脚の傷口を踏みながら、氷雨は言葉を続ける。

「まずは《否定定義》が大切にしている物から丁重にぶつ壊させてもらいますか。あー、安心しろ。疵の痛みでろくに喋れないお前に問い合わせしたりはしない。お前の脳味噌に聞くとするよ」

言葉の終わりと共に、氷雨は鋼冴の頭蓋を驚撃みにして《完全干渉》を発動。

脳細胞の記憶領域に干渉し、彼女の記憶の中から大切な思い出を調べ漁つていく。

その思い出の中で一番印象に残つてゐる物が今何処にあるかを脳内検索する。

そういつた虱潰しの方法を5秒続けたところで、氷雨は呟く。

「制服の、ポケットの中ねえ……」

鋼冴の体に手を伸ばし、制服のポケットの中を漁る。

そうして出でたのは、四葉のクローバーのヘヤピン。それが鋼冴が自分の命と同等なくらい大切にしている物。

「死んだ家族との思い出の品か。命と同じくらい大切な思い出の塊……壊したくは無いねえ」

氷雨はそう言うが、本心から出た言葉ではない。だからといって全てが嘘のわけではない。

少し……心の片隅程度にはそのよひに思つてゐる。だがあくまで心の片隅。

11

どうでもいいようなことなのだ、氷雨にとつては。

『非観理論』を使えば全てが観測できる。

激痛で言葉を出せない鋼凧が、今どう思っているか。

掌で取つたヘヤピンを弄りながら、氷雨が何を思つてゐるか。

これから起じる、鋼屈のヘヤピンの運命。

全てが分かる。全てを観測できる。だが今はこんな異能は必要ない。

言動行動によって事象は干渉できないこんな異論は今はまったく持つて必要ない。

にして痛みは苦しんでる鉢巻を 力任せ思い出を壊されよ」と

なに、業の願いは神様よりも悪魔さえも無視をする。

「ま、大切な物が壊される瞬間だ。よく見ておけよ、お嬢ちゃん」

一三  
金匱要略 卷之三

せめてもの、最後の抵抗として鋼凧はその光景から目を逸らす。正確には目を瞑る。

いかにも鋼凧らしい行動だ。

「うう、鬼らの隠れ家だが、何意喰に交換する

そぞが見るのは妙な事だ。お

「よーく耳に焼き付けて……そうだな、音だけでその光景をイメージできるように壊してやるよ」

と、ちいさな事でそんな事をするのか

簡単な方法だ。脳細胞の一部を組み換え、その音とイメージした光景を死ぬまで焼き付けるように記憶させるだけである。

『完全干渉』からしたら、そんな事をするのは造作もないことだ。

「それじゃ、これでお前はゲーム最初の敗北者だ！」

その言葉に伴い、ヘヤピンを綺麗に真つ一いつに折る。

ただ折つただけではない。鋼皿の本当に最後の足搔きである絶叫を含めた余計な雑音をキャンセリングして、その音だけを聴覚に聞きとらせた。

そうして最新のヘッドホンよりもクリアな音を聞いた鋼皿は何を想像したのか。

それは何かの画像に映された、幼い時に両親と過ごした記憶が、画面ごとに一つ一つに割れ、崩れ去るというものだった。

## 敗退（後書き）

何か鬱つぽいような感じだった気がしなくもないんだけど。  
いやまあ、全然こんなの鬱じゃないよね。そうだよね。  
こんなので鬱つぽいなんて言つたら、誰かに怒られちゃうよね。

『完全干渉』により『否定定義』が敗退。彼女がこのゲーム初の敗者になつた。

……想定通り、計画通り、全て俺の思惑通りに動いている。これによつて高リスクだつた『否定定義』と『非観理論』の片方は敗退。それも敵によつて。

それはつまりこれからも鋼冂の協力が得られるということ。例え俺が鋼冂からしてみれば外道なことをやつたとしても、アイツが俺を敗退させることはゲーム上叶わなくなつた。

このまま虎杖も敗退させたいが、まあ、限度つてものは大事だよな。ボーナスを狙うんだとしても優先順位は『完全干渉』だ。

アイツは虎杖を敗退させた後、俺たちも狙いにくるはずだ。それはとてもリスクが高い。

俺がこのゲームで残るためには優先的に潰さなきやいけない相手だ。さて、息巻いて勝手に戦いに行つた二人組を救つてあげましょうか。まずは散々悲鳴を上げたり、絶叫したりして泣き疲れて死んだ目をしている鋼冂から。

「 ッ！」

俺が指を弾くと、天井が消え、『完全干渉』の上に大量に色々な物が降つてくる。

まあ、『完全干渉』はさぞ驚くだろう。

自分を中心とした半径20メートルが干渉範囲ということは、つまりは天井のさらに上、次の階の床まで干渉できる。

それなのに、今の今まで無かつたはずの物が大量に自分の元に落ちて来るんだから。

つまりそれは今まで処理してこなかつたもの。

ほんの一瞬だけ、『完全干渉』は処理負荷によつて反応が遅れるはずだ。

まあ処理負荷が掛からなくても、奇襲に對しては人間誰しも驚き反応が遅れてしまうものだ。

その一瞬の隙を狙つて俺は姿を現し、鋼凪に触れる。

今までに一度でも鋼凪の体に触れた事ががあれば（救う氣はないけど）一応救えたのだが、残念ながらこれが初タッチである。

これによつて、鋼凪は《無影無踪》によつて隠せる物の対象となつた。

《無影無踪》によつて姿を消し隠されたものには干渉できない。それも証明済みだ。

鋼凪と共にコードと共に姿を消し、俺はその場から逃げ出す。順当な判断だ。鋼凪を今この場で回収するのはリスクが高いし、わざわざ鋼凪たちが《完全干渉》の相手をしているひたに罠を仕掛けたんだ。

そこまで誘導してやらないと、敗退した鋼凪も密かに努力した俺も報われない。

取り敢えず、一度虎杖と合流しておきたい。

まあ千秋に先程、俺のメールを転送してもらつたから……まあ虎杖の精神が少しでも正気を保つていたら指定した場所に来るはずだ。取り敢えずそこまでダッシュだ。ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ！

「よつ虎杖。氣分はどうだ？」

「……あまり良くないです」

俺が集合場所、特別教室棟3階の一室に来た時にはもうすでに虎杖が居た。

「鋼凪は？」

「さつきの場所だ。俺のコードで隠してあるから《完全干渉》に何かされる恐れもない」

「……何か策はあるんですか？ 僕の予知は使えないし」

「使う必要なんかない。これ以上長引かせるつもりもない。一瞬だ。」

一瞬で《完全干渉》を片付ける

「片付けるつて……こつちはもう一人とも隠れる事しか出来ないんですよ」

「充分なんだよ。《完全干渉》『』とき、それだけで充分だ」  
『』とき、は少し言い過ぎだが。

『非観理論』と『無影無踪』とさつきの奇襲と相手が人間であるつていう四つの条件が揃えば《完全干渉》は俺の策で討ち取れる。

「一応聞いておくが、お前は《完全干渉》の大切にしてる物を知ってるよな？」

「ええ」

「それの材質は何だ？ 金属類か？ プラスチックか？ 紙か？」  
「紙ですよ」

「なら……」  
「これだ」

俺は虎杖に、ハサミとカッターを渡す。

「これでジョッキとやれ。そうすればあっちの負け、《完全干渉》は俺たちに手出しする事が叶わない」

「……これ、どこから？」

「盗むのは得意な『コードなんだ』

特に深い説明をせずに、曖昧な回答で返す。

「これを持つて、お前は待機場所へ行け」

「一輝先輩は？」

「俺はここで《完全干渉》を待ち受ける」

「…………分かりました」

「おいおい、反応悪いな。『そんなの危険過ぎますー』『ぐらいは言ってくれてもいいんだぜ？』

「策の内なんでしょ？ なら文句は言いません」

「あら、随分大人しい。鋼屈に見習わせたいくらいだわ」

苦笑いをしながら、虎杖は部屋を出る。

……まあ、ちょっと鋼屈のことでショックを受けてるんだろう。

『非観理論』は攻撃的なコードじゃない。助けたくても助けられな

くて、当然なのだ。

だからあまり気にしないほうが良いんだが……まあ俺の策の問題にならないから放置だ。

しかしああ、少しばかり苛立つな。『完全干渉』の奴。

鋼爪にコードを使わせないために痛みを与えたのは分かるが、あそこまで恐怖を植え付けるようなことをしなくていいだろうが。

……ムカつく。ああいう壊し方が一番ムカつく。

思い出して、喉元噛み千切つてぶち殺したくなつちまつ。

まあそんな苛立ちは、奴の驚く顔を見て、晴らすとしよう。

「ようこそ、『完全干渉』のコード使用者」

教室に入ってくる男医師の姿を見ながら、俺はそんな事を言つてみた。

撤退（後書き）

さあ、次で『完全干涉』戦は終了。  
つまり序盤戦が終わるわけですよ、早いですねえ。  
全然書いたような気がしないですよ。月口的に。

## 一人目の敗北者

「よつゝじや、《完全干渉》のコード使用者」

部屋に入ってきた男医師の姿を見て、俺はそう呟つ。

「あれ？ 《完全干渉》を使って俺に傷を負わせたりはしないのか？」

「逃げる相手に対してはそうするが、お前は逃げないんだろ？」

「何でそう思う？」

「お前のコードを使えばそのまま味方全員姿を瞞ます」とも出来た。が、じつして隠れもせずに田の前に《無影無踪》のコード使用者がいる。誘つてると思えないだろ？」

「お前を罠に嵌めたいからな。つてか本当に《完全干渉》を使わなくていいのか？ 鋼屈たちとの戦いで幾分か時間を消費しただろ？ けど、まだ4分以上は残ってるだろ？」

「残念ながら4分以下だ」

「それでも、それだけの時間があれば俺の躊躇つて、大切な物を壊して、一人目の敗北者にすることなんて造作もないだろ？」

「お前がその大切な物をコードで隠してなきやな」

「痛みを訴え続けたり、脳に干渉すれば、自然と誰でもコードをくだら」

「簡単に言つてくれる。痛みを訴えることは楽勝だが、脳に干渉してコードを解くなんてのは時間が掛かんだよ」

つまり、今じつして俺と会話しているのはその時間を稼ぐためか。

なら、暇潰しはここまでだ。じつちも策を出すとするか。

「……俺が、この部屋にお前を招いた理由は言つまでもなく罠を仕掛けたからだ」

「そつだらうな。しかし何時まで経つてもその罠とやらは発動しないんだが？」

「まあ、それはお前の隙を突かなきゃ 意味が無いからな。お前が上に警戒しなくなるのを待つてたんだ」

「まさか、さつきと同じ策が通じるとでも思つてたのか？」

「だつて苦労したんだぜ。お前が鋼皿たちと遊んでる間、俺はせつせと重たい荷物をこの上に運んで…… その苦労を無駄にしたくないと思つて当然だろ？」

俺が千秋と別れた後、どれだけ大変だつたと思つてるんだ。

『完全干渉』を討ち取る策を準備するのに手間取り、そして鋼皿たちがピンチになつた時のためようの策を準備して。

上から色々な物を落とすという事は、それらの物を全てそこまで運ばなきゃいけないわけで。

それがどれだけ重労働だか分かるか。ゴミ屋敷を独りで掃除しきる時よりも疲れたわ。

しかもそれだけ手間をかけた策が、通じないとなれば誰だつてブチ切れるに決まつてる。

「余談だが『完全干渉』、この階の上は屋上だ。つまりどれだけ大質量の物を置こうとも、どれだけ物を置こうともいい空間。さつきの5倍近くの物が降つてくるぞ」

そう言つて俺は指を弾く。

パチンッという音と共に、部屋の天井が消え、大量の物が降つてくれる。

当然上に警戒している『完全干渉』は、部屋の床も同時に消えたことに対して動搖をしてしまつ。

重力に従い下へ下へと落ちていく俺と『完全干渉』と大量の物。そのまま2階、1階へと落ちていく。というか残念ながらウチの学校は地下などないので、1階が終点。

受け身代わりに姿を消し、落ちた衝撃を無にする。

『完全干渉』は空氣に干渉し、衝撃を全て逃がす。だが逃がしたとしても上から落ちてくる大量の物を処理しなければならない。

途中、3階、2階にあった物も加わったので実際に俺が仕掛けた量の倍近くになつてゐる。

それでも《完全干渉》ひとつではそれらを蹴散らすことは造作も無い事なのだろう。

だから加えてやる。この1階に仕掛けた大量の物を出現させて、処理負荷を一瞬だけ起こす。

「ツー？」

そしてその一瞬のうちに俺がやることは一つ。

一つは俺が奴の衣服に触れて、身包みを剥ぐ……とも言い、消し去る事。

もう一つは、上から降つてくる物全てを消し去る事。

身包みを剥いだ理由は簡単。奴が持つてゐる免許証を奪い易くするため。

降つてくる物を消した理由は一つ。

一つはまた処理負荷を起こすため。干渉中の物を消す事で、強制的に干渉取り消しの処理を大量に行わせる。

そしてその一瞬の隙をついて、他者から観測されない虎杖が安全に

《完全干渉》の免許証を切るため。

《非観理論》は他者には観測されないが、決して姿を消したわけではない。

誰にも見られないだけ。だからタンスの角に小指だつてぶつけるし、上から降つてくる物だつて躊躇なきやいけない。

でも躊躇してたら《完全干渉》が次の手を打つてしまつ。だから虎杖の道を邪魔する物を全て消し去つた。

あとは一瞬。

誰も気付かぬ間に、免許証はまるでハサミで切つたかのようにに真つ一つになつて。

《完全干渉》の敗北が決まる。

皆さん、後片付けという言葉を知っているだろうか？

子供の頃にこう言われた事がある人もいるかもしれない。『おもちゃで遊んだ後はちゃんと片付けなさいよ』と。

そうつまり今俺はその後片付けをしているわけだ。独りで、黙々と。大量に仕掛けたわけだから、その片付ける数も大量である。泣きたいね。マジで。

千秋も虎杖も、鋼廻のケアに行ってしまっている。

『完全干渉』の男医師は、何か喪失感で一杯のような雰囲気のまま、いつの間にか帰ってしまった。

誰も手伝ってくれない。俺頑張ったのに。

しかも、この片付けはなるべく早く終わらせないと学校の七不思議の一つに認定されてしまう。

その場合は何と名付けようか。無難に、墮落場所、とかかな。

「一輝」

丁重に早急に片付けをして、もう大方終わりっていう頃。後ろから千秋が話し掛けてきた。驚くだり、いきなり話し掛けてきたら。

「ちょっと話があるんだけど」

「何だ？」

手を休めずに、応答する。

「何で、梓美ちゃんを助けなかつたの？」

「何言つてんだ？ ちゃんと助けただろ。危険が無いように、姿を

消させて」

「そう言つ事じゃない」

少し強めに、まるで怒っているかのように千秋が言つ。

……やっぱり、コイツにはバレるよな。

「なんで、梓美ちゃんの大切な物が壊される時、助けに行かなかつたの？ 止めに行かなかつたの？」

「勝つためだ。鋼廻も虎杖もいすれば敵になる。だつたら早めにゲームを降りて貰うのが妥当だろ

「なんでそこまで、このゲームに勝ちたいの？」

千秋の問いに俺が答えないから、しばらくその場に沈黙が漂つ。

「まさか、家族を元に戻そう

ふもけるなよ千秋。  
「冗談」にして笑えない」

「あんたー！」

別は読る必要は無いのに、俺が答へなかつたのが悪いんだから

「見つけたんだよ」

「…………えつ？」

「ゲーム使用者。たぶん、このゲームの勝者になれば会えるだ」

確認は？

「勘を優先して、梓美ちゃんを見捨てたって言うの？」

「悪いか？」

氣のせいが、場の空気が段々と冷え切つていく。

千秋がマジギレしてるのかもしれないが、俺だつて揺らぐつもりはない。

11

「一輝、言いたいや悪いけど……そこまでして追う必要があるの？

「俺も、何で執着してるので忘れたよ……それでも、俺と同じ目に遭わせてやらないと死ねないんだよ」

## 一人目の敗北者（後書き）

うわっ、バトルをグダつてしまつた……。  
グダつてしまつたよ…… 英語のノート整理した後だからかなあ  
……?  
まあ、これが俺の実力つてだけの話か。

## 少し昔の関係の無い話

まったくゲームにも千秋にも鋼屁にも虎杖にもその他参加者にも関係の無い話をする。

それはまだ俺が養父（にじかわ）……いや養われたような記憶がほとんど無いからやつぱり義父、濁川是無（にじかわぜむ）（仮名）に出遭つていらない頃の話。

それは俺が濁川一輝ではなく、立崎一輝だった頃の話。あまり裕福な家庭では無かつたが、だからといって貧乏な家庭であつたわけじゃない。

親に厳しく躾けられた記憶はあれども、愛情が無かつたわけではない。

父や母を心の底から尊敬などしていなかつたが、だからといって嫌いだつたわけじゃない。

多分、普通の……どこにでもあるかもしれないような一般的な家庭だつたと思う。

俺には姉がいた。本当に血の繋がつた姉が。

姉には随分と遊んでもらつた記憶がある。家にいる時は、本当によく姉に遊んでもらつていた。

しかし姉は随分と曲者であつた。

例えば、姉がコンビニに行つた時。

俺は鮭のおにぎりもついでに買ってきて、と頼んだのだが……姉が渡してきたのは昆布のおにぎりだつた。

いや、それだけならまだ許せたであろう。

でもようにもよつてあのクソ姉は、俺の目の前でツナマヨと鮭とオ力力のおにぎりを合わせて数十秒で食い切りあがつたのだ。

俺が文句を言つても軽くあしらつて、最終手段の暴力に頼るつても、それも軽くあしらわれた。思い出しただけでも腹が立つ。

他にもそんな事を多々やられて、俺はいつかやり返そつと心の中で

誓つたものだ。

だからといって、姉が嫌いだつたわけじゃないし、むしろ好きだつたんだと思う。

俺はたぶん、家族全員、皆好きだったんだと思う。売られる時までは。

い。 売られると言つても、人身売買、……臓器などを売られたわけじゃな

未だに俺にもよく分からぬ。  
切られた。  
だけど俺はある日突然に両親から裏

まあそこには両親は俺が兄妹の間の喧嘩をやがて殺すやつだ。

の前で

多分少し違うんだからうけど。

簡単に始めればいいんだ。

俺の好きだった家族は、ある日、買い物に行くと息子に嘘を吐いて乗車させ、数時間車で移動したのち、よく分からぬ灰色の場所で、見知らぬ男共に息子を渡して、その息子の目の前で、呪詛の言葉を吐きながら両親が殺されることで、崩壊した。

今でも思ふ、あの汚い言葉遣いは誰に向かってしたものだ？ が、俺に田線を向けることなく、どこかに叫んでいたあの言葉は一体誰に向けられた言葉だったのだろうか？

その時、純粹過ぎる馬鹿正直な俺はそんな事を思いながら男共に目隠しをされてどこかへ連れて行かれていた。

「…………」

頭が痛い。若き日の自分の事など思い出したためだろうか？

……何が、何で執着してゐるのか忘れた、だ。

思いつきり覚えてるじゃないか。嘔吐きもここまで来れば遺伝とか思えない。

遺伝としか…………。

時計を確認する。現在時刻 10：23。

……もしも今日が平日で、学校に行かなきやいけないんだとしても

……今日はいいや。

今日だけは、いいや。

しばらく天井を眺めながら、何かを考えようとする。  
だけど頭が上手く働かず、何も考える事ができない。ただ呆然に漫然に天井を眺める。

。 。 。  
。 。 。  
。 。 。

……このままだと、また眠つてしまいそうだ。  
今眠つたって、良い夢なんて見れそうにない。

どうにか体を起こし、部屋を出る。

腹も若干減つてゐる。遅めの朝食でも作るとするか。  
頭を搔きながら階段を下り、キッチンへと入る。

……異常な程、静かだ。千秋はまだ寝てゐるのだろうか？  
いや、学校に行つてゐるという可能性もある。

アイツ、朝食ちゃんと食つたのかな？ 無理に起こしてくれて良かつたのに。

俺の惰眠よりも朝食を食つ事を優先しろよ、まつたく。

冷蔵庫を漁り、適当に炒め、皿に盛り、食つ。

黙つて食つ。だから静かだ。いつもなら千秋がギャワギャワ騒いでうるさいといつうのに。

ああいう夢を見た日には、千秋くらいに騒がしいバカが傍にいたほうが気が晴れるというのに。

学校に行こうか？ ここよりも静かなわけがないし、千秋や鋼凪というバカに会え……ないかもしない。

千秋には会えるだろう。でも鋼凪は……多分まだ精神的に回復していない。脚の怪我も相当酷い様だし。

今のテンションでは虎杖にも気を遣わせてしまうだけだろう。

なら今日は、今日だけは家に居よう。

どんなに嫌でも今日だけは、家に。

流し台に食器を片付け、ソファに座る。

特に何かする事もない。暇だ。暇過ぎる。暇はあまり好きじゃない。

もつ少しマトモに頭が働けば適当な妄想でも想像でも戦略でも考えられるのに。

よりもよつて頭が働かない。だからまた天井を見る。

ただ突然と、ただ漫然に、天井をひたすら眺める。

今日は、あまり気分のいい日じゃない。

## 少し昔の関係の無い話（後書き）

うわっ、暗ツ！

いきなりなんで下衆主人公が鬱になつてるんですか！？  
あのどんな罪を犯そうとも罪悪感というものを蹴散らしそうな下衆  
主人公が！！

……つていう風な判断を下されてる主人公つて何なのさ？

## 少し昔のやうでもいい話

俺が目隠しをされて連れられた場所は、これまたよく分からぬ灰色の空間だった。

いや灰色というより、確か暗かつたから黒っぽいような感じだったかな？

そこで見たのは、檻の中には、姉。

鎖で繋がれ、身動きが取れない姉の姿を見た瞬間、俺はこう思った。ああ姉ちゃんもあの人達に売られたんだ。あの人たちの死を聞いたら喜ぶかな？ いや喜ばないだろうな。

そんな風に俺は思っていた。

物音とかで、誰かが近くにいると思つて姉は顔を上げた。

そして俺がいる事に驚いて、しだいに悲しそうな顔をして謝つてきた。

何で姉が謝るのか、俺には分からなかつた。分かりたくも無かつたんだと思う。

悪いのは俺たちを売りとばした両親で、姉が謝る必要はどこにもない。

そう思つていた。

そしたら悪の権化……という言い方は失礼だろう。両親の死体が俺と姉の前に運ばれてきた。

多少乱雑に運ばれたのだろう。俺が見た時よりも汚れや傷が増えていた。

そしてその死体と共に、人間がやつてきた。

暗くて見えなかつたが、多分、男だ。女だつたかもしれないが。

声を覚えていないのが一番惜しい事だ。

その人間は姉に問うてきた。両親を生き返らせたいか、と。

姉はイエスと答えた。俺もその意見に賛同だった。生き返らせて、一発ぶん殴つてやりたいなどと思つていたからだ。

でも幼く、純粋で、馬鹿正直だった俺にも分かっていることがあった。

死んだ人間は生き返らないということだ。

なのには生き返らせたいかと聞いて来た。多分、バカにしているのだろう。そう思った。

でも違った。生き返った。俺と姉の願い通り、両親は生き返った。生きかえった両親は、俺と縛られている姉の姿を見て、謝つてきた。そして人間の姿を見て、またあの時の呪詛ように汚い言葉を吐き捨てた。

だからだろうか？

直後、両親は壊された……いや人の場合は殺されたか。殺されて、人間が「おっと、つい誤つて殺しちまった」的な何かを言つて、また生き返った。

痛がっていた。一人とも痛い、痛いよ、と泣くように呻いていた。次第に痛みが治まつたのか、さつきのように俺と姉にひたすら謝つてきた。

人間には目も向けずに、ただひたすらに俺と姉へ謝つていた。何を謝つていたのか、何を言つていたのかは覚えてない。けど二人とも謝つていた。

だからだろうか？

またすぐに壊された……殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返つた。

色々なところを搔き鳶る様に呻きながら、今度は人間に呪詛の言葉を吐き続けた。

俺と姉には目も向けず、ただひたすら人間に向かつて汚い言葉を吐き続けていた。

だからだろうか？

すぐさま壊された……壊し、殺された。

殺されて、人間が何かを言つて、また生き返つた。

搔き鳶り、搔き鳶り、呻きながら、謝つていた。

人間に謝っていた。涙を流しながら謝っていた。とにかく謝っていた。許されようと必死に謝っていた。

きっと何度も殺されて心が折れたんだろう。だからさつきまで呪詛の言葉を吐き続けた相手に謝っているんだ。

だからだろうか？

今度は徹底的に壊された……壊して、壊して、殺された。

姉が泣き叫んでいた。もうやめて、と。

俺は姉まで殺されるんじゃないかと心配になっていた。

だけど人間はその姉の言葉を無視して、また生き返らせた。

生き返って、悶えて、謝って、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えに悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

そして生き返って、悶えに悶えて、謝り続けて、また両親は殺された。

た。

ずっと姉は泣き叫んでいる。やめてくれ、と泣き叫んでいる。

俺はずっと見ている。何故？

状況について行けなかつたから？ 違う。

恐怖に身も心も震わせていたから？ 違う。

こうなつて当然のことをしたと思ったから？ 違う。

諦めていたのだ。全部、もうこの円環から両親は逃れられない。

生き返り、悶え、謝り、壊され、そしてまた生き返る。

このループから逃れる術を両親は持っていないし、俺もこのループを止める術を持つていない。

だから諦めた。諦めて見ることしかできなかつた。

奇跡なんて待ち望めなかつたし、目を逸らしたところで耳から無残な光景が想像できてしまつ。

現実からは目を背けられない。妄想へ逃げることなんて不可能だ。

姉は泣き叫んで、目を逸らして、諦めずに……止めて、と叫び続け

る。

多分、今だから思えることだが……ずっと姉が諦めなかつたから俺は直視することが出来たんだと思つ。

俺が諦めてしまつたことを姉が諦めずにいたから、俺は俺でいられた。

だからだろうか？ いやそれもあるが多分、人間の器的に限度を超えて過ぎてしまつたんだろう。

姉が壊れた。姉の精神が壊された。壊れた。壊れ死くした。笑い出した。あひやひやうひやひやひや、と今まで聞いた事のない声で笑い出した。

何が嬉しいのか分からなかつた。恐かつた。壊れた姉が。

姉の全てが怖くなつた。今まで両親を死を何度も見たつて震えもしなかつた……震える事もできなかつた体が震えだした。

笑いながら、首や全身を無理矢理動かし、本気で鎖を引き千切れうとする姉が、自分の知つてゐる姉では無い氣がした。

無理に体を動かしてゐため、どこからか少しづつ出血する。それでもその自分の血を浴びながら姉は笑い続けていた。

逃げ出したかつた。逃げ出せなかつた。逃げ口などそう都合よくあるものじやないんだ。

ある意味、釘付け。あの人间のことなど思考の端くれにもなかつた。

俺の視界には、恐怖の象徴となつてしまつた姉がただいるだけだつた。

少しこのじつをここに話（後書き）

いやほほほほほー！

ヘッドホンして書いてるから耳が痛い…………。

## 少し昔のくだらない話

気付いたら、壁を……天井を見上げていた。

意識が途切れていった。気付いたら、レンガの壁に囲まれた場所に居た。

どこだか分からなかつた。分かつたところで仕方が無かつた。どうせ俺以外誰もいないのだから。

……嘔を吐かれた。家族全員に。そう感じた。

両親には騙され、姉には本性を隠されていた。そう感じた  
何で騙されたんだろう？ 何で隠されていたんだろう？

俺が無力だつたから？ 俺が非力だつたから？ 俺に何かを成す力  
が無かつたから？

そう感じて、よく分からぬけど泣いていた。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いていた。

始めは涙が出て、次に声を上げて、泣いていた。

途中から何で泣いているのかを忘れてしまつたが、それでも泣きた  
い気持ちだかつたから泣いた。

泣きまくつて、水分を大量に出して、声が嗄れるほど喚いて、そし  
て。

「ここにちわ」

誰かに声を掛けられた。

最初は幻想だと思った。それを確かめるために体を上げて、誰か居  
るのかを確認した。

そうして、その声の主を自分の幻想だとなおさら思い込んでしまつ  
た。

壁の隙間から漏れ出す月明かりに照らされ、微かな煌めきを放つ銀  
色の髪。

両目の中はそれぞれ違う色で、蒼い瞳と琥珀色の瞳をそれぞれして  
いた。

そんな今まで見た事のない容姿をしたその頃の俺と同じ年齢くらいの少女が、居た。

声を出せず、それでも思った。天使がいる、と。  
そして恨んだ。もしも俺の前に降りるのだったら、もう少し早く降りてくれればよかつたのに。

神も仏も、まつたくもって無情なものだ。  
でも、それはただ自分の無力さから逃げ出すための言い訳にしかならず、また泣きたくなつた。

そんな俺の心情を分かつているのかいないのか、よく分からぬが少女は微笑みかけながら俺に問う。

「ねえ、なんで月は明るいんだと思う?」

それが、濁川千秋が俺に最初に聞いて来た質問だ。

~~~~~

「…………

また寝ていた。よりもよつてソファで寝ていた。
首を上げて寝ていたから、肩や首筋が異常に痛い。マジ痛い。どうすんだよコレ。

ともかく、天井に橙色の光が照らされているから多分、夕方になつたんだろう。

10時半から夕方までって…………5時間以上は寝てたのかよ!?
そりや首痛めるわ。どうすんだよ、マジで痛いぞこれ。

まあ、それは仕方が無いとして。

「…………おい、千秋。何テメエは俺の膝の上乗つてんだ?」

痛む首を下げ、真正面を見ると割と間近に千秋が居た。距離にして数十センチ。

俺の膝を跨ぐよつとして座り、もう胸板に両手をついて押さえつけようつに対面している。

どんだけ近いんだよ、バカ女。

「一輝、泣いてたから」

「は？」

「いや、だから一輝が泣いてたからその涙を拭いてあげよ」と

「泣いてた？ 僕が？」

悪名が今にも轟きそうなこの俺が？ あの夢で泣いていた？

まだ泣けた？

「……つていうか千秋。別に俺の涙拭ぐのに、こんなに近くなきやいけない理由はあるのか？」

「実を言つと、バランスを崩してこんな状態になつて、そしたら一輝が起き出しちゃつたんです。すいません！」

「…………別に、お前のせいで起こされたわけじゃねえよ」
それも少しさはあるかもしれないが。別にそれで無理に起こされたんじゃない。

「おいバカ千秋」

「はい」

「取り敢えず、今すぐこの体勢を止める。お前の息が掛かつてしまふがない」

「はにゅッ！？」

よく分からん声を出しながら、千秋が飛び退くよにして移動する。氣のせいか夕田のせいか、千秋の頬が少しばかり紅潮しているようないいような。

多分、氣のせいだな。こいつに恥じらいといつて常識が身についてるんなら、家を「ミミ腫敷に変えるわけがない。

「おい千秋。お前、今日は何食べたい？」

「え、作ってくれるの！？」

「ドアホ。お前の食べたいものを今から作つて、お前の田の前で美味しそうに見せびらかすようにして食つんだよ」

「じゃあ、ハンバーグ！」

輝いた千秋の顔をどん底に落としたいがために、わざわざあんな事

を言つたのに、「イツ、笑顔で答えやがつて。

ああ、なんか今日はついてない日だ。自分の言葉も切れが悪いよう
に感じる。

なんか調子悪い。つていうか首痛い。なんか千秋を騙せなかつたの
が悔しい。

「子供か」

千秋の言つた料理名にも、悪戯が失敗して拗ねている自分にも、そ
んな事を思つて呴いてみる。

俺はキツチンではなく自分の部屋に向かい、着替えをすまして玄関
に行く。

「どこ行くの？」

「冷蔵庫にひき肉なんて無いからな。わざわざ買いに行くんだよ」

「ちいも行く」

「お前は買い物力「」にお菓子とか入れそうだからダメだ」

「そんな子供っぽいことはしないよ！」

「どうだか。ちいちい言つてる奴がそんなこと言つたつて説得力が
無い」

そう言つて、俺は勝手に玄関を出ようとするが、その前に千秋に腕
を掴まれる。

むくれた顔をしながら千秋は、

「ちいも行く」

再度自分の意見を主張してきた。面倒な奴だ、まったく。

「腕を掴むな。虎杖とか学校の奴に見られたら恥ずかしいだろ？」

「うん」

パツと俺の腕を離して、すぐさま千秋は靴を履く。

もう今日はダメだ。何か舌が上手くいつもみたいに回らない。

「鍵閉めてから来い」

「分かつた」

無邪気に笑う千秋を連れて、俺は近くのスーパーに行つた。

何か今日はホント、良くない日だ。

少し昔のくだらない話（後書き）

意味不明な文章はここで終わって、次からはバトル無し、騙し合い無しのお遊び回ですよ多分。

つていうか結局、一輝の勝ち残りたい理由って何なんでしょうね？

「そろそろ動き出す

「えつ？」

スーパーで色々と買って、家帰つて、食材洗つたりして、みじん切りして、こねて、空気を抜いて、型作つて、焼いて、蒸して、さらに入盛り付けて、食つてる最中。

見せびらかすように俺がハンバーグを食い、釣られて千秋もハンバーグを口にしている時。

俺はそう言った。

「それってどういう事？」

頬にケチャップを付けた千秋が俺に問つてくる。

「打つて出る、つてことだな。ケチャップ拭け

「ありがと」

俺が差し出したティッシュで頬を拭き、続きを訊きたそうな顔をしてきた千秋。

「今までは参加者の誰かが動き出すのを待つてたが……まあ『完全干渉』がよりもよつて俺たちを標的にしてきたからな。こっちが手を組んでることは他の参加者にもバレただろ」

「だから、隠れることから潰し合つことに変えるの？」

「現参加者は7名。こっちには3名。残りは4名。でも、鋼風の協

力が得られればこっちも4名。人數的には対等に立てる」

「……でも、敗者はゲームに介入できないんじゃないの？」

「ゲームじゃない。敗者が禁止されることは、物の破壊と参加者の殺害だ。協力してもらう分には問題無い」

「じゃあ、他の4名だつて『完全干渉』に話を持ちかけるかも……」

『完全干渉』はその話を棒に振る。アイツは元々……学校に来る前から俺たちの事を調べてた。多分、アイツには4人が手を組んでたこともバレてただろう。それでも奴は独りでやって来た

「……他の参加者と協力する気なんて更々無かつたから？」

「その通り。だから奴は、協力しない…………つつても俺から話を持ちかけるつもりでいるんだが」

「…………一輝って、昔より外道になつたよね」

「勝つためだ。その為だつたら外道だろうが下衆だろうが鬼畜だろうが悪魔だろうが何だつてなつてやる」

「そう…………。でも誰とも協力する気が無い『完全干渉』が手を貸してくれるとは思わないんだけど」

「そういう時は『非観理論』の使い時だ。情報を集めれば自然と見えてくる、アイツのゲーム参加理由」

まあ、口クでもない事だとは思うけどな。

利点があれば『完全干渉』は俺に協力するはずだ。

「ともかく……まず次に誰を敗退させるかだ」

「それより前にやる事があるよ」

「…………えつ？」

千秋の言葉に俺は耳を疑つた。

俺が何かを見逃していた？ そんなバカな。まだ悪夢心地つてことか？

「梓美ちゃんのお見舞い。一輝はまだ行つてないよね」

「面倒臭い。バス」

「『非観理論』を使うんでしょ？ 『否定定義』が無ければ聞き出せないんじやない？」

「くつ……」

千秋に極めて正論を言われてしまつなんて…………ホント今日は調子悪い。

「…………分かつた。いつ行けばいいんだ？」

「明日」

「ああーと、その…………」

「行くよね？」

「…………はい」

バカな千秋に言い包められてしまうなんて……もう今日はダメだ。
ダメの日だ。

ああ、もう、調子が狂う。いつものペースじゃない。

「御馬走様」

翌日の放課後。

学校を無断欠席したんだとずつと思つていたんだが、どうやら昨日は勤労感謝の日だつたらしい。

つていうことは、もうすぐ11月も終わるんだなー。
つーか、昨日、千秋なびーに出掛けてたんだ
つて、岡田の

お見舞いに行つてたのか。

普通は表へればそこが近づく
「おー、岡田、おー氣がー

病院の個室のドアを開け、適当に間延びした適当な言葉を投げかけてみる。

- 7 -

返事が無い。ただの屍のようだ。

……じゃなくて、ただ普通に寝ているだけである。

一緒に来た千秋の言葉に激しく同感しながら、室内に入る。

病院の個室……人生初の優人である

「ちこ、お花の水、変えてくるね」

「分かつた」

適当にあつた椅子に座つて呆然としていると、千秋がそんな事をいつて花瓶を持つて出て行つた。

.....する事が無い。ある意味、氣ますい。

いつその事、本人を起こしてしまおうか。ぐっすり寝ているのがムカつくし。
いやしかし、これでも俺は人の子。それはやつてはいけない気がする。

まあ、でも鋼仮だしイイかな？

「……イイわけないでしょ、変態覗き魔

「あれ？ 起きてたか？」

俺が行動に移ろうとする前に、鋼仮がうつすらと瞼を開けて、体を起こす。

「何しに来たの、カス？」

「何つて、千秋の付き添い」

「……濁川先輩は？」

「花の水変えるとか言つて出て行つた」

「そう……」

「…………お前、大丈夫か？」

「何が？」

会話が途切れそうだったから、適当な言葉を投げかけただけなんて言えない。

「脚とか……精神的な面とか」

「脚の方は治つてきてる。精神的な面つてのは意味が分からない」「ならそれでいい」

うん、やっぱ気まずいから――田退室――

「なあなあ、千秋さんや
「どうしたの一輝？」

適当に千秋を探しに行つたのは良いのだが、数十秒で見つかるから嫌なんだよな。

もうちよつと手間を掛けさせろ。あの空間に俺を戻させらるな。
つていうかいつその事、相談してみるか千秋に。

「俺、なんかあの空間、気まずいんですけど」

「それは一輝の心に罪悪感といつものが生きてる証拠だね。良かつた、良かつた」

「良くは無い。何が良いんだよ」

「直したげて。ヘヤピン」

「……それが目的かよ」

俺はようやく千秋が見舞いに行かせた理由が分かった。
ようは壊れてしまつたヘヤピンを即刻直せとの依頼だつたわけだ。
しかも依頼料は俺の罪悪感。最悪だね。

「無理だ」

まあでも、それが出来たら俺だつてすぐにやつてるわけだよ。
気持ちを落ち着かせるために、即刻に。

「嘘吐き。一輝なら出来るでしょ？」

「お気に入りを変えたくはない。それに色々と下準備が必要だ。今
すぐ直すのは無理」

「ちいが居れば、下準備なんて必要ないでしょ？」

「まあ、それでもないわけだ」

ともかく今すぐは出来ない。それが結論。

「じゃあ、一輝が何か作つたげて」

「……は？」

「梓美ちゃんに、一輝が、何かプレゼントしてあげて

「俺のプレゼントなんてすぐに捨てるぞ、鋼冂は」「じゃあ、すぐに捨てそつもないプレゼントをあげて」
「わお！」の銀髪、なんていう無茶振りしてきやがるんだ。
「時間稼ぎはしてあげるから、あと1時間以内に作って」「姫様？ それは私には無理な所業で」
「……」

「作れ」

「無理だつてんだろうが、人の話を聞け」

「作れ」

こっちの話は聞かないってか？ 上等じゃねえーか。
多少プランに変更はでるが、バカ千秋に売られた喧嘩を買わないわけにはいかないだろ。

「1分。病室へと戻る」の間に創つてやるよ」

「凄いね、一輝はもしかしたら作家とかになれるかもよ？」
「なりたくないし、あの程度のでつち上げなら幾らでも誰でも作れる」

「…………？」濁川先輩、何の話をしてるんですか？」
病室へ戻つてくるなり鋼冂が質問をかまってきた。
まあ俺じゃないから良いんだけど。

「一輝の発想の凄さについて話してたの」
「俺は自分の発想よりも、お前のバカさ加減に驚くがな」「だつて優しい幻想と厳しい現実だったら、優しい幻想を信じたくなるもん」

「…………だから何の話をしてるんですか？」

主語が抜けたような会話をしてたからか、鋼冂が不貞腐れ始めた。
会話の輪に入れないからつて不貞腐れるなよ。子供かよ。

「ほら」

仕方なく、俺はポケットから鋼冂にある物を渡す。

「…………しおり？」

「そう。一輝がなんか気まずいからって作ってきたの」

四葉のクローバーの押し花がしてある栞を見ながら千秋が言つ。

「なんか嬉しそうに語る千秋を一発ぶん殴つてやりたい。

「気まずい……何が？」

「一輝はね、梓美ちゃんが怪我したこととか物が壊されたこととかを自分にも責任があると思ってるの。だから壊れたヘヤピンの代わりになればっと思つて作つてきたの」

「…………ふつ」

何を考えて吹き出したのかは知らないが、失礼な事に鋼冴は、俺の顔をマジマジと見たあとで吹き出しやがつた。

まあ、似合わないとか思つてるんだろうけどね！ そのくらい自分でも分かつてるわ！

俺だつて恥ずかしいんだよ、こんな嘘！

「似合わない…………ふはははは！」

「言つた！ 笑うな！ 自分だつて知つてるわボケ！」

鋼冴、大爆笑。ムカつくくらいに大爆笑。

こいつの辞書には失礼つて単語の意味は載つてないのか？

「う、ごめん……あまりにも面白くて」

そう言う鋼冴の顔は、今まさに笑う事を限界まで耐えようとしてる顔だった。

こいつ、まだ笑う氣だ。

「でも……これは……似合わな過ぎる…………ふふふははははつはははは！」

「だから笑うな！」

「笑うしかなって、これはもつ！」

もう耐えることを諦め、ベットをバンバン叩きながら鋼冴は大爆笑してやがつた。

千秋の野郎…………あとで覚えとけ。

「で、でも一応大事にはするよ……ふふつ…………はははははははは……！」

「ああー、でもお前じゃ読める本も無いし返せよやつば」「ヤダ。これ一生物のネタにできるからー。」

「ネタとか言つな！ やつぱり返せー。」

「ほらほらー輝、そろそろ帰るよ」

「千秋、テメエ……本当に覚えとけよー。十倍で返してやる」「うん、そうだね。だから帰ろう、もつ」

ぎゃああああ！ 千秋ごとに軽くあしらわれたあーーー！
もうダメだ、俺のパーソナリティがズタズタだ！
ボロボロを通り越して、ズタズタだ！

「あ、そうだカス」

病室を出て行く前、鋼嵐が声を掛けってきた。

「何だ？ 文学少女になる宣言でもするのか？」

「違うわ。これはちゃんと大事にする。それと

言葉を一旦区切り、鋼嵐は笑顔でこう言つた。

「もう、わたしは大丈夫。お蔭様で立ち直つたよ」

「……そりや良かつたな」

まさか、鋼嵐から礼を言われる口をくくるとは。

なんか調子狂うんだよな、最近。

ホント、なんとなく調子を狂わされてばかりな気がする。

「貴女が『干涉不可』ね？」

「……誰？」

夕方の電車内にて、とある少女が誰からか呼びかけられた。席に座る事なく、外を向いて乗車している少女の視界には絶対に声の主が映るはずもない。

だから問いかけた。

「『禁思用語』って言葉だけで分かってもらえると嬉しいんだけど」

「……ゲーム参加者、ってわけね」

声の主……『禁思用語』の姿も見ずに少女は会話を進めてしまひ。その少女の態度に少し苛立ちながらも、『禁思用語』は少女にある話を持ち掛け始める。

「ねえ、ちょっと協力しない？」

「協力？」

「そう協力。今ちょっと勢力を集めているの」

「……何で？」

「先日、『否定定義』が『完全干涉』に、『完全干涉』が『非観理論』に負けたの。知ってる？」

「初耳ね」

少女が集めている情報は、ゲームの進行状況ではない。だからその情報は本当に初耳だったし、別にどうでもいい情報でもあつた。

「それで分かつたんだけど『非観理論』『否定定義』『異見互換』『無影無踪』の四人が手を組んでるの」

「…………」

「いつも『結論反転』とは手を組んでるんだけど、それでも二人。『否定定義』が抜けたからといって、三人には勝てそうもないわ」

「……あたしに頼るより『完全干涉』に頼った方が可能性があるか

もよ?「

そつ提案する少女に対し、《禁思用語》は少し溜息を吐きながらこう答える。

「アイツはダメ。完全に一匹狼っていう性格してるし、誰かと協力なんて考える性質じゃない」

「へえ……」

「で、貴女はどう? こっちに協力しない? できれば強制的に協力してもらいたいんだけど」

「するわけないでしょ、バーカ」

少女がそう言つと共に、停車し、車両のドアが開く。

「あ、ちょっと」

そのまま自然と電車を降りようとする少女の肩を掴み止めようとするが《禁思用語》が伸ばした手は、少女に触れる事無く、空を切る。「じゃあね《禁思用語》。次遭う時がないことを祈るわ」ドアが閉まり、そのまましばらく少女は行ってしまった電車の方向を見る。

(……どんな形であれ、これでやつと《無影無踪》に辿り着けるか……)

そつ思いながら、少女はホームを降りたつて行つた。

「べえくしょんつ! !

うう……なんか寒気がする。

鋼凧か? 鋼凧あたりが俺の悪口を言つてるのか?

まあ、それでもいいから鋼凧にはさつさと怪我を直してもらいたい。でなければ《非観理論》が使えないからだ。

別に鋼凧に無理をさせれば使えない事も無いんだろ? けど、千秋が

『梓美ちゃんはまだ怪我人なんだよ!』とかつるさく文句を言つてく。

ああ本当、さつさと鋼仮の怪我なおんねえかなー。

溜息を吐きながら天井を見上げる。

現在は家中に独り。千秋はどうかに買い物に行つた。ついでに頬んだ食材をしつかり買つてきてくれるだらうか？
色々な事が詰みに詰んで、家中でただ静かに待つだけでも気が詰まる。

『無影無踪』は窃盗にも奇襲にも隠蔽にもスパイにも向いてるが、なんせ、相手が何処の誰だか分からぬ状況だとコソコソと動くことも出来ない。

だから今は『異見互換』の視界を共有できるルールを使って、映像のみの情報を千秋に集めてもらつてはいる。

『非観理論』が居るのに、こんな効率の悪い方法でしか情報を集められないなんて……。

状況的には最悪。こちらから仕掛ける事が困難過ぎる。

まあ、こんな状況を作り出したのは他でもない『完全干渉』と俺である。

自業自得とはこの事か。まったくもつて笑えない。

「遅いなあ……」

千秋は一体どこで何を買つてているのだろうか？ 帰つてくるのが遅く感じる。

まあ俺の体内時計が焦りと共に異常な早さで進んでいるだけかもしれないが。

やりたい事があつても、やれる状況ではない。

この前のように呆然と漫然と天井を眺めていたら寝ていたというオチも嫌だ。

さて、どうするか……。

「人才セロでもするか？ いや、俺がしたくない。

そんな風に、適当に思考を回していたら千秋からのメールがあつた。もしかして…… 買い物の途中で何かあつたのか！？

『ちい、くじ引きで3等当たつた！』

おめでとさん、と短く返信をし、俺は携帯を放置する。

そもそも何かあつた後にメールなんてしてこれるのか？ そういう

冷静な考えが足りなかつた。

本当、この前から思考が絶不調だ。別に平和ボケをしたわけでもないのに。

悪夢ボケという新種のボケ型だろうか？

まあ、そんなのどうでもいい。まったくクダラナイ事を考えることだけはいつも通りだ。

いつの間にか放置していた携帯電話がまた振動している。また千秋からのメールだろう。

『梓美ちゃん、明日退院だつて！』

「……………ハア」

思わず安堵の溜息を吐いてしまう。これで明日から動き出せり、色々と。

詰んでいた状況が一気に切り開けてきた。

返信はせずに、そのまま携帯の電源を切る。

この勢いだと多分、千秋がくだらないメールをいくつもしていくんだろうなと思ったからだ。

交錯（後書き）

また もう あただよ。ほんと、あつたく。

「3100円、か……」

とある雑居ビルの2階にある診療所の診察室にて、春永氷雨は椅子に座りながらそんな事を呟いた。

彼の視線の先にあるのは、医師免許証。

先日、虎杖によつて切断されたため、再交付をしてもらつたのだ。
(……命と同等に大切にしていた物の価値は、3100円か……)

医師免許証の再交付には手数料として3100円が掛かる。
その値段がどうも、自分が大切にしていた物の価値に思えてしまう。
ゲームの敗退条件である、物の破壊によつて氷雨はプライドに少し
ばかりの傷を負つていた。

(……安い紙切れだとしても、一応は俺の誇りだつたんだけど
なあ……)

そんな事をぼんやりと呟つてゐると、どこからか鈴の音が鳴つた。
診療所のドアに付けてあるものだ。誰か来た時に分かり易いようこ
付けておいた。

「ちゃんと見ておけよ……今日は休診日だらおが……」

そんな事をぼやきながら、それでも自分がドアの鍵を開けていた事
にも少しばかり呵責があると思い、仕方なく診察室から出で行く。

「あのー、すいませんが今日は休診日なんで

面倒臭そうに頭を掻いていた氷雨は、途中で言葉を切る。

理由は簡単。

相手が面倒な屁理屈を立て並べる前に、脳に干渉して追い返さうと
思つていたからである。

その干渉が、出来なかつた。

氷雨は来訪者の姿を確認する。少女だ。

赤みを帯びた瞳に、髪型はボーテール。まだ少しばかり幼い顔付

きに、身長などの見た目からして中学生だろうか。

そんな少女に自分のコード《完全干渉》が通用しなかつた。

となるとこの少女も、コード使用者か。

「 何の用だ？ 新聞の勧誘も、ゲーム関連の勧誘もお断りなんだが」

「 勧誘じゃなくて提供してもらいたいんだけど

「 何をだ？ 何にしろ断るが」

少女が自分を訪ねてきた理由は、おおむね察しがついていた。わざわざ敗者である、もうゲームに参加していない自分に求めるものなど二つなどしかない。

一つは、先日来た《禁思用語》と同じ、ゲームを有利に進める為の協力。

もう一つは、とある四人のコード使用者についての情報提供。そのどちらかだ。

「 《無影無踪》についての情報提供をしてもらいたいんだけど」

「 ムカつく野郎だつた。俺から言えるのはそれだけだ」

そう言って、氷雨は指を弾く。

途端に無数の氷の針が出来上がり、少女へ向かって一直線上に突撃する。

しかし氷の針は、少女の身に触れる前に蒸発したように溶けて無くなる。

「 やつぱりお前の「コードは《干渉不可》」か

「 そう。貴方との「コード相性は最高よ」

《干渉不可》のルールなど楽に検討がつべ。

あらゆものからの干渉を拒絶する。

大方、そう言ったものだろう。故に氷雨のコードによる干渉の類は一切効かない。

氷雨からしたら、天敵のようなコードだ。

「 はあ……ゲームに負けたのを教訓に、隠居生活でもしようかと思つたのに

『禁思用語』も『干渉不可』も何故、負けた自分などを構つ暇があるのだろう?

まだ参加者は7人もいるのだ。そちらに構えればいいのに。溜息を吐く氷雨の姿を見て、勝利を確信したのか、少女は歩いて近付いて来る。

「さあ『無影無踪』の情報を

「

「嬢ちゃん、生意氣に俺に命令しようとしてんじゃねえーよ」

そう言うと氷雨はもう一度、指を弾く。

そんな言葉も行動も気にせずに近付いて来ていた少女は、急に膝をつくことになる。

いきなり立ち眩みのようなものがしたのだ。

「あらゆるものを拒絶する、あらゆる者から観測されない。そんなルールがチートだと思えるのは高校生までだぜ。大人の世界はもつとシビアだ」

胸に苦しさを覚えながら少女は動搖する。

自分には、あらゆるものも干渉できないはずなのだ。コードであれ物理法則であれ、少女が拒絶してしまえば干渉できなくなる。なのに、どういうわけか氷雨の「コード」によって今自分は干渉されている? そんなわけがない。

自分のルールは絶対だ。

その通り。少女の思考は一部分を除いて何も間違つてはいない。

「別にお前に干渉できなくても、他のものには干渉できるんだよ。

バーカ」

ようは氷雨はこいつ言つている。

直接干渉が不可能な相手には間接的に干渉すればいい話だ、と。

『非観理論』の時は、どこに居るかが分からなかつた為、いつまに全域攻撃をし油断を誘う事しか出来なかつた。

しかし今回は違つ。

コードを無効化する『否定定義』も居なければ、相手の姿だつてしまふりと見える。

ならば相手の周りの環境に干渉し、相手に間接的にダメージを与えるべき。

例えば、少女の周りの酸素濃度をゼロにするように干渉する、とか。そうすれば少女は息を吸う事はできず、息を吐けば、そこに含まれる幾分の酸素も除去できる。

「がはつ…………けほつ…………ツ！？」

少女は首辺りを龜るのみで手を動かしながら、空氣を求めるように悶える。

このまま行けば、窒息死……いや、それよりさきに脳死をしてしまうだろうか？

ともかくこのままでは少女は死んでしまう。

悶える少女の姿を見ながら、氷雨は干渉を解いた。

「かはつ…………けほ、けほ、けほツ！」

咽るように咳をする少女。いきなり新鮮な空氣を吸つたためかどうか？

元から氷雨に少女を殺す氣などなかつた。そもそも殺す事すら許されない。

ゲームのルール上、敗者である氷雨が、参加者である少女を殺す事は適わないのだ。

「これに懲りたら、今すぐ帰りな」

そう言って、氷雨は診察室へ戻ろうとする。だが。

「ツ！」

数秒で呼吸を整えた少女は、飛びかかる様にして氷雨の首を掴み、そのまま全体重を掛けて氷雨を押し倒す。

「拒絶！」

いきなりの事で流されるまま床にうつ伏せ倒れてしまった氷雨の首に、少女の手から押し潰すように圧力が掛かる。

それは人の体重を掛けて潰すものとは違つ。

少女の手に触れられている部分が、無理矢理内側に押し込められる

よつな感覚。

無理に少女の手から離れようと皮膚や筋肉が内側へ、内側へと逃げ
いるよつな感覚。

このままでは氷雨の首の中が変形してしまつだらう。

(…………このガキ…………ツ！)

少女を退けようにも、直接干渉が出来ない上、この至近距離では間
接的に干渉した場合、自分自身にも影響が及ぶ可能性がある。
そしてこのまま首に手を当てられていれば、愉快な首の形をした死
体になつてしまつ。

氷雨は、少女に降るしかなかつた。

提供者（後書き）

『完全干渉』あつたり敗北。
まあ、ゲームのルールと、相性の問題が重なったからなあ

快気祝い

「鋼嵐梓美、復活しました！」

「ああ、それはよかつたな鋼嵐。ところで千秋？ この状況を説明してくれ」

鋼嵐の復活宣言を蹴り飛ばすように流し、千秋に問いかける。

今日は11月最後の日曜日。

退院した鋼嵐の快気祝いをすると言われて、千秋に引っ張られるまま連れて来られた場所は……県内にあるウォーターパーク。そう言えば、くじ引きで3等が当たったとかなんとかメールしてきました記憶があるが。

まさかこのウォーターパークの無料入場券とかそういうふざけた物を当てたわけじゃないだろうな千秋の野郎。

いやでも、そんな在り来たりな回答じゃないことを祈りつつ俺は問い合わせた。

「これからプールに行くんだよ

しかしながら、俺の夢い幻想は千秋の一言によつて悉く打ち砕かれたのだった。

……嫌な予感程、よく当たるものはない。

11月の最終日曜日……まあ言い換えれば、月末といつてもいいだろ？

そんなもう冬場といつても過言ではない季節に何故、プールなのだろうか？

夏なら分かる。春でも分かる。秋だとどうにか分かる。冬は絶対に理解できない。

冬 プールである。これが世界の常識であり真理といつてもいいと思つ。

「皆、ちゃんと水着は持つてきた？」

「はい！」

「ええ、まあ一応」

鋼仮、虎杖が千秋にそう答えるのだが、幾分俺には理解できない。そもそも、俺は千秋に一言たりとも水着などと言われていない。

「だつてプールだつて言つたら、一輝泳げないから嫌がるじゃん」

「え、カスつて泳げないんですか？ ダッサーイ」

千秋の一言にたまらず鋼仮が食いついてくる。うん、こりや完全復活してゐるな。

後で覚えておけよ、このバカ女二人。

「まあ一応水着も貸出してるみたいだから、大丈夫だよ一輝」

「千秋、お前は本当にあとでシバくからな」

「一輝、そんな事言つたら、水の中に沈めるよ

互いに笑顔で微笑ましい会話をする俺と千秋。うんうん、仲が良い

つてこういう事を言うんだな。

「珍しい……濁川先輩の目が笑つてないなんて」

そんなことを鋼仮が言つていたようないなかつたよつな。まあ、どうでもいいか。

「さ、皆早く中入っちゃお

千秋の案内で俺たち四人はホテルに入つていつた。

「おお！ 憐おい！」

そりや、ウォーターパークだもの。

ウォータースライダーや流れるプールだつてあるに決まつてゐる。

しかし、さすがに冬場なので屋外施設は使えないという表示があつた。

でもまあ、屋内施設だけでも充実している。

……全て、泳げない俺にとつてはどうでもよいことだがな。

「でも、正直言つて……こういう場所に来たからつて盛り上がりませんよね」

珍しく虎杖がノリの悪い事を言つ。いつもなら思つても口に出さな

い性質なのに。

「女性の水着姿を見て、動搖でもしてゐるのか？ ウブだなあ。
「あれ？ 虎杖君も泳げないの？ 泳ぎ方教えてあげよっか？」
「ごめん。 鋼仮に泳ぎで負ける自信が無いから、別にいいよ」
鋼仮の親切心を挑発で返す虎杖。 本当に珍しい。 やはり動搖しているのか。

「……虎杖君、ごめん良く聞こえなかつた」

当然、癪に障つた鋼仮は虎杖に謝罪の場を設けるが。
「余計なお節介だよ、つて言つたんだ。今度はよく聞こえた？」

何故か今日は毒舌の虎杖は、さらなる挑発をした。

「……実はもしかして独りで泳ぐのとかつまらないから、わざと鋼仮を挑発して対決しようとしてるのか？
そこまで、泳ぐのはつまらん事なのか？ 泳げないから分からぬけど。

「うん、良く聞こえた。ちょっととあつちに25メートルの競泳用のプールがあるんだけど、行かない？」

鋼仮、めつた笑顔。

目が笑つてないとか、そういう失態をせずに、全力の笑顔で虎杖を地獄へ誘う。

「ああ、いいよ」

「虎杖」

虎杖が鋼仮の誘いを受け、移動しようとする前、俺は反射的に声を掛けてしまつた。

「……死ぬなよ」

「ええ」

その俺の一言に、虎杖は短くハツキリと答え……戦場へと行つてしまつた。

「…………一輝、誰に向かつて敬礼してゐるの？」

戦場へ行つてしまつた虎杖にしばらく敬礼を送つていると、遅れて千秋がやってきた。

チツ、パークーみたいなのを羽織つてやがる。

「つていうか……あれ？ 梓美ちゃんたちは？」

「戦場へ……行つたよ……」

「？？？」

俺の回答に合点がいかないのか、千秋は首を傾げている。

まあ、千秋には分からぬだろうな。虎杖の勇気は。

「まあ、いいや。梓美ちゃんたちが居ないなら先に話しておきたい事があるし」

「何だ？」

「《完全干渉》の件なんだけど」

「居場所が分かつたのか？」

「うん。それと《干渉不可》と接触してた」

「…………いつ？」

「ちいが3等当てた日」

あの日か……鋼凪の退院祝いの知らせを聞いた後、携帯の電源を切つてたからな。

電話だつたら、通じない。

「メールすれば良かつただろ」

「だつて緊急事態だと思つて……」

「そつか…………なら、何でその日のうちに俺に伝えなかつた？」

「…………買い物してたら忘れてました……」

「この事を思い出したのは？」

「ついわつと……着替えてる時に」

「はいはい、よく伝えられたねー。偉いねー」

「ごめんなさい！」

別に謝らなくていい。伝えてくれただけまだマシだ。

『完全干渉』と『干渉不可』が接触か……また、仕掛ける前に

仕掛けられそうな展開だな。

「一輝……お詫びに泳ぎ方、教えてあげようか？」

「千秋。お前正直、詫びる気ないだろ？」

快気祝い（後書き）

注意：水着は取れません。

「凄いね一輝！　ちいが一時間教えただけで、水に顔を浸けられる
ようになつたね！」

バカにされている……………今物凄く千秋にバカにされている……………ツ

「前なんて、フードに入る事すら躊躇ってたのに……あの時から考えると、凄い進歩だよ！」

ハ力はされていへ……二種はこの上なくハ力はされていへ
ツ――！

一輝は可愛かつたなあ」

もう無理だ！ もう耐えられない！ 我慢する必要なんてない！！
もうこれ以上、千秋にバカにされてしまつたら俺の脳神経回路が爆
発してしまう！

少し昔の俺の不様な醜態を懐かしむように語る千秋に、俺はどうう怒号を浴びせた。

……でもたゞで本当に可愛かうたよ？母性本能をぐすぐらわる様な……小つぢやい子供みたいにプルプル涙目になつて震えぢやつて

「それ以上は言つなかああああああああああああ」

これ以上この話を聞いてしまつたら、俺の精神と記憶とフレイドが腐りに腐りきつてしまつ様な気がしてたまらなかつた為、大声を出

卷之三

大体そもそも俺は初めから水が怖かつたわけじやなくて、義父に『おつと、たまたま手が滑つた』とか言われて大豪雨の時に川に流されたトラウマがあるからであつて、幼き頃の醜態だつてそれが原因だから断じて怖がつて千秋に抱き着いたわけじやなくて……その、

本能的に何かに拘まらないと流されるとかそういうのが……。

「ともかく、水が克服できてよかつたね」

「ああ、そうだな」

結局、結論としては千秋の言つ通りである。

まあ、でも水に浸かれるとはいへ、あまり長時間は浸かりたくない。俺はお風呂派じゃなくてシャワー派なのだ。全く関係ないけども。

「お腹減つたあー…………」

俺と千秋がプールから上がると同じぐらいで、錆戻たちが戻ってきた。

虎杖は割とまだピンピンしてる……わけはなく、まるで死闘の末に敗北して疲労困憊のような雰囲気を纏っている。足取りも重そうだ。

「23勝27敗でした…………」

それが虎杖の最後の言葉だつた。

……いやまあそれはちょっと言い方が変なんだけど、それ以降、疲れ果てた虎杖は一言も喋らなくなつた。

つていうかお前ら50回も泳いだのか。つぐづぐバカな奴らだ。

「おいカス、何か食べ物は無いの？」

勝者である錆戻も疲れ果てており、空腹のようだ。

「食い物なんて探せばどこかで売つてるよ」

「歩く気力も体力もないから、買つてきて」

「は？ 何言つてんのお

「一輝、ちいは焼きそばとかが良いかも」

「ついでに虎杖君のも買つてきて。カスの自腹で」

……嘗めきつてやがる、この女共。

しかしまあ、多数決的に俺が買つてぐることは確実なので、仕方なく売店を探す。

まあ、でも見つけたとしてもテイクアウトとかじゃなくてその場で食つ事になると思うから、買つてくることはほぼ不可能だとは思うんだけど。

探すだけ探してみるか。

ポリポリと頭を搔きながら、俺は適当にほつつき歩く。

「あのぉ……すいません」

赤い瞳びのスクール水着を着た、中学生くらいの女の子がちいに話しかけてきた。

一体、ちいたちに何の用なんだろ？　弟とかが迷子になつたとか、かな？

だとしたら探すのを手伝つてあげなきや。一輝なら関係無いやら面倒臭いやら言つて探さないだろ？　けど。

「それより、なんか頬つぺたブニブニしそつ。触りたいなあー。

「濁川一輝つていう人を　　つて何するんですか！？」

頬つぺたに触るうとしたちいを避けながら、女の子が怒り出す。さすがに、問答無用で頬つぺたを触るうとするのは礼儀がなき過ぎたかな？

「頬つぺたを触らせてください！」

「土下座まですることですか！？」

ん？　一輝に、人に頬み事をする時はまず土下座、つて教えてもらつたのに……。

何か間違つたこと、したのかな？

「あつ！　敬語が足りなかつたんだ！」

「貴女のそのブニブニしそうな頬つぺたをブニブニさせてください！」

「それって日本語ですか！？」

「ん？　何で驚かれてるんだろ？？」

あと足りないものが分らないし……一輝みたいに教えてくれそつも無いし……。

「そういう時は、強硬手段にでるしかないなあ。

一輝もよく、話し合ひのできない相手には武力と暴力と権力を持つ

てして粗手を屈せねばいい、とか言つて事態をやめにしあるナビ

こういう時は、仕方が無いよね！

「あの……いい加減、頭をあげてください。ほつぺは触りませんけど」

「 とりやあ！」

「うわっ！ いきなり何すんですか！？ つてちょっと！ え！？ 河でそんな飢えた獣の女づな目をしてるんですか！？ 河本をフ

ラフラフ振りしながらこっちに近づいてくるんですか！？

「ちょっと、赤シト、止め ッ!!」

一度目の襲撃を、スク水女の子は飛退きながらかわす。

そういう思いながらもうちには一度田の襲撃を行つのです！

プールサイド（後書き）

サブタイを考えるのが、面倒臭い

現在千秋が襲撃している赤い瞳の女の子…… 鳴神茜なるかみかねは《干渉不可》というコードが使用できる。

そのルールは、あらゆるコード、物理法則、常識などの全てからの干渉を断つことが出来るというものだ。

つまりは《干渉不可》を使用すれば重力や物体からの接触全てを断つ事が可能なのだ。

可能なのだが…………。

（アーピーされる！ なんかよく分からぬけど銀髪女にアーピーされちゃう…… ッ！…）

何を動搖したのか、茜はコードを使用してゐるにも関わらずプールサイドで千秋から逃げ惑つていた。

茜と千秋の周囲には、鋼凧と虎杖が居るには居るのだが…… 一人とも泳ぎ疲れて騒ぎを無視してゐる。

当の襲撃者たる千秋はといふと。

（……あ、れ…………？）

よつやく、異変に気が付いた。

といつても、茜の死角から襲撃して頬を触り尽くしてやがつと考えコードを使用した結果、気が付いたのであるが、自らの視界を共有するルールが通じない事態に対し、まさか茜がコード使用者だという風に考えた。

いつも一輝に色々と説明されてゐる為、すぐに色々と思考が回つていいく。

コード使用者という言葉で、ゲーム参加者といふ言葉を連想し、つい先程一輝に話した内容を思い浮かべる。

先日《干渉不可》が《完全干渉》に接触したといふこと。

その時、千秋は氷雨の視界を通じて、氷雨の居場所と一人の戦闘を目撃したのである。

つまり自然と思い出す。氷雨と戦つた者の顔を。

(…………一輝に連絡しないと……ツー)

別に相手が攻めに来たという事は確定されていない。一輝を呼び戻せば、余計に事態をややこしくしてしまつかもしない。

しかしそれでも《無影無踪》が居れば敵前逃亡も楽に行える上、千秋がまっさきに頼つてしまつのは一輝であった。

茜への襲撃を止め、携帯を取り出そうとする。

しかし当然、プールサイドに携帯を持ってきているわけがなかつた。防水性能の携帯電話ではあるが、泳いでる途中でどこかに流れてしまうかもと千秋が思つたからである。

偶然の失態……いや、それを狙つて相手は千秋たちに接触してきたのかもしれない。

(…………どうしよう…………どうしよう…………ツー?)

千秋のコード《異見互換》は相手の価値判断などや視界を盗み見ることは得意だが、それ以外は何も出来ない。

誰かに何かを伝えるルールなど有していない。

同様に鋼仮のコードも虎杖のコードも今すぐ一輝に何かを伝えるルールを有していない。

その上、二人とも泳ぎ疲れて、今すぐ逃げると言つてもすぐに茜に追いつかれてしまいそうだ。

考えれば考えるほど、状況に追い込まれていく千秋。

(…………一輝なら、絶対にすぐに逃げるんだけど…………ちいの頭じや上手い逃げ方なんて思いつかないよお…………)

千秋の頭の中では、もう一輝が早く戻つてくるか、相手に追い詰められて終わりかの一つの可能性しか無くなつていた。

茜は千秋の襲撃が止んでからしばらく様子を見ていたが、冷静になつたのか、また最初の時のように千秋に問い合わせる。

「すいません、濁川一輝……《無影無踪》はどこですか?」

「…………えつ?」

その質問で千秋は理解した。

相手はわざわざ一輝が居なくなつたのを見計らつて千秋たちに近付いてきたのではなく、たまたま一輝が居なくなつた時に千秋たちに近付いてきたのだった。

狙いは千秋たちではなくて一輝個人。

なおさら一輝に、戻つてこないで、と知らせたくなるが、連絡する手段など持つていない。

「……一輝は、先に……帰つた」

黙つてこのまま時間を稼いだつて、一輝が戻つてきてダメな事態になるだけだ。

そう思つて千秋は適当な嘘を吐いたが……。

「出来れば、こんな公衆の面前で強硬手段には出たくないんですが」下手糞な演技はすぐに茜にバレてしまい、むしろ脅されるような状態を生み出してしまつた。

こういう時だけは、すぐ人を馬鹿にして、すぐ人を騙して、すぐ人から猜疑心を引きずり出す、一輝の口が欲しい。

そんな事を思いながら、千秋は最後の抵抗として黙るしかなかつた。

「はあ……仕方ないですね」

溜息を吐きながら茜は嫌そうな顔をしながら、千秋へ手を伸ばす。その手を不意に焼きそばが防ぐ。

（……焼きそば……？）

いきなり何処からともなく現れた焼きそばに茜も千秋も啞然としているし、その二人以外の声が横から発せられる。

「「めんな、お嬢ちゃん。このクソバカ女には俺が先に用があるんだ。だから後にしてくれ」

焼きそばを突き出して茜の手を止めた、一輝が発したものだつた。その時、一輝は内心でこう思つたそうだ。

（……焼きそばで止めるつて……自分で言つちや悪いけど、凄くダメな俺…………）

「「めんな、お嬢ちゃん。このクソバカ女には俺が先に用があるんだ。だから後にしてくれ」

だせえ、クソだせえ、凄くだせえ。

千秋にさつき『干渉不可』の話を聞いたから、なんとなく直感的にあの赤い瞳の貧乳そうなスク水少女がそうかもしないと思つたんだよ。

もしもそしたら手を掴んで直接止めることは不可能。ならば何か物を前に出せば妨害できるつて。

いや、予想通りに『干渉不可』の手は止まつたよ。多分、違う意味で！

何で俺の手元に焼きそばが入つたプラの箱が有つたんだよ！ なんで鋼皿はそんなもんを買って来いつて言つたんだよ！

そもそもなんで普通に売つてる店があるんだよ！ 焼きそば売るなよバーカ！

バーカ、バーカ、バーカ！！

……なんてイジケてる場合じゃない。

現在プールサイドにて。多分、ほぼ、襲撃された。『干渉不可』に。状況的に何が狙いで、どうしてグッタリしてる虎杖を狙わなかつたのかは分からぬが……。

取り敢えず、ゲームに勝つことが目的では無さそうだ。

「…………お前、誰？」

俺の顔を見ながらスク水少女はそう言つた。まるで俺に喧嘩を売つてるかのようだ。

……いやあ、俺はつくづく思う事が一つあるんだよ。

歳上のこととをカスやらお前やら……最近の子供は敬語つてものを知らないのか？

いや、この少女が俺より歳上だつたら分かるけどさ……絶対にガキ

んちょじゅん！

スク水つてセンスあたりがもうガキじゅん！ ビキニとかにすればいいじゅん。胸無さそうだけど。

ともかく絶対にこのガキが俺より歳上つてことは無いね！

だからまずは敬語を使え、敬語を！

「ガキい、ともかく見逃してやれつて言つてんだから大人の言う事はちゃんと聞こうねガキ」

「……ガキ、ガキうるさいな。ブツ飛ばしますよ？」

「……どおやら、俺は歳下との相性が極上を通り越して、超絶的に悪いらしい。」

今すぐにこのガキを地獄の淵へと突き落して埋めてやりたい。

「何だ？ 最近のガキは力の差つてもんを知らないと口を慎まないのかガキだから？ そこら辺どうなんだガキ？」

「……さつきからガキばっかり連呼して、バカの一つ覚えですか？」

「そうなんですか？」

「ぶつ殺されたい気持ちはよおおく分かつたからよガキ。この邪魔者たちを除けていいか？ 邪魔されると不愉快なんだ」

「分かりました良いですよ。…………とでも言つと思いましたかバカヤロウ。バカヤロウみたいな三下さんには用は無いんですよ。だからさつさと退きやがれ」

「上等だ。そつちがそう言つなら、消すまでだ」

そう言つた後、まずはムカつく焼きそばが入ったプラスチックの箱を離して千秋に触れ、自分の姿と同時に消す。

その後、鋼皿と虎杖の近くに姿を現して、二人にも触れる。

そしてまた同時に全員の姿を消し、これで『干渉不可』からの逃走準備は完了した。

「お前達はそのまま逃げる。あのガキンちょは俺が引付ける」

その後、しばらく離れた忌々しき焼きそばの売店の物陰に隠れながら

ら三人に俺はそう言った。

『干渉不可』はまあ当然最強の防護服のような「コード」だが、逃げるのは容易い。

一度姿を隠して適当に走つてしまえば、すぐに簡単に振り切れる。だからこいつしてまた全員姿を現して作戦会議ができるのだ。

「何言つてゐる一輝！ 」このまま逃げようよー。 あの子を敗退させる気でも無いんでしょ？

「ああ、ゲームを進行させる気は無いが……性格的にあのガキが気に入ら……」

情け容赦なく千秋に頭を叩かれた。 痛い。

叩く事はないだろ、叩く事は。

「もう逃げれる状況なんだから、わざわざ相手しなくていいじやん」

「いざれ相手にする。その前に相手の「コード」の情報を実戦で集めようとしてるだけだ」

「『非観理論』を使えばいいよ」

「『非観理論』はあくまで未来の出来事を観測するだけで理論値しかでない。 実戦じゃ、理論値だけじゃ力バーできない事が沢山あるんだよ」

「そんなの建前でしょ？」

「それを言つたら、理屈の全てがそうなつちまつ」

まあでも、千秋の言つ通り、俺の「コード」の情報とかそこら辺は全て建前なんだだけね。

俺はあのガキが性格的に氣に入らない。 鐮屈のほうがまだマシかもしれない。

初対面の時に俺を指す代名詞として貴方つていつ風に言つたもんな。 それに比べて、誰？ だつてよ。

まったく本当、最近の教育現場が悪いのか親が悪いのか、はたまた育つた環境が悪かったのか。

どれだけは知らないが、基本的な人に対する礼儀つてもんを教えて

やらないと気が済まない。

その情熱が、絶不調の俺を覚醒させたのかどうかは知らないが。千秋の反論に屈せず、折れない普段の俺の精神状態に戻っていた。どうやらなんか、調子が戻ってきたみたいだ。これならいいける。

「一輝、ヘマとかは絶対にしないでね」

最後に千秋は反論する事を諦めたのか、俺に向かってそう言つてき

た。

ホント、

「誰に向かって言つてるんだ、それ」

逃走準備（後書き）

卑怯で卑屈な主人公。敵前逃亡とは何事か！
強制的にバトらせてやろうつか？

『無影無縫』

「おやおや、そこのお嬢さん。独りで何かお探しかい？」

再びプールへと戻ってきた俺は、キヨロキヨロと何かを探すように辺りを見渡すスク水少女へ話し掛ける。

「…………あ、れ？」

スク水少女は俺に視線を移した後、ようやく辺りで起こっている異常に気付く。

異常といつても、それ程、大きな事じやない。

スク水少女以外の人間が、このウォーターパーク内に俺以外、誰もいないというだけだ。

そういう状況を作るのは簡単だ。

鋼廬の「コード『否定定義』はコードであれ常識であれ何でも無効化できる。

まあ、言い方を変えれば、何でも否定できる。

だからこのウォーターパーク内に濁川一輝以外の人間が居ることを否定してもらつた。

まあ無効化とは少し違う使い方で、第一成功するとは思つてなかつたのだが……結果は反するものとなつた。

『干渉不可』にはコードは通じない。

だから必然的に、このパーク内に居る人間は俺とスク水少女だけとなつた。

「…………別にいいや。目的は達成しやすくなつたし」

「…………つまりそれって、目的は俺だつたつてわけか？」

少女の目的も言葉の意味も、一切分からない。

だから質問するしかない。取り敢えず、このクソガキが何で俺たちに接触してきたかが分からなきや。

上手く交渉すれば、こっちの仲間になるかもしない。

「アンタのコードは『無影無縫』よね？」

「だつたら？」

「アンタは濁川一輝じゃない」

「…………はあ？」

「…………こきなり何を言い出すんだ、このガキは？」「こひちは過去に《無影無縫》に会った事があるの。でもソイツは学生でも無ければ濁川一輝といつ名前でもアンタみたいな顔でも無かつた」

「…………おいガキ。最近じゃ ロードを引き継ぐって便利な事ができることが知ってるか？」

「知ってる、《完全干渉》もやつ言つたからね。でもそれは実現不可能な事なの」

「何言つてんだ？ ロードの引き継ぎは可能かもしれない。というかそんなの市内に一人はいる」

「確かに、ロードの引き継ぎは可能かもしれない。というかそんな可能か可能じゃないかはどうでもいい。根本的に不可能な《無影無縫》に限つては」

「ああ？ 何が不可能つていうんだよ？」

「…………やばい。このままじゃ、バレる。」

ただでさえ、先日の千秋のせいでの支障が出てるつてのに……ロードバレたら一大事だ。

「さつき言つたでしょ？ 過去に《無影無縫》に会つた事があるつて。だから今、ソイツがどういう状況に居るかも知つてるの。今何処で何をしてるのか、全て知つてる」

「…………」

「ソイツは今、県外の刑務所で服役しているはずなの。これどういう意味か分かる？ 本来、県外に居るはずの《無影無縫》が今この場、あたしの田の前に居る。これは明らかに矛盾してゐる」

「…………チツ」

「ロードから導き出される」とは一つ。現在服役中の《無影無縫》は脱走して、身分を偽り、このゲームに参加してゐる

「…………おいおい待て、ちょっと待て。身分を偽りつて……名前や年齢は誤魔化せても顔までは偽ることができないだろ？」

「協力者が居るんでしょ？ そういう偽る事に関して卓越している

コードを使用できる協力者が」

「…………ふふふははははははッ！！」

突然笑い出した俺に、スク水少女は警戒したように身を構える。

「バアアカッ！！

バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バカ、バーカ！

「よりもよつて氣付くとはな……最低だよ、このクソガキ」

最低脳！ このクソ馬鹿ガキが！ んなわけねえーだろ、バーカ！

「だがな、俺だつて……取り戻したいものがあるんだよ」

「アンタの失つたものなんて、自業自得じやない！ カッコ付けて、自分が何をしたか忘れたの！」

「知るか！ 知つてるわけねえーだろ！ なんて言つたつて、俺の『無影無縫』は

、

偽物なんだから。

「アンタを勝たせはしない。アンタの大切にしている物をあたしが壊す」

「やつてみろよクソガキ。お前みたいな甘チャンに俺が負けるかよ」

俺の挑発の言葉が終わると共に、スク水少女は突撃して来た。

触ることすら叶わない、触れようとしたら押し返される。

それがスク水少女のコード。おおよそ世界最強の防御壁……いや、防護膜とかの方が正しいな。

それに対してもちらは姿を消し隠すだけのコード。盗みや覗きや逃走でしかその真価を發揮できない。

俺一人ではこの少女に勝つのは到底不可能。

そもそも鋼皿の無効化も、虎杖の観測も、千秋の覗き見も、こちらの陣営のコード全てが通じない。

『完全干渉』すら、この少女を殺す事は可能でも、抑止することは

無理だらう。

俺の周りにあるコードではこの少女を止める事はできない。

まあ、今の俺はこの少女から逃げればいいだけ。そんなの楽勝。こ

ちらに圧倒的な分がある。

でもいざればこの少女を倒さなければいけない。

いや倒し方ならある。周りの環境を利用すれば、この少女を殺す事も、場合によつては止める事も可能だ。

問題はその、場合、が成立するかだ。

だから、まあ千秋には建前で言つてしまつたが実験をしなければいけない。

非道で下衆な悪魔的手段を用いて、この少女がどういう人間なのかを確かめなければいけない。

周りの空間に溶けるように姿を消しながら、俺は少しばかり笑みを浮かべる。

『無影無踪』（後書き）

相も変わらず、絶好調になると外道になる主人公。
いつその事、永遠に不調だつたらいいのに。

「くそつ！ 逃げるな！」

俺が居た場所に手を伸ばすが、空を切るだけ。さすがに無いとは思うが、隠れてる状態でもあの少女に触れられれば姿を強制的に現される事になるかもしれない。

出来るだけ距離を取つた後、俺はまた姿を現し少女に話しかける。

「お前じや俺を捕まえられない。どうする？ このままじや俺を負かす事ができねえーバ」

「心配」無用」

そう言つて、少女は俺へまた突撃しようとする。

バカの一つ覚えか。

そんな風に俺が油断をしていると、少女の体が急加速した。まあ、空気抵抗などの勢いを削ぐものを全て拒絶した結果、加速したんだろうけど……。

勢いが速過ぎる。このまま衝突されれば俺、死んじやう。姿を消して回避しようとするが、間に合わず、少女に押し倒されるようにして捕まつた。

コードによつて消した姿も現され、衝撃が全てくる。

呼吸が上手くできない。苦しい。

「拒絶」

そのまま少女は俺の首に手を当つて、コードによつて自分の皮膚に物が触れることが無いように設定する。

皮膚が、頸動脈が、神経が、脊髄が、声帯が、奥へ奥へと押し込まれていく。

「がつ…………」

声が出せない。喋ることすら叶わない。

意識も体の感覚も、薄れていぐ。1秒後とに感じられなくなつていぐ。

このままじや死ぬ。

本能的にそう思つて、切り札を出すための合図……指をどつにか鳴らそつとする。

何かが弾けるような音といつよりも、何かが強く擦れただけの小さな音だつたが、どうにか鳴つた。

「おかあーさん、どこおーーー！」

「ツ！」

子供の泣き声が、殺伐とした雰囲気に割り込んでくる。パーク内には俺と自分の二人だけだと思っていたのか、少女は驚き、俺の首に押してきていた手を少し離す。

溜まつていた血液が、中断されていた呼吸が、薄れかけた意識が。死ぬ前の瀬戸際で戻つてくる。

「……おまあじや、あのガキ死ぬぞ！」

呼吸を整えている暇なんて無い。

伝えたいた事を早めに伝えなければ、俺が死ぬだけだ。

「お前……ツーーー！」

俺の言葉を聞いて、激怒でもしたのか、コードの設定などをすつ飛ばして少女が俺の首を本気で絞めてくる。

絞め殺そうとする、俺を。

……だからそれじや死ぬつて言つただろ。ガキが。

また指を鳴らす。

どこかで、支柱が失われたのか、何かが崩れるような騒がしい金属音がする。

「ツーーー！」

当然、何が崩れ去ろうとも少女には傷一つ付かない。なんせ最強の防護服のようなコードが守つてくれるから。

だが、普通は違う。普通の人間はコードなんて持ち合わせちゃいない。子供ともなれば当然だ。

例えば、何かが崩れて鉄骨の山でも降つてきたとしよう。

少女ならばその鉄骨の雨を気にせず歩ける。だが普通の一般的な子

供ならば鉄骨を怖がり動けなくなる。

そして、高確率で、その鉄骨の一いつに。

「ズッシャーン……」

「この下衆！」

少女は俺の首を絞めていた手を離して、強烈な一撃のパンチを鼻つ面に放ち、その場をすぐさま走り去った。

おおよそ、子供を助けに行つたといふじろだりひ。

心配する事は無いのに。

確かに、俺が隠してパーク内に残しておいた子供の近くで鉄骨の雨は降り注ぐが、その全てに俺は一度触れてある。

雨は子供に当たる直前で全て消える段取りだ。そしてその段取りは『干渉不可』がどう抗おうとも変わることのない決定事項だ。だから、わざわざ俺を殺してから子供の様子を確認しても良かつたの。

まあでも、これで少女がどういう心の持ち主かは分かつた。非常に良心的な世間一般で言われる『いい子』である。

だが、こういう性格は、ことサバイバルに関しちゃ悪い。最悪の部類に入る。

まあ殺し合いで無いけれど。それでも最悪の部類にはいる、良心的な娘だ。

あとは『非観理論』で少し調べて貰えば、『干渉不可』を討ち取るシナリオは出来上がる。

だが問題は……『無影無縫』の件だ。

あの少女は本来の『無影無縫』の使用者と面識があるそうだ。それも浅からぬ因縁まで持つてそうな言動。

今回この外道な行為が、少女の中の『無影無縫』が行つであろう行為だつたらいいのだが……もし少しでも違和感を感じられたら、次は見破られる。

まあでも、『無影無縫』はここまで役に立つてくれたからな。十分な働きだ。

これ以上は使用しなくてもいいかもしない。

ともかく田先の問題は……千秋や鋼凪だろうな。

子供を人質に、少女の性格を晒させたなんて事はとっくのとうに知
れてるだろう。千秋のコードによつて。

だとしたらまず怒られる。こっぴどく怒られる。

それどころか、協力すら望めなくなる。孤独で勝ち残らなければな
くなるのは当然キツイ。

当然の報いだとも思うのだが。

「ハア…………鼻痛え」

鼻の下を指でこすり、付着した血を見て、さらに溜息を吐きながら
俺は起き上がる。

さつすが、一輝さん！

子供を人質にした上に殺しかけるなんて最高に最低な行為じゃないですか！

もう憧れちゃう！

『おうへ、一輝。どうした?』
「どうしたじやねえーよ」

携帯電話から聞こえてくる、男のまるで人生を謳歌しているかのような声に、12月初頭の夜の寒さに凍え震えている俺としては非常にムカついていた。

月が無い、星明りが至る所で輝いている夜空を見上げなら会話を続ける。

「親父、アンタ今どこにいるわけ?」

そう。今現在俺が携帯で会話している人物は、俺の義父……正確には養父にじかわだが。

濁川是無ぜむ。性別オス。年齢不詳。

数十年前に親がぶち殺された俺と、不思議少女ちゃん千秋を拾つて一応は育てた人物。

その人物に昨日、空港まで迎えに来いと言われたのだが……。まあ、そんなアバウトな内容で動いてしまつたつて、いざ空港に着いた時ら、『居ない』なんてことになりかねないので、今俺は電話して相手の位置を確認しているわけだ。

『どこつて、友達の家だけど』

「…………」

まあ、予想通り。このクソ親はそういう人間であることは昔から重々承知のことである。

人に何かを言いつけておいて、自分はどこかへフラフラと行つてしまつ。

昔からそういう人物だ。

『……まあ、いいや。どこかで待ち合わせしよう。今は県内県外』
『電波が通じてるから圈内だな』

『くだらない事を言つてるとブツ飛ばすけど、それでどこで待ち合

わせする?』

『『じゃあ駅前』』

「どこの駅前だ、はつきりせろ」

『ああ? んー、じゃあどこの駅前』

「……いい加減にしろよクソ親父。テメエの顔面をズタズタに切り裂いて忠犬ハチ公像の前に晒してやるつか?」

『また変な脅しを考え付くなあ。まあ、取り敢えず駅前でまた会おう』

『おい……チツ』

またまたアバウトな事を言われて、通話が切れた。

冬の寒さのせいか、それともクソ親父に対する怒りのせいか、俺の携帯を握る手は何故かフルフルと震えていた。

携帯が軋んだ音を上げる前に、ポケットに乱雑にしまい、どこへ行くかを考える。

駅前……地下鉄なのかローカル線なのかそれともJRの駅なのか。せめてそれ位ははつきりさせてほしかった。

あまり深く考えたところでのクソ親父の前では意味をなさない。溜息を吐きながら、取り敢えず、電車に乗る事にする。

「おう、一輝! 久し振りだな」

適当な時間を見計らつて、適当な場所で降りたのだが、改札を出たところでの濁川は無に会えた。

当然というかなんというか、俺はこんな場所を全く知らない。来たことがない。

それだというのに、

「何でアンタはこんな場所に居るんだよ?」

「たまたま」

たまたま……偶然この場所に居た、といふことでいいのだろう。

俺が適当に来たら、たまたまその場所に親父が居た。

出来過ぎた話である。当然、誰かが人為的にこうしたのだ。

本人曰く、たまたま、だそうだが。

「俺がやつたお古のコードに、制服……一輝、お前また何か千秋を怒らすような事をしたのか？」

「相手の性格をしるために子供を人質にして殺害未遂をしたら『頭冷やってきて』って言われて家から追い出されたよ。頭どころか体が冷えそなんだが」

つい先日、俺たちは『干渉不可』と戦闘になりかけた。

俺のコードでどうにか全員逃げ切ることができたが、俺だけは残つて『干渉不可』と少しの間、対峙した。

その時、これから先の事を考えて子供を人質にして『干渉不可』の人間性を調べた結果。

俺は千秋にこつひどく怒られ、その上、何の荷物も持たされないまま家を追放された。

どうにか学校に行くためという理由で制服を、冬だからという理由で一枚だけコートを着れたが、どちらにしろ寒い。

俺のコードは物体を消し隠すだけだから、寒さを通さないなんて便利な性質まで持ち合わせていらない。

「そりやまあ、その程度の事で大激怒するとは千秋の沸点は低くなつたんだな」

「元からだ」

「まあ普通にこんな平和な国にしばらく居たら、普通はそういう事で怒るようになるのか」

「というか、言つちや悪いが俺とアンタの人間性が最底辺まで落ちてるからだ」

「そうか？」

「多分」

子供を人質に取るのをその程度という表現をするのは、この国では明らかに異常者精神だろう。

「しかしあ、それじゃあ俺も家に入れて貰えるかどうかが分から

ないな

「アンタは別に平氣だろ。ただ単に家に帰ってきただけなんだからあの元ゴミ屋敷、少し前まで俺の住処だったあの家の所有權は親父にあるんだから。

「それじゃ、まあ、積もる話もあるだろ？が

そう言って親父は少し間を置き、俺に顔を近づけて問いかける。

「今、お前らは何に巻き込まれている？」

「……話が早くて助かるが、それは随分長い話になる。家に帰つてからにしよう」

そう言ってまた俺は改札を通り

親父は少しばかり怪訝そうな表情をした後、こう言った。

「家に帰つてからつて……お前、家に入れるのか？」

唯一今言つてほしくない言葉だった。

帰宅（後書き）

お義父さん登場。

この人が主人公を非道下衆鬼畜の最低悪魔野郎にした人物です。

理由

「はあ……つまりお前はその賞品の失った物を何でも取り戻せる権利を狙つて参加してるわけか」

「あと、主催者潰しな」

やれやれ、とソファに座り溜息を吐きながら俺の話を一通り聞いた親父は呆れた様な表情を浮かべながらコーヒーを飲む。そして一言。

「千秋に土下座して謝つて来い」

まあ当然の言葉である。

いくら失った物を取り戻したくて、鋼仮を見捨てたり、子供を人質にとつたりしてもいいはずがないのである。倫理的に。俺の場合はさう。

「というか、さつととそんなクダラナイお遊びから手を引け」

「いやでも、そしたら主催者潰しの方は」

「『非観理論』でも勝ち残らせておけばいいだろ」

「ふざけんなよッ！」

「そんな言葉を俺に向かつて吐くんなら聞くが、お前の取り戻したい物つてのは何だ？」

「それは……殺された家族と」

「またそれか」

言い訳をする子供に対して親が溜息を吐くように、呆れた態度を取りながら親父は俺に言つ。

「断言してもいいが、こんなクソくだらないゲームなんかよりも確実で安全にそんな物は取り戻せる。お前のコードがあればな」

「…………」

「……いい加減にしろよ。俺はお前にコードの使い方はしつかりと教えた。いつまでも偽つて保身にひた走つてゐんじゃねえよ」

「偽る事が、俺のコードだらうが

「なに寝惚けた事言つてるんだお前。お前は発するだけ、コードは全てを捻じ曲げるだけ、嘘かどうかを判断するのは世界の方だ」

「…………だからって俺自身が、あれを嘘にするのが嫌なんだよ」

家族が目の前で殺されて、その場で姉は発狂して。そして自分は何も出来なくて。

それを嘘にするのは嫌なんだ。それを自分で誤魔化すのは嫌なんだ。
「はあ…………ともかく、今すぐ千秋に土下座していい」

「…………分かつたよ」

千秋は、俺と親父が帰つてきた時に、親父にコーヒーを出したかと思えばすぐさま自分の部屋に引きこもつてしまつた。

階段を上つて2階の千秋の部屋のドアの数回ノックする。

「入るぞ」

何故か千秋は鍵も掛けていなかつたので、勝手にドアを開けて部屋に入る。

「焼き土下座」

そしていきなりこの一言である。

熱した鉄板が今ウチには無いから不可能であるが。
いや、そもそも倫理的にやつちやいけない事だと思つが。
「すまなかつた」

取り敢えず、部屋に入つてそつそつ俺は千秋に向かつて普通の土下座をした。

なんかプライド的な何かが傷つくな。

「何が悪いか、分かつてる?」

「ああ、一応」

「それじゃ、一度とあんな事しない?」

「無理だ」

「…………なんで」

「勝つためビイツー?」

いきなり頭を踏みつけられるようにして地面に鼻をぶつけた。
痛い、かなり痛い。泣くほど痛い。

「何で勝たなきゃ いけないの？」

「それは……お前には言つてなかつたけど」

「ちいが家族を元に戻すため、つて聞いた時、一輝はふざけるなつて言つたじやん。それに家族ならちいがいるじやん。なのに何で……ちいに嘔吐いたの？」

「嘔は吐いてない」

「じゃあ」

「殺された両親を生き返らして、壊れた姉を正氣に戻す。そんでおいて主催者はこの手で地獄に突き落す」

「それじゃ、やっぱり家族を元に戻すんじや」

「元には戻らない。俺は戻らない」

「…………どういう事？」

「そのままの意味だ。気にするな」

「それつて……死ぬつて事？」

「さあな」

「ねえ一輝、それ本当なの？」

「さあな」

「一輝、ちゃんと答えてよ」

「…………ともかく俺の勝ち残る理由は、主催者を地獄の底へ叩き落とす。それ以外は全ておまけだ」

「よく分かんないよ」

「お前バカだもんな」

千秋が途端に足に力を込めて何回も、俺の頭を踏んでくる。

「ねえ一輝。まず一輝の一一番いけない所はその人を卑下するといつだ」とちいは思うんだよ。そこ直そつか。うん、それがいい

「ちょ、やめつ 痛い、痛いから」

何発もゲシゲシゲシゲシ、千秋が踏んでくるため途中でそのままの姿勢で転がつて起き上がる。

「あ、逃げるな一輝！」

「逃げるが勝ちつていう言葉を知らないのか？」

俺の挑発が癪だつたのか、千秋が追いかけ回してくる。それも狭い部屋の中で。

たしかこういう野生動物のような勇猛果敢で猪突猛進な奴への対処法は背中を見せない、だつたよな。

「はあ……何故、千秋はこんなにもバカなんだろう。ああ、もしかしたら頭に詰まつていくものが全て乳に」

「ツ！一輝、今すぐにでにゅあ！？」

「なツ！？」

頭に血が上り過ぎたのか、飛びかかろうとした千秋が姿勢を崩し、俺を押し倒すような形で転ぶ。

倒れ際に俺は、後頭部を激突して、視界をモニュとした何かで覆われてしまつた。

ああ、にしてもこの今すぐにでも窒息しそうなくらいに密着している何ががもしもアレだとしたらというアレでなくたつて体の部位のどこでだつて体重が掛かつて異常なほど千秋の体のどこかが密着してしまつているわけで、ああ、にしても肉付きがいいというかまあそんな事を女性に言えばすぐさま殴られてしまうんだけどまあ触感的にはこういうモニュツとした程度が丁度いいよね、なんて話をしたいわけではなく、もしももクソも無く千秋の体の部位のどこかだとしたらまずこの先の未来として予測できるのはボツコボコにされてしまう俺の姿なわけなんだけまあでも、例え何かの怪我を負つたとしてもいえる事はただ一つ。

我の生涯に一生の悔いなし。

「～～～～ツ！？」「

まあ、何してんだろ俺。

理由（後書き）

すいません。テストで更新できませんでした。しかしうまく更新できました。しかしテストも今日で終わり。

しかしあ久しぶりに書こうにも訳が分からなくなつたので、まあこの話から色々と何か矛盾していくような気がしてくるんですけどね。というかまずこの話が矛盾しているといつ。きっとこのせいだ。〇このテストのせいだ。

しかしあ、俺、何やつてんだろ。

通常を保たないと、また今回の最後みたいな悲劇が起つてしまつ。

「鋼仮が休み?」

「らしいです。風邪引いたみたいで」

とある事情で千秋にしばらく顔が上がらなくなつた俺は、その千秋の命令で虎杖と三人で学校の屋上で食事を摂つていた。

「大変だね。お見舞いとか行つたほうが良いのかな?」

「別にいいだる。下手に見舞いなんか行つて風邪でも引いたら、気が悪くなるだろうしな」

「わつ、一輝がまともなこと言つてる!」

「千秋先輩、いくらなんでも酷いですよ。その言い方は」

「でも虎杖君、あの一輝だよ?」

「確かにそうですけど」

二人して俺のことを残念なものみたいに言いやがつて。そんな俺が今まで酷いことを一回でもしたか?

にしても、鋼仮が風邪とは……。

バカは風邪引かないつてのは嘘だつたんだな。千秋の体調も気にしつかなきやいけない。

それにしてもまあ……。

「平和だな」

「いきなりどうしたの、一輝?」

「いや、平和だなつて思つてさ」

「そりやこには戦争を放棄した国ですからね。拳銃一つ持つてたりしたら犯罪ですよ」

虎杖はそう言つたあと「あ、そういうえば鋼仮が持つてたような……」
なんて物騒なことを言いつつパンを齧つていた。

ちなみに俺が言つてる平和つて言葉はそういう戦争とかが無いって意味じゃなくて、『干渉不可』からの接触以来何も起こつてないってことを言つてるんだが。

まだ参加者は俺を含めて7人もいる。なのにここにじばりく、何も起
こっていない。

ここにいる俺を含めた3人と少しばかり行動を起こした《干渉不可》はともかく、ほかの3人……《禁思用語》《結論反転》《絶対規律》はゲームの開始時から何の行動も起こしてない。

たんにゲームに興味が無くて、もう自ら大切な物を壊して辞退して
るなら別になんの問題も無いんだが。

暗躍されると一番困る。裏でこそそこそ黙や俺たちへの対策やらを
仕掛けられてもしたら、対峙する時に圧倒的に不利になる。
しかしまあ、その仕掛けがすべてコードによるものだつたら《否定
定義》があればすべて解除できる。

だが今は体調不良で鋼凪も休み。解除もできない。

こんな時に敵から奇襲なんてあつたら、まさしく最悪だ。

「本当、平和だなあ」

まつたく、少しさはまともに平和を享受できないものか。そんな最悪
なパターンなんか考えてないで。

自分の思考回路を少し恨みつつ、俺も弁当に手をつける。

「…………メール？」

昼休みもあと少しで終わるであろう頃。

俺の鳴らすの携帯が、登録アドレス3件の携帯が振動した。
画面にはまつたく知らないアドレスが表示されていた。

「あ、これ梓美ちゃんのアドレスだ」

「…………はあ？ なんで鋼凪が俺のアドレスを知つてんだよ」

「そいついえば前、千秋先輩が教えてくれましたね。一輝先輩ののア
ドレスやら電話番号やら

「千秋、お前…………勝手に個人情報バラしやがって」

「でも知つてたほうが便利でしょ？」

「まあ、ただけど…………」

そのお前のドヤ顔だけはムカつくな。一発ぶん殴つてやりたいくらいに。

大体、教えるにしたって本人に了承得てからにしろよ。俺、今までバレてたの知らなかつたんだぞ。

「で、なんて」

「んあ？ 何が？」

「メールだよ」

「ああ、そういうば」

千秋に促されるようにして、俺は鋼凪からのメールを開く。メールの内容は、

『鋼凪梓美はあたしが誘拐しました 取り戻したくば、ここに来なさい』

といつたくだらない物だつた。

「えつ！？ 何このメール！？」

「どうしたんですか？」

千秋の反応におかしさを感じた虎杖が携帯の画面を覗いてくる。

「…………場所は？」

冷静沈着な虎杖は、とりあえず場所の確認をしようとする。いやとも賢い。この賢さは、鋼凪にも千秋にも、そしてこの誘拐犯さんにも見習つてほしいものだ。

「…………なあ、虎杖。鋼凪の携帯つてスマートフォンとかだつたか？」

「えつ？ ……………確か退院祝いに買い替えたとか自慢してきましたね」

「そうか。なら解決だ」

俺はさつそく相手に返信し、携帯をします。

「いやいやいや！ 一輝の人間性がそこまで落ちてるなんてちいは信じたくないよ！」

「ちよつ一輝先輩、なに返信一つで事を済ませようとしてるんですか！？」

「仕方がないことなんだ」

「仕方がないよ！ 一輝頭大丈夫！？」「

「おい、虎杖」「

俺の態度に文句を言つてくる一人に対して、俺は冷静に物事を判断できるほうを指定し、携帯を渡す。

数十秒後。

「……仕方がないことですね」

「確かに、一輝の判断は正しいよ……」「

二人ともちゃんと、添付ファイルが開けないという現実を受け止めてくれた。

時々あるらしいのだ。スマートフォンで撮った写真などの添付ファイルが普通の携帯じゃ受信できないということが。時々あるらしいのだ。

まあ、どうせ俺には関係のないことだと思っていたが、まさかこんな所でこんな無駄知識が役に立つとは……。

「ともかく、俺は相手の返信が来たらすぐにそこに向かう。お前たちは学校で待機しといてくれ」

「え、でも皆で行つたほうが

「相手は『干渉不可』。狙いは俺だけだ」

「……何で分かるんですか？」

あたし、という女が主に使う一人称。機械に弱そう。鳥頭。

以下の理由から『干渉不可』だと予測できる。

まあ、言つてしまえば鋼屈を浚つて、俺の携帯に直接メールしてき

たんだ。その時点で狙いは俺の確立が高いだろう。

『干渉不可』は俺に……正確には『無影無踪』に執着している。

それにもしも他の参加者だとしたら、虎杖や千秋にもメールを送っているはずだ。

「だから俺が行く。お前らは普通に授業受けててくれ

「分かつた。ちゃんと梓美ちゃんと助けてよ」「

「まあ、任せとけよ」

その言葉で千秋たちと俺は自然解散となつた。

誘拐（後書き）

そろそろセカンドステージ、開幕させますか

「……次で降りろ、か
メールの指示に従い、電車で移動している俺は画面を見ながらぼつ
りと呟く。

相手も一度注意すればちゃんと出来るじゃないか。さすが鋼仮を誘
拐しただけはある。

そんな事を思い、携帯をしまおつとした時にちょうど手の中で振動
し始めた。

鋼仮の携帯にはまだ返信していない。誘拐犯も返信を返してきて今
まで指示をしてきたのだ。誘拐犯が追加でメールをしてきたとは思
えない。

それに着信したのはメールではなく電話だ。今までメールだったも
のをわざわざ電話での指示に変える必要性は何処にもない。まあ、
誘拐犯が文面を打つのが面倒臭くなつたなら別だが。

携帯に表示される番号は、登録されている3件ではない。

虎杖か……？ でもどうして？

そう思いながらも一応俺は電話に出る。

「もしもし」

『もしもし一輝先輩ですか。ちょっと大変な事態が起きました』

俺の予想通り、電話を掛けてきたのは虎杖だった。

冷淡……というよつはなるべく声を抑えて、伝えられる事を簡潔に
伝えようとしているように感じられる。

「……どうした？」

『いきなり放送が入つて、学校がどつかの誰かに占拠されてしまい
ました』

「そりや随分、ふざけた放送だな」

『ええ、僕も同感です。後々流れた放送に教師の悲鳴と銃声を混ぜ
た辺りが特に』

「……今、お前は？」

『教室です。まだ幸い、酷いセンスをしてるどつかの誰かさんたちには遭つてませんから』

「なら千秋と合流して、そこから

『えつ？ 何て言つたんですか？』

「だから千秋の『異見互換』ならそのテロリストたちと視界を共有して、死角が常に分かる。だからそれをつましく利用して、連れていくだけ連れて、」

「あ、れ……？」

俺、言えてない………… 言葉が？

『一輝先輩？ さつきから最後の言葉が聞こえないんですけど』

虎杖の言葉で、確信する。

「……おい虎杖。ちょっとした質問だ。答えてくれ『

『いきなりどうしたんですか？』

「田の前に殺人鬼がいたとする。お前の力じや到底敵わない。全力疾走すれば交番に辿り着ける。」こんな場合、お前ならどうする？』

『そりや………… 交番に…………』

やつぱり、そうだ。

となるともしかしたら裏で繋がつていた可能性もある。

まあ、何にしろ想定していた中で一番最低最悪の事態が起つてしまつた。

「虎杖、率直に言いたいが、俺たちは今それすら出来ない状況に陥つた」

『…………どういひ、ことですか？』

「『一輝だよ。』『…………』による妨害…… つてそれすら言えないのか……』

『…………ともかく、『一輝』による妨害で言葉が言えなくなつてる状況は、分かりました』

そう、虎杖の言つ通り。

『一輝、『禁思用語』による妨害によって今俺たちは上手く言葉を

言つ事が出来なくなつた。

まあ、意味は無いが虎杖の電話のお蔭で《禁思用語》のルールは分かつた。

《禁思用語》は書いて字の如く、言葉を封じるコードだ。

多分、その影響範囲はコード使用者に近付けば近付いた分だけ強くなり、果ては封じられた言葉を言う所か思つことすら封じられる。さつきの殺人鬼やらなんやらの質問。答えは簡単で、交番に逃げ込む、と言えば良かつただけだ。

しかし虎杖はそれを言うどころか、答えまで辿り着けなかつた。非常に簡単誰でもわかつてしまふ様な答えなのに。

だから《禁思用語》の概要が掴めた。

妨害電波のようなそのコード、封じられる言葉の数の制限、変更の有無すら分からぬためにかなり強う様に思える。

だがしかし言つてしまえば、それだけである。

言葉を封じられる。ただそれだけ。

確かに思う事すら封じられるのは強みではあるが、遠くからの射撃、人為的ではなく自然発生したちょっとした事故、そう言つた事には何の対策にもならない。

まあ、この平和大国日本において遠距離射撃用の銃火器を高校生が持ち運べるわけがないんだが。

近距離で、誤つて意図せずに包丁が刺さるという事態には何の対策にもならない。

それは使用者本人が一番分かってて、分かってたが上に今まで動かなかつたんだろう。

まあ、その他にも《禁思用語》の対策はある。例えば。

「ともかく、今から俺がそつちに戻つたところで意味が無い。虎杖は千秋と合流してどうにか学校から脱出してくれ」

『分かりました』

こんな風に、言葉を言い換えるという単純な事。それが《禁思用語》への対策になる。

まあ英語だと言い換えようとしたところでその単語を使ってしまう

たら《禁思用語》に妨害されて意味が無いだろ。

だがまあ、この日本語といつものばかみたいに無駄に表現豊かである。

まあ、大概是簡単簡潔な言葉で済ませるから《禁思用語》の術中に嵌つてしまうが。

「俺は変わらず、鋼屈救出に向かう。間に合えば、そつこに鋼屈やら連れてそのままコード使用者を討つ」

『わかりました、それじゃ』

「ちょっと待て」

『……何ですか?』

「あつちは好き勝手にコード使えるのに、お前は全然好き勝手にコードを使えないっていつのは不公平だろ?」

『世の中の大半は、不公平、不平等で成り立ってると思いますけどまあ、ともかくただの確認だ。お前は《非観理論》を活用できるか?』

『一輝先輩には出来るんですか?』

『ああ。だからその方法教えてやる』

皆既月食だぜ！ 赤いぜ！

吸血鬼が出るんじゃねーの！？ やつほい興奮してきた！

……というのは半分「冗談」ですからまあ気にしないでください。

一輝先輩は、ただ言葉を思えなくするだけのコードだと黙っていたけども、そのただが一番怖いのだ。

『無影無踪』のようにただ姿を消すだけのコードに『否定定義』は負けた。

それと同じ事が『非観理論』でも起こるかもしれない。

いや、それどころかこいつちは圧倒的に不利だ。

『非観理論』のルールは一つ。全ての事象を観測する」とと全ての者から観測されないと。

そして制限として、事象を観測した場合に、その事象について行動、言動などのあらゆる手段での干渉を禁じられる。

この制限のせいで、そう簡単に事象観測は出来ない。『否定定義』がいれば別だが、鋼屈は誘拐されて今すぐにこっちに来るのは不可能だ。

つまり僕は今、ただ全員から見れないだけの存在だ。

しかもただ見れないだけで、『無影無踪』とは違うそこに姿はあるのだ。

最悪なことにテロリストは銃を持っている。流れ弾などは僕に当たつてしまふのだ。

ただ見えないだけの存在に対し、テロリストが銃を適当に乱射でもしたら即ゲームオーバー。

一輝先輩は事象観測について、工夫をすれば制限を受けないと書いていたが、それも確証が無いものだからあまり試せない。

その手順が失敗すれば、すぐさまに制限を受けて僕は動けなくなるかもしれないからだ。

こんな普通のテロリストに対しても負けてしまいそうな弱々しい

ードなのに、さらに敵からのコードによる妨害を受けている。

全くなんなんだよ、この圧倒的な不利な状況は。

ゲームの性質上、参加者である僕が死ぬ確率は少ないだろうけど、それでも最悪、流れ弾に当たつて死んでしまうことだってあるかもしない。

コードが迂闊に使えない。本当に最悪な状況だ。

それなのに……この人は……。

「千秋先輩、起きてください」

「……ほえ？」

何でこのおかしな姿の先輩は学校が危ない人達に占拠されて、もうクラスの全員が教室から逃げてゐるのに、机に突つ伏して寝てるんだよ……。

「……あれ？ 何か違和感が……。

「あれ……何で、虎杖君がここに……？」

「ただいま学校がテロリストさんたちに占拠されていてピンチな状況だと思って一輝先輩に電話掛けたらコード使用者による奇襲だと言われまして『取り敢えず千秋と合流して脱出してくれ』と言われたので2年生のクラスに来たらなんか皆逃げ出してきてそれでガラガラになつた教室を一応探していたら机の上で寝ていた千秋先輩を見つけたから今口にこうしていはるわけです分かりましたか？」

「凄いね、虎杖君。息継ぎなしで言い切つたよ」

「そこじゃないですよ。つていうか何で先輩は悠々と昼寝なんでものしてたんですか？」

「いや、一輝がちゃんと梓美ちゃんを助けるか心配になつてコードを使って覗き見してたらいつの間にか寝ちゃつてた」

「はあ……まあ気持ちは分からぬないですけど」

「だよねえ」

そんな風に千秋先輩とくだらない雑談をしていると、先輩の携帯電話のバイブレーションが鳴つた。

メールは一輝先輩からで、

『虎杖のアドを知らないからお前にメールする。相手のコードは『禁思用語』。言えなくなる方の対処法はあるが、言えなくなる方の対処法はほほない。偶然に身を任せろ。それと時間的な関係からして他のコード使用者とも繋がり、協力している可能性がある。とりあえず学校から脱出して、距離を取れ』

といった風な今後の僕たちの行動を指示する内容だった。にしても丁度いいタイミングだ。千秋先輩の話題が脱線しかけたところを狙つて送ってきたような気すらする。

「ともかく、一輝先輩の指示に従いましょう。『』の対処法としては取り敢えず距離を取るしかないみたいですし

「そうだね。でも『』の対処法……って、あれ？ 私、何言おうとしてたんだっけ？」

………… そうだった。距離を取つて一輝先輩からしたらそれを考えるのは造作も無い。

でも距離が近い僕たちでは相手のコードの名前を知つてもそれを思うことはできない。だからそれを口にする事も、文字として書くことも出来ない。

「…………ともかく、相手のコードの対処法は距離を取る事です。さつさと学校から脱出しましょう」

今僕たちがそれをどうかと思う手段は、こつやつて曖昧にする」としかない。

それでも伝えられれば問題は無いんだ。

「そうだね。ちょっと待つてて、今から盗視するから

そう言つて、千秋先輩は目を瞑つてしまつた。

相手がどこに居るかが分かつたとしても逃走経路を立てるとなったら地図が居るだろ？

そう思つて、教室の壁に貼つてあつた校舎内の地図を剥がして持つてきた。

「先輩、筆記用具借りますね」

そう言つて机の端にあつた筆箱から適当なシャーペンを取り出して、

いつでも書き込める状態を作りだす。

それにしても、何か違和感が残る。

ちょっとした違和感……なんかどうでも良い様な、気にしなくてもいいような、そんな細かい事。それが引っ掛かる。

何で、一輝先輩は普通に逃げろって言わずに脱出して言つたんだ？

それは、多分……相手のコードの妨害によつて言えなかつたからだ。でも確か、僕の記憶が正しければ、さつき、僕は思えたはずだ。言えたはずだ。

『逃げる』その言葉を。

言葉の活用形は例外、という特殊な制限が無ければオカシイ事態だ。何で、わざわざ封じた言葉を解放した？……それは、教室から動かない生徒たちが邪魔だつたから。

何故、生徒たちが邪魔だつたんだ？……それは……例えば何かを搜す時、人が居ると邪魔だから。

何かを搜すつて、何を搜しているんだ？……それは考えるまでもなく、僕たちだ。

ゲームの参加者である僕たちを捕える……最悪、殺すこと目的として捜しているんだ。

そしてコード使用者の仕業だと知つている僕たちは、『いやつて教室に残つて、逃走ルートを探している。

そもそも、コード使用者でも無い一般人なら、普通に『逃げる』と いう言葉が思えるようになつた時点で教室を抜け出している。もしもがら空きになつた教室に生徒が残つていれば、それは、千秋先輩みたいな昼寝をしてて誰からか声を掛けられても起きなかつた人物か、僕らコード使用者のどちらかだ。

もしも相手がコード使用者の顔が分からなかつたら、そういうつた探索方法が一番効率的。

最初にテロが起つたのに教室から動こつとしない生徒たちを見せ、違和感を感じさせる。

そしてコードによる仕業であると気付いたら何らかの行動を起こすはずだ。でも……違和感を感じる一般人だつているだろ？ し、違和感を感じても様子見をするという選択をとるコード使用者もいるはずだ。

……いや、相手は様子見しようと思つ事を封じる事もできるんだ。様子を窺うという選択肢を潰す事すらできるんだ。

違和感を感じて、これがコードによる仕業だと気付いてしまったのなら、行動を起こすしかなくなる。

そしてもしも、この僕の考えが全て正しかつたとしたら。あともう少しで、ここに銃器を持つたテロリストたちがやってきてしまう。

「……ツ！」

「……ふえ！？ 虎杖君、いきなりどうしたの！？」

いきなり腕を引っ張ってきた僕に対して、驚き問い合わせる千秋先輩。でも危機を言葉にしている暇などない。早めに千秋先輩を隠さなければ。

やだ、虎杖君、大胆
……いや、ちょっとふざけただけじゃないですか。

千秋からの返信も、虎杖からの呼び出しも無い。

あつちの方は、今一体どうなつているかは分からない。敵だつて、『禁思用語』とテロリストだけとは限らない。

『干渉不可』に鋼凧が誘拐され、俺がその救出に向かつた後、学校で『禁思用語』がテロを起こした。

この関係から言つて、『干渉不可』と『禁思用語』が手を組んだと考へて間違いない。

まあ、俺に一度接触した後に、協力関係を結んだんだろう。自身にも相手にも都合がいい関係だから。

ということは、『禁思用語』の他にもコード使用者と協力している可能性がある。『結論反転』『絶対規律』あたりと。

となると学校の方にはもう一人、コード使用者がいる可能性もあるわけだが……。

今はそちらばかりを心配している場合では無い。

「ここか……」

誘拐犯からの指示に従い着いた場所は、住宅地の一角にあるボロつちいアパートなんだが。

まずそのただでさえボロ臭いアパート全体に薦が巻き付いていて、アパートの周囲も雑草やらよく分からぬ花やらが生い茂りまくつて、拳句の果てに木々まで在りやがつて、その枝やら幹やらがアパート壁に沿つて成長してやがつた。周りと比べて、その異様さは何かよく分からぬオカルト的な禍々しいオーラすら感じさせ、言つなれば森の中にある魔女の住む小屋のようはアパートだ。

なんでこんな不気味な場所に呼ぶかね。ここなら人殺しだらうが何だらうがしても問題なさそうだからか?

それともここが単に一番近くにあつた廃墟だからか？ つていうか廃墟なのか？ 人住んでるのか？

「……なんか、ここに用かね？」

俺がボロアパートの敷地に突入するのを躊躇つていると、後ろからヨボヨボの婆さんが話し掛けてきた。

「……」これまた、魔女っぽい人が話し掛けたなあ……。

「いえ、ちょっと。友達に呼ばれまして」

なんて本当は誘拐犯から口々に呼び出されたなんて素直に言えるわけもなく、適当な嘘を吐いて俺はその場をやり過ごそうとする。

「友達……つてことは茜ちゃんのボーイフレンドかね」

「え、ええ」

茜……『干渉不可』の名前か。また面倒な事になつてきたぞ。こんな婆さんと話してゐる場合じやないのに。

「いやあ、まさか茜ちゃんにボーイフレンドがいるとはねえ」

「あはは……あのちよつと聞きたいんですけど、茜の奴、本当にここに住んでるんですか？」

「そりだよ。まあこんな外見だからねえ。近所からは魔女の館つて呼ばれて、入居希望者が少なくて大家として困つてゐよお」

「どことなく残念そうに婆さんが語る。

つていうか正氣かよ。こんな魔女の小屋によく住めるな、『干渉不可』のやつ。

「……」というより、本当に魔女の館なんて呼ばれてるのかよ……。

「にしても、茜ちゃんの顔を最近見ないんだがねえ……アンタ何か知らないかい？」

「風邪引いたらしいですよ」

次から次へと俺は嘘を吐く。まあこの婆さんはある程度『干渉不可』の情報を知つてそうだからな。

弱みを見つけて出すためにはじつにか会話しなくちゃいけないだろ。

「本當かい！……そりや大変だ。魚でも焼いてやろうかねえ」

「魚？ 茜の奴、焼き魚とかが好きなんですか？」

「そおだよ。前にあたしが七輪で魚を焼いてるところを覗いて来てね、食べるかいって聞いたら食べるって言つてねえ、食べたら美味しい美味しいって言つて、それからよくあたしの所に魚を食べに来るようになつたんだよ」

「へえ…… そうなんですか」

つまりこの婆さんと『干渉不可』には繋がりがあるってわけか。それも顔見知りとかじやなくて、『』飯を食つに行くよつな仲。まあ、あの見ず知らずの子供を助けるようなやつだ。知り合いなら普通に助けようと動くだろう。

案外簡単かもな。鍋凧を救い出す、『干渉不可』を負かす方法は。

「あの…… すいませんが、その今すぐ魚とかつて焼いてもらえる事つて出来ますか？」

「まあ、出来るけど…… どうしたんだい？」

「いや、茜の奴が喜ぶんならそうしてくれた方がいいなつて。それに案外、今すぐ食べれる事を知つたら風邪も治るかもしねませんし」

「そうかもしねないねえ」

「あ、あと七輪で焼いてくれませんか？」

「ん？ どうしてだい？」

「いや、俺がちょっと気になるんですよ。それに茜の奴も焼ける匂いとか嗅いだら元気が出るかもしねませんし」

「そうだねえ…… それじゃあ、久し振りに七輪で焼くかねえ」

「お願いします。それじゃあ俺は茜の奴に会つてきますね。また後で」

そう言つて、俺はボロアパートへ逃げ込むように…… というのはちよつと行き過ぎた表現だが、できるだけ自然な形でアパートに入る様に婆さんと別れた。

……まあ、これである程度の策が出来た。

あとは『干渉不可』次第。まあ奴は素直に鍋凧を逃がしはするだろ

う。わざわざ命を奪う様な非道な行為はしない。

なんせ目的である《無影無踪》が来たんだからな。だから鋼凧は自然と逃がされる。

問題はその後。俺と少し会話……子供を人質にとつたことの糾弾やら「コードについてやらの疑問やらをぶつけた後に殺す、または壊すか。それとも会話なんて抜きにして俺を壊しに来るか。

出来れば、前者がいい。出来るだけ時間を稼いでわざわざ時いた不幸の種が芽を出すまで持ち堪えたい。

まあでもともかく、これから結果の「つんぬんを決めるのは他でもない俺だ。

「やつぱりお前だつたか、《干渉不可》」

ボロアパート2階の、指定された部屋のドアを開け、待ち構えている赤い瞳の少女に向けて俺はそう告げる。

文章グダグダ。

仕方が無いじやん、だって俺だもの。本当にすいません！

ただの嘘

「やつぱりお前だつたか、『干渉不可』」「
『気付いて助けに来たの？ 子供を人質にとつた人間の行動とは
思えないけど』」

「うわっ、カビ臭え！」

なんだ、ここ！？『ゴミ屋敷の臭いがする！』

「おいテメエ、『干渉不可』！ ちゃんと掃除してるんだろうな！

？

「は、はあ？ ちょっといきなり何言つて」「

「答える！」

「……し、してるけど」

……つていうことはもうこの環境 자체が最悪な状態つてことだ
な。

雑草やら木々やらを放つておくから、『こんなカビ臭えんだ。
いつそ全て燃やしてしまおうか、あとで。

「え、ええーと……話進めていい？」

「ん？ あ、そうだな。話を進めよう」

ヤバい。あまりにも臭いがキツくて鋼凧のこととか『干渉不可』のこととか忘れてた。

玄関の隣には洗面台やらキッチンやらがあり、少し奥に進めば居間
やらがある。

その居間に『干渉不可』と鋼凧はいた。両者とも服装は制服で、鋼
凧は『干渉不可』の足元でぐつたりと倒れている。

「……まずは、そこに転がってる人質を解放して貰おうか

「なんで？」

「その為に俺は学校サボつてここまで来たんだからな。さつさとテ
ロリズムなんて日本には不釣り合いな事を鎮めたいんだが……人質
はまだ解放しないのか？」

「んー……まあ、いいわよ。解放してあげる」

そつまつて《干涉不可》は鋼屈を蹴り飛ばすような形で、俺の方へ渡してきた。

俺は鋼屈の襟首を掴んでそのまま、自分の後ろへ投げ捨てるよつて移動させる。

「……蹴つたあたしが言つ事では無いとは思つけど、随分と酷い扱いよつね」

「俺は案外、非道な事を容赦無くするような人間なんだが……知らなかつたのか？」

「確かにそうだつた」

「いやはや理解が早くて助かるよ。ガキんちよ」

「…………」の前の続きなんだけど

そう言つて、剣呑な瞳をこちらに向けて俺に問いかける。

「アンタの『コードは本当に《無影無縫》なの？』

「その問い合わせ前にもされたし、俺は答えたよな？」

「答えてない。よくよく考えたら答えてない」

「その結論に至つたのは、誰のお蔭かな？ 『禁思用語』？ それとも他の誰かか？」

「話を逸らすな」

「残念ながら、俺が知りたい事とお前が知りたい事は不一致だ。お前が俺の問い合わせに答えたなら、俺もお前の問い合わせに答えてやるよ」

「チツ……一番最後に違和感があつたの」

……俺の言つた条件に乗るとは随分余裕じやないか。

時間の余裕は自分にあると思い込んでるのか？ それとはまったく逆の状況だつてのに。

「あたしが知つていてる本来の《無影無縫》ならば、あのまま子供を殺そうとしたはず。でもそうななかつた。アンタは殺そうとした子供を助けた……元から殺す気なんて無かつた。だから違和感を感じたの」

ああー、やっぱそこに違和感を感じられたかー。失策だったわー。

つていうか面白いほど予想通りだな。

「この前はてっきり、アンタを『無影無踪』だと信じて、アンタを

濁川一輝だと疑つてた。けどもしかして……本当は逆じゃないの？」

「何言つてるんだ？　俺は濁川一輝でコードは『無影無踪』だ」

「違う。アンタはもしかしたら本当に濁川一輝かもしれないけど、もしかしたら本当は『無影無踪』じゃないかもしない」

「結局それは仮定までしかいかないだろ？　確証は一つもない」

「それは……」

「まあ、半分正解なんだけどな」

「それってやつぱり……！」

「さあて問題です。俺とお前、ここで負けるのはビックリだ？」

リミットだ。もうこれ以上の時間稼ぎは意味は無い。むしろ焼き終る前までに終わらせないと。

さて、外道で無茶苦茶で異常なコードの使い時だ。

「ああ、そう言えば。ここの大体は案外良い人みたいだな」

「……いきなりなんの話」

「いや、さつき下で会つたんだよ。たまたま。そしたら色々聞かれちゃつて困つてさあ……全部嘘で返したけど

「だからいきなり、何で話題を逸らすの？」

「まあまあ。途中で話が盛り上がりちゃつてさあ、魚、焼いてくれることになつたんだよ。それも七輪で！　今時、七輪なんて滅多に見ないよな、凄いと思わないか？」

「何が言いたいの……？」

「まあでも、残念だよな。人の良心つてのは悪党にとつては物凄くつけ入り易いんだよ。あの婆さんも俺と会わなきや今頃は……「うう、泣けてくるねえ」

「何したの……おばあちゃんに何したの！？」

「あア？　お前、鼻悪いの？　臭わない、魚の焼ける香ばしい匂いと……ほんのり臭う、人が焼ける臭い」

「な……今、なんて……言つたつ？」

「まあ日本に住んでりや、普通嗅がないよな。それにまだ焼け始めて臭いもそんなしないしね」

「ど……お前、おばあちゃんを…………まさかッ！？」

「そおだよ。俺は、つこさつき、ここに来る前かな。『』の大家であるババアとこのボロッちいクソアパートに火を点けてきたばつかりなんだ」

当然、嘘である。

俺は確かにここに来る前に婆さんと話したし、今は外から魚が焼ける匂いがする。

でもそれ以外は当然、ただの嘘。一つの例外も無く冗談である。そんな事をしたって俺にメリットは無い。この部屋に入つてすぐに鍋皿が返されない場合だってあるし、そうなつた場合、俺だって火事に巻き込まれてしまつ。そんな危険な策に打つて出るなんて馬鹿げたことを俺はしない。

ただ、『干渉不可』にとつては疑う要素が一つもない。

子供の頭上から鉄骨の雨を降らそうとした人物。そんな危険人物がこんな事を言つたら本当にそうなつているかもしだれないと思つてしまう。

もしかしたらこの外から匂う香りは、魚が焼ける匂いではなく、家が焼ける臭いなのかもしれない。そう思えば少しばかり焦げ臭いような気がする。

あの時、子供を助けたように大家を助ける手段をすでに打つているかもしだれない。

でも、必ずしもこの濁川一輝という男がそういう事をするとは限らない。

さつきも仲間であるはずの少女を、まるで重たい荷物を扱う様に、適当に退けていた。

確かに濁川一輝はいくら他人を物のように扱つたとしてもそれを殺そうとはしない人間かもしれない。

でも、ウォーターパークでの時……言葉でのデマカセではなく実際

に事を起こした。

今回もそれと同様に、もつすでに事を起こしてから……ただの事実を述べているかもしない。

おおよそ、《干渉不可》はいつ思つだらう。俺もそれだけの事をしてきたと自覚してゐる。

千秋にしたつて、俺の「助ける」といつ言葉は疑つても、俺の「殺す」という言葉を疑いはしないだらう。裏切りと非道な行為。この一つは俺が今まで何度も何度もやつて來た事だ。

その反対の行為を疑つたとしても、この一つの血体を疑う必要は無い。だから必然的に、《干渉不可》は俺の言葉を信じ。

俺の言葉は、眞実に変わる。

「お前……ッ！」

怒り狂う猛獸のよつて、歯をむき出しにして顔全体で俺に怒りを向けてくる《干渉不可》。

この顔から分かる事は一つ。

《干渉不可》……西とこいつが前のガキは俺の嘘を真に受けたということ。

そして、俺のコードが発動したという事。

「タイムリミットはもう無いぞ。俺を殺してババアも殺すか、俺を見逃してババアを助けに行くか。ウォーターパークの再現だ。さあどっちを選ぶ？」

笑いながら分かり易く選択肢を提示する俺。

俺の本当のコードは《虚実混交》。

自らの発言の真偽を、世界に適応せしむ。嘘吐きのコード。

ただの嘘（後書き）

読み難いですよね、すいません

「タイムリミットはもう無いぞ。俺を殺してババアも殺すか、俺を見逃してババアを助けに行くか。ウォーターパークの再現だ。さあどっちを選ぶ?」

『虚実混交』。俺の本当のコード。

自らの発言の真偽を世界に適応させる、嘘吐きのコード。詳しく述べば、自らの発言一つで発動できるコードでは無い。俺が言う言葉、その発言を相手が真実だと誤ったなら世界にとつても真実に、その発言を相手が虚偽だと思えば世界にとつても虚偽に変わる。そんな無茶苦茶なコードだ。

簡単な例を言えば、初対面の相手に対し、自らのコードを『無影無踪』だと言つ。

その言葉を相手が鵜呑みにすれば、俺のコードは『無影無踪』へと変わる。

その言葉を相手が疑つてかかり信じなければ、俺のコードは『無影無踪』にはならない。

ただそれだけのコードである。

だが当然、上手く使ってやればこのコードはありゆる嘘を現実にする事ができる。

「まあ当然分かってるとは思つけど、俺は今玄関に居て、お前はババアを助けるにはそこを通りなきゃいけない。まさかタダで通れるとは思つてないよな?」

歯を食いしばり、まるで獣のよつな赤みがある瞳を俺に向け、『干渉不可』はさりに拳を握りしめる。

だがそれでも俺に殴りかからないとこうを見ると、まだ俺を倒して婆さんを助ける方法があると考えているみたいだ。

それなら俺は、言葉でその可能性を消し去つてやるだけ。

「ここを通りたかったら、お前は今すぐこの場で大切な物を壊せ。

「……何言つてゐるの？ アンタのコードが何だかは分からぬけどあたしを止める事なんて出来ない」

「本当にそうか？ お前だつて分かつてゐるんだろ？ 自分のコードが何からも守つてくれるものじゃないつて事くらい」

「……チツ」

「へえー。」の反応だと本当にそうなのか。《干渉不可》を止める手段は実際に存在する。

まあでも多分それは今の俺には実行不可能だな。なんせ俺には言葉つていう武器しかない。

使いよつによつては核兵器なんかよりも圧倒的に危険になる言葉しか。

「わざわざ下で火事を起こしてからこつちに来てるんだ。当然、ここから逃げる手段もお前を倒す手段も事前に準備してきたに決まつてるだる」

「……壊してゐる時間なんてない。渡すだけでいい？」

「……なんだ。簡単に折れるじゃないか。だつたらわざわざコードを使う必要も無かつたのに。」

「ああ、別に構わない。寄こせ。あとで壊してやるから」

そう言つて片手を差し伸べる俺。

こちらに近付いてきた《干渉不可》は俺の掌に一枚の写真を置くと、自然と俺が退いたために出来た通路から一目散に部屋を出て行つた。写真は、全員笑顔で並んでいる家族写真だつた。

……この写真を今この場で破くのは得策じやない。なんせ《干渉不可》が偽物を渡してきた可能性だつてあるんだから。

ともかく、今はこの場から脱け出して鋼屈を起こさないとな。このバカなら丁度いい。何も知らずこのうと氣絶してこの「イツなら丁度いい。

「さてと……」

先程俺は「コードの力によつて、《干渉不可》を倒す方法とこの場所

から逃げ出す方法を得ている。

当然、俺自身はそんな下準備など一切していないのだが、俺はその二つの方法を得ている。

だから当然、俺はこの場所から鋼皿を連れて逃げ出せるのだが……。

問題はその後。どうやってこのバカ皿を起こすかだ。

「おーい、クソバカアホ皿いー。おやつの時間だぞ、起きろー」
「チッ。この言葉でも起きないか。一体鋼皿の奴はどうやつたら起きるんだ？」

鋼皿を背負つて逃げるというとも原始的手段でボロアパートから逃げ延びた俺は、そのアパートの真正面の道路にて『うわ、燃えとる燃えとる』なんて野次馬気分を味わいつつ鋼皿を起こす事に苦労していた。

早めに鋼皿に起きて貰わなければ、色々と困るんだよ。わざと起きろこのクソバカ。

「鋼皿、あと3秒以内に起きなければキスするぞ。3、2、1」
「とりやしゃあ！！」

顎に強烈なアッパーを喰らい軽く宙を舞つた後に地面に叩き落ちた。痛い。頭がクラクラする。

つていうか鋼皿の野郎、俺が舌噛んだりビリしてくれるんだよ！大切な武器なんだぞ「コラア！！」

「……ん？ ここは？ つわつ！ 燃えとる燃えとるっ！…」
「痛え……あれは気にするな。《無影無縫》のもう一つのルールの効果だから」

周囲を見渡す……といつより火事を叩撃して動搖する鋼皿に対し、俺は適当な嘘を吐く。

「もう一つのルール？」

「そう。お前らには言つてなかつたけど《無影無縫》にはもう一つ

だけルールがある。影も形も無いただの幻を見せるつていうルールが

当然、嘘である。

『無影無踪』は例え世界が反転したとしてもただ物を消し隠すだけの「コード」だし、そもそもこれは本物の火事で一切幻などではなく、その上この場に『無影無踪』を使える者はいない。

だけど、鋼嵐はその事を知らない。なんせその事実を知っている者は『干涉不可』と千秋しかいんだから。

例えその場に居たって、氣絶していた鋼嵐には俺が「コード」について嘘を吐いていたことは分からぬ。

そしてあまりにもスラスラと俺が言つものだから鋼嵐は受け入れてしまう。

受け入れてしまつたら、その言葉は真実となつてしまつ。

「だから鋼嵐。一応否定しといてくれ」

「あ、分かった」

そう鋼嵐が言つた後、一瞬にしてボロアパートを包み込もうとしたいた炎の全てが消え去つた。

よし、これでいい。この火事を「コード」のせいにしてしまえば『否定定義』を使って一瞬にして消火できる。これで本当に火事で集まつてくる野次馬を追い払うこともできた。

人混みに邪魔されて学校に戻れなくなるんなんて哀れな事態は避けられた。

あと残つてる事といえば、『干涉不可』をきつちりと敗北させることがとか。

「にしても、何でわたしはこんな所に居るんだ？」 答えるカス

「それがわざわざ助けにきた人間に対する態度か。義務教育からやり直せ」

「助けに来た……？」

「ああ。どうやって誘拐されたか知らないが、お前は『干涉不可』に誘拐されて俺が助けに来た」

「なんで？」

「学校の方がちょっと色々あつてな、俺しか動けなかつた。それに『干渉不可』の狙いは俺だつたからな」

「つまり、わたしはカスを呼び寄せる為の餌にされたと」

「まあそんな憤るなよ。いっちはそれだけの収穫があつたからな」

「収穫？」

聞いて来た鋼凧に対し、俺は先程『干渉不可』から渡された写真を見せる。

「これ、何だと思う」

「家族写真……？」

「そう。これが『干渉不可』の大切な物」

「……わたしを助けに来たんじゃないの？」

「知らないのか？ 僕は欲張りなんだ」

当然、嘘である。

『虚実混交』（後書き）

クソ主人公が、能力乱用するなよ。
一タルビ振るこいつの身にもなつてみろ。案外大変なんだぞ、お前の台詞長くて。

炙り出し

「濁川一輝……どうじゅつもり…………？」

鋼屁に事情を説明している途中、婆さんを背負つた《干渉不可》が話に割つて入つてきた。

「どうもいりうもない。当然、すべて俺の利益のためにやつてるだけだ」

「段階的にやつてるつてわけ……火事を消したのも自分の逃げ道を確保するため……でも、なんでプールの時、子供を助けたの？」

「簡単なことだ。お前の怒りを買わないとめだよ」

「あたしの怒り…………？」

「あの場で子供を殺したら、お前みたいな『良い奴』はブチ切れで直接学校まで乗り組んでくるだろ？ それだと少し困るんだよ」
『干渉不可』を止める方法など人質くらいしか思いつかなかつた。学校で襲撃される場合、人質になるのは学校にいる生徒や職員。それじゃ後々、学校封鎖となり、雰囲気的に四人で集合しにくくなる。それに千秋からの信頼度がゼロになつてこのゲームを孤独でやり過ごさなければいけなくなる。

それは俺にとつて大きな損害だ。だからあの場で子供を助け、『干渉不可』が冷静な判断ができるようにした。

結果、人質は一人だけで済み、千秋からの信頼度を減らすこともなく、『干渉不可』を敗退させられる大きな一手を手に入れられたわけだ。

「…………アンタは本当に、自分の利益でしか動かないで…………ツ！」

怒り狂つた山犬のように歯を剥き出しにして俺への嫌悪感を表情一杯に表す《干渉不可》。

しかし幸いなことにコイツは勘違いしている。

ゲームのルール上、敗者は勝ち残つてゐる者を殺す権利がない。

だから《干渉不可》はどんなに俺の行動に憤りつつも、殺しにかかるつとはしない。

まあ、実際はまだ俺は写真を破いてないから殺しちゃつても平気なんだけどな。

本当にこればかりは、相手が勘違いしてくれていてよかつた。

「カスのクズみたいな行動はいつものことだし、そんな怒ることでもないと思つよ」

事態を傍観していた鋼凧が、俺と《干渉不可》の間に割つて入るようにして諭すようにいう。

「……貴女は、そこの『ミミ』みたいな人間を生かしておいてもイイと思つてるんですか？」

「当然、今すぐこの場でぶち殺してただの肉塊に変えた方がいいと思つてるよ。でも、それでも一応誘拐されたわたしを助けに来たつていう恩義があるからね。ここでは見逃してあげなきや、いつまでもカスにグダグダ言われそудаから」

よつは『べ、別にアンタのために割つて入つたわけじゃないんだからねつ！ いつまでもアンタに恩があるなんて屈辱が耐えられないから、し、仕方なく助けてあげるだけなんだからねつ！ ほんとつ勘違いしないでよねつ！』といつ風に鋼凧は言つてるわけか。

そんな現実逃避をしてなきや、ともてもの一人の少女（歳下）から罵声に耐えられそうにない。

「別に発情した犬のようにそこの『ミミ』を襲い殺しませんから、そこを退いてください」

「そんなこと言つて、もう眼が血に飢えた狼のような感じになつちやつてるよ。まったく体は素直だねえ」

両者睨み合ひ。どちらとも一步も引く気はない。

そんな緊張した空氣の中、当事者の俺は一人だけのんびりした感じで考え方をしていた。

考えていることは簡単。《干渉不可》に《禁思用語》と協力しているかを問うかだった。

というよりもそもそも《禁思用語》の目的が半分ほどわからない。狙いは《非観理論》である虎杖ただ一人として。俺をわざわざ引き離す理由がどこにある？

あの時、テロが起ころる前の俺はまだ《無影無踪》だった。だからついでに潰すには少しばかり効率が悪いと考えたのかもしれない。だけどそれでも、わざわざ協力して引き離す理由はないはずだ。天敵となるであろう《否定定義》を誘拐させるために《干渉不可》と協力した？

それじゃ理由が不十分だ。そんな誘拐なんてテロを起こすよりも遙かに簡単なことをなんでわざわざ他人にやらせなきゃいけないんだよ。

もしかして協力関係なんか結んでいない？ いや、それにしては色々と不自然だ。妙に《禁思用語》が有利になるような出来事ばかり起きている。

だとしたらやはり協力している？ でもだとしたら何故、協力した？ 《干渉不可》にだつて自分のコードは通用しない。むしろ都合の悪い相手だ。

俺たち同士で潰し合わせた方が、一番自分に利があるだろ？ ……

……もしかしてそれが狙いか？

鋼凧を誘拐させたのは後々俺に駒として使わすため。俺がわざわざ一人で救出に向かうのはプールの話を《干渉不可》あたりから聞いた時点で見当がついていた。

だからわざわざ誘拐させるなんて誘き出すなんて面倒な真似をして、俺と虎杖を離れさせ、虎杖は自分が、そして俺が《干渉不可》を討ち取れるような構図を作り出した？

だとしたら必ず俺たちの方に保険として誰かを回してくるはずだ。俺が必ず成功するとは限らないんだからな。

でも、それがもしも本当だとしても確かめる術は……一つだけ。

「なあ《干渉不可》。これ、なーんだ？」

「つ！ それ、あたしの……なんでつ！？」

俺が問い合わせながらピラピラと振る写真を見て、『干渉不可』は驚きを隠せずに叫んでしまう。

いいねえ、そういう斬新な反応を俺はまってたよー。

こんな大きな反応をしたら、本人の口から言わずとも、自然とこれが大切な物だと……敗北条件だと気づくだろ。

そしたらコソコソ隠れて様子を見てるような卑怯な輩は、動き出すしかなくなる。

「鋼廬、ともかく否定しろ」

「何いきなり意味分かんない事して、意味分かんない事言つてるのは……否定」

異能を打ち消した時になる特有の音が響く…………わけはなく。実際に相手にコードを使われたのかどうなのかも分らないが、まあ居ようが居まいが関係なしに。

俺の本当のコードで無理にでも炙り出す。

「それで、力ス。今はどんな状況なんだ?」

「いや別に。もしも俺の予測が正しければこれで、『干渉不可』を消そうとする誰かが行動するはずだ」

この言葉だけでは誰も俺の言葉を信じない。信じたてしたって意味が分からぬ。

誰も信じられなきや、俺のコードは意味を成さない。だからまだ俺の言葉は現実になれない。

それにもう予測だ。無理に信じさせてわざわざ本当は居なかつた敵を作りだす必要はない。

だから聞いただし、補足し、もしも予測が当たつているのならば俺の言葉を現実に変えてやる。

「…………どういふこと?」

自分の名前が出てきたことに驚き、眉をひそめながら問いかける『干渉不可』。

「その前に答える。お前はあるコード使用者と協力して今回のこと起こしたのか?」

「それは……」

「その反応だとさうなんだな。まあ、無理して嘘なんか吐いて庇う必要はない。お前を売つたんだからそいつは」

「…………力ス、わたしにも分かるようになつてくれない?」

つこわつき起きたばかりの鋼屈が口を挟んでくる。まあ、余計ではないからいいのだが。

「相性の問題だ。あらゆるコードが通じない相手をわざわざ味方に引き入れようとするか?」

「わたしならしない。つていうかアンタと協力しての成り行きだし」

「まあ、だらうな。主に千秋のお陰でお前は俺に協力してるんだろ

うけど」

千秋がいなかつたら協力関係にまでは至らなかつただひつ。そこら辺は千秋に少しばかりは感謝してたりしてなかつたり。

まあ、そんなことはどうでもいい。

「誰かとわざわざ協力関係を結ぼうとする奴は、このゲームを勝ち残ろうとしている奴だ。後々自ら協力関係を破つて、そいつらを敗退させにくる」

その時に、味方にあらゆるコードが通じない奴がいれば倒しにくくて仕方がない。

そもそも『干渉不可』に銃器や刃物、毒物なども通じないのだ。ごく普通の殺し方だろうが、コードを使った異常な殺し方だろうが、通じないものは通じない。

そんな奴を味方につけたつて後々厄介になるだけだ。こんなに手が込んだ仕掛けをする『禁思用語』がその程度のことを考慮していいわけがない。

だから俺にわざわざ倒させる。それがダメだった場合に備えて誰かをここに配置しておく。『干渉不可』には知らせずに。

「……つまり、最初から罠に嵌めるつもりで味方にしたと」

鋼凧がやや納得したように頷きながら呟く。

「まあ、ついでに俺も倒そうっていう魂胆だったかもしれないけどな。ともかく、俺も『干渉不可』もまだ敗退していない。だとしたら当然」

確信が持てた。だから今度こそ俺のコードで世界の未来を変える。半強制的に。

「『干渉不可』または俺を消そつとする誰かが行動するはずだ。いや、動くしかないんだ」

「それでわたしに否定させたと……」

鋼凧はそう納得しながら、周囲に目を配りさせる。

『干渉不可』は、事態についていけないのかただ呆然と突つ立っている。

事態は最悪。敵は学校にいる虎杖たちにも、今ここにいる俺たちにもいる。どちらとも独りつきわけではないだろうが、ほぼ孤立無援状態だ。

だけどそれだと俺が困る。だから。

「鋼凪。一手に分かれよつ」

「一手……？ 誰と誰？」

「俺と『干渉不可』。お前と『西』の婆さん。向かう場所は両方とも病院、そのあと学校だ」

「学校、病院……仕方がないから、従つてやる」

「何様だよ、お前」

合図もなしに、俺たちは『干渉不可』から婆さんを引き取り、それぞれ別々の経路で走り始めた。

しばらく果然としたまま俺に手を引かれていた『干渉不可』は数分経つた上でようやく事態を理解した。

「……つ！ 触れるな！」

『干渉不可』がそう言つた途端、掴んでいた俺の手が物理現象のすべてに逆らつて弾かれた。

「……お前、名前は？」

「はあ！？」

「俺は濁川一輝。お前の名前は？」

「何でそんなことを答えるや

「名前」

「……鳴神、西」

「そんじゅ西ひやん」

「ちやん付けするな！ 気色悪い！」

「なり、鳴神ちやん？」

「苗字でも同じだアホ！」

「ああ、まったく思春期の女の子つてこののは面倒くせにな。べつ呼べばいいんだよまったく。」

「あ、そうだ。千秋のよつて呼べばいいんじゃないのかー？」

「あーちゃん！」

「殺すぞ！ バカ！ 変態！ 悪魔！」

なんだ、ダメなのか？ いい案だと思ったんだが……。

……つて、ふざけてる場合じゃない。

「鳴神茜、お前はあの病院知つてんだよな？」

「いきなり普通になつたな……というかどの病院だよ？」

「『完全干渉』のいる病院」

なんやかんやで俺は、その情報を千秋から聞き忘れた。

でも一度接觸しているはずのコイツなら場所を知つてゐるはず。

「……もしかして、それが知りたいがためにあたしの手を引っ張つたの？」

「俺はいつだつて自分の利益のために動く人間だ。まあ、理由はそれだけじゃないんだがな」

婆さんの安全を取り敢えず確保するには、コードを無効化できる、またはコードが通じない人間が必要だ。

だからまあ当然、鳴神茜か鋼凧のどちらかが婆さんを背負つ役目を負わなければいけない。

そしてその後、できればコードに強い一人ともが学校に来るようになしたかつた。

鋼凧は言つまでもなく学校に行くだろうが、鳴神茜はそつはいかない。婆さんの安全確保までしか動かない。

だから仕方なく鳴神茜を連れていくことになつたんだ。

だから決して、俺が『完全干渉』に会つまでの道がわからないから連れて行つてゐるのではない！

必死に言い訳をしている俺に対し、鳴神茜は呆れるような視線を向けてきた。

「……ベクシュンツ……」

人生詰んだ。ワザとやつてるとしか思えない。もしかして嵌められたんじゃないか？

嵌められてないんだとしても、僕にはあの不思議な容姿の先輩のお守は無理だつたんだ。一輝先輩は本当、凄いな。

まず経過から言えば、僕らが移動し始めた時にはすでに検討した策通りに相手が動いていた。

廊下を出た途端に聞こえてきた足音に対し、一応は隣のクラスに移り、千秋先輩をロツカーに押し込んで息を潜めていた。

僕自身は『非観理論』で誰かに見つかる心配はないから一応外からロツカーを押さえつけていた。千秋先輩が何かやらかすような気がしたからだ。

そしてその予想も的中。静寂している教室や廊下によく響くクシャミをしてくれた。

それもテロリストだと思われるアサルトライフルのような物騒な物を持つてる一人組が丁度、僕たちが隠れた教室を詮索している時に。絶対にワザとやつてるとしか思えない。どちらにしろ詰んだ。

僕は見つからずにやり過ごせるが、千秋先輩は見つかってしまうだろう。

そしたら当然、殺される。殺されたら必然、僕は安全な逃走経路が分からぬ。

いやでも『非観理論』を常時使用して、常に誰にも観測されないような状態を作ればどうにか逃げ出せるんじゃないか？

……ダメだ。どちらにしろ相手のコードによつて誘導される可能性がある。

そして相手に誘導されたとしても『異見互換』があれば最低限、人が待ち伏せしているような罠系統は回避できる。

今隠れれば後々自分が、今姿を現せばすぐにでも自分が、標的として銃弾を撃ち込まれる。随分と世界は僕の都合の悪い方へと転がつていつてるわけか。

なら、試してみるか。一輝先輩の案。対観測制限の案を。あれも一か八かではあるけど、どうせこのままだと僕死んじゃうし。これほど試す為に用意された状況はそうないだろう。

テロリスト二人組はそれぞれ片腕を動かし互いに合図を送つて、ロツカ―に近付いてきている。

チャンスは一度たりともない。失敗すれば死。成功しても状況を逆転できるとは限らない。

ただ、成功すれば一度ばかりかは死を回避できる。つまり死はない。僕は少しばかりロツカ―から距離を取り、二人組がちょうどそれぞれ待機場所に着いた時に。

ロツカ―から少しばかり遠い位置にいた一人に向かって全力でタッカルする。

僕の姿はコードによつて誰にも見えない。何人たりとも僕を観測できない。

だからテロリストの一人はいきなり姿勢を崩され、一人分の体重が追加された状態で床に倒れ込むように後頭部を打つ。

このままもう一人へ追撃を行つてもいいが、それだといずれ銃を乱射でもされて流れ弾が僕に当たる可能性がある。

それじゃダメだ。しつかりと僕を狙つて撃つてくれなければ。

床に倒れて唸つているテロリストの一人から蹴るように距離を取ると同時に、僕は姿を現す。まあ正確には見えるようにするけど。普通なら突然のことでの少は驚くはずなのに、もう一人のテロリストはそんな暇なくアサルトライフルつぽい銃を僕に向けてきた。

「床に跪け」

そう言いながらテロリストは銃口で促してくる。

何故、撃たない…………あ、そうか。僕を殺したところでゲームのルール上では僕は敗退にはならない。僕が大切にしている物を壊さない限り、敗退とはならない。

だから僕を誰かに殺させるわけにもいけない。ということは命令したのは捕縛。

そして僕が命令に背いた場合は、頭や胴体は狙わずに、脚や肩を狙うっていうわけか。

「いやだ」

そう返しながら、観測の準備へと入る。

一輝先輩の案は、部分観測、というものだ。

内容もそのまんま。一部分だけを観測する。それも観測した事象に干渉しない部分を。

一輝先輩の観測の捉え方は所謂、動画と静止画の関係だ。

僕が今までやつてきた事象観測は動画で、今からやるのは静止画。銃口がどこに向けられて引き金が引かれ銃弾が発射しその結果どうなるか、を観測するのではなく、引き金が引かれた時の銃口がどこに向けられているか、のみを観測する。

それのみなら《非観理論》の制限に阻害されない。そう一輝先輩は言っていた。

だが、その言葉には確証などなく成功するかどうかは一か八か。まあ失敗してしまえば、もうそれでキッパリ諦めて死でも痛みでも何でも受け入れた方がいいだろう。

脳へ直接、情報が流れ込んでいく。その流れを途中で止める。

結果、得たいものは得られた。これから少し先のアサルトライフルの銃口の向き。

さて……もう観測してしまった。退路はない。この先にあるのは死が成功のみ。

「ツ！？」

そして、それだというのに僕の体は動かない。

この感触には覚えがある。行動、言動などの手段をもつてし観測し

た事象に干渉させないための制限。その感触。

体のどこも動く事はない。その場に縫い付けられた感覚だ。

つまり……失敗。

相手が観測通り、銃口を僕の右すね辺りに向ける。

どうでも良い事だが、どうもアサルトライフルというと連射のイメージが強い。もしかしたら僕の脚向かって弾丸を連射するって事はないよな。

そんな僕の心配をよそに、テロリストは引き金を引く。

部分観測（後書き）

どうやつたり、文章つて上手くなるんじょつかね？ やつぱ才能かな？

だとしたら才能がほほ眞無の俺には絶望的な感じですよね。
はあ……。

結果から言つと、僕は…… 銃弾を避けられた。

もうダメだ。そう覚悟した後、せめてもの足掻きとして自分の姿をコードで見えなくした。

そしたら、体を縫い付けていたコードの規制が解けた。だからギリギリではあるが僕は銃弾を避けられた。理由は分からな
いが。

取り敢えず、仮定はできた。

事象観測による干渉制限は、観測した通りに事象が起らればあらゆる行動を起こしてもいい。

でもまだ仮定。確定させなければまだ部分観測は使い物にならない。

「ひつちだよ」

また姿を現し、テロリストへ告げる。

「……お前、どうやって……？」

「ちょっとしたトリックだよ」

部分的に観測を始める。観測する事象は、これから先の20秒間のテロリストの目線。

すぐさまに頭に情報が流れ込む。データはそろつた。

5秒後、下方へ移動。その3秒後、銃へ移動。1秒後、標的へ移動。4秒後、ロツカーへ移動。6秒後、標的を目視。

これにすら従えばいい。これ以外は何も従わなくていい。

これから僕はテロリストの視線をこれの通りに動かしてしまつ。ただ動かせば、あとはその最中に何をしたつて構わない……はず。さつきの銃口よりは安全な確かめ方だ。

しかしどうやつてその通りに視線を動かす？ 一輝先輩のよつな無駄に饒舌な人間じゃないし。

……いや、そこら辺は考えなくたつていい。どうせ制限のせいでも抗つたつて、その事象に干渉する行動、言動はとれないんだ。な

ら干渉しない行動や言動を僕は強制的にとらわれる。何を考えようとも、何も考えてなくても。

「あ、お前の下に、ゴキブリ」

自然と僕の視線はテロリストの足元に移り、口からそんな言葉をが出た。

僕にはそんな物は見えないが、自然と口からそんな言葉が出てきたのだ。

テロリストは多分反射的に自分の足元に視線を落とした。

それに合わせて僕の体が自然と、不自然なくらいに自然と、距離を測るように横へ移動する。

……ああ、そうか。一度ほど標的目視を観測してしまったから、そこでは僕という標的は姿を晒していなければならない。

だからわざわざテロリストの視線が下に移って、姿を晦ませるチャンスだというのに僕はコードを使わずに横へ移動しているわけか。動く必要性はあるのか……標的目視のときの目線の位置とかの関係か。

案外、『非観理論』の制限ってのは使い用があるかもしれない。

「……テメエ！」

一瞬、アサルトライフルに目線を映したテロリストは僕の姿を見るや否や、僕に向かってアサルトライフルを乱射してきた。

なんて迷惑な野郎なんだ。しかも先程と違つて胴体狙つてきやがつた。

僕は僕で、テロリストに見られた瞬間にコードを使用し姿を消して、適当に飛び退く。

そのため幾つもの弾丸は空を切り、その先の壁にめり込んでいったわけだが……。

このままだとマズい。適当に教室中に乱射される可能性がある。

下手な鉄砲、数撃ちや当たる。そんな戦法を取られたら僕は簡単に死んでしまう。それにロッカーに当たつて蜂の巣のように穴が空いてしまうようななら、隠れてる千秋先輩にも弾が当たつてしまつ。

……でもまあ、その心配はほんの少しの間だけ無いんだけど。

「……チツ！ また消えやがった！」

テロリストが周囲に目配せしようとした瞬間、ロツカーの中で何があつたかは知らないが、がたんっ！ 何かがぶつかる音がロツカーからした。

それでロツカーに視線を向けるわけか。千秋先輩のドジをこういう風に役立つとは驚きだ。

さて、ここから6秒後に僕は姿をまた現さなければいけない。

その間に、あのドジな先輩が作ったこの自由に動ける6秒間で、終わらせる。

テロリストは音がなつたロツカーへと静かに近付いていく。

おおよそ、最初の異変であるクシヤミをした音あたりを思い出してロツカーの中に誰かがいるかもしれないと検討づけたんだろう。

そしてそう検討したら僕が姿を現した理由も、そのロツカーの中に誰かいることがバレないようになしたことだと勝手に想像がついてしまう。事実、その通りだ。

そして自分の身を危険に晒してでも隠したかつた人物を人質に使えば、おのずと僕を引きずり出せるかもしれない。

そう思つたんだろう。思つてなかつたとしても、どちらにしろロツカーの中は怪しいと考えたはずだ。

目線も意識も銃口も、完全にロツカーに向いたその状態なら。

「チェックメイトです」

このテロリストの脇腹に直接アサルトライフルの銃口を突きつける事が出来るだろう。

最初、教室に入ってきたテロリストは一人いた。その内の一人は最初に昏倒させておいた。だからそいつからアサルトライフルを奪い取つて、切り札にする。

でも、一輝先輩が鋼凪にしたような効果……相手を抑制する意味などこの行為には無いと思うが。テロリストの反抗的な目を窺い見れば、そう思つてしまふ。それに僕も相手がその気ならヤル気がある

からだ。

「……素人が扱えると思ってるんのか？」

「その素人すらこういう物騒なものを持って戦わなきゃいけないのが現代の戦争ですから」

実際、銃を撃つにしたって反動つていうものがあるだろ？し引き金を引く以外の操作はまったく分からぬし知らない。

それでも、僕にはこういう殺戮兵器よりも扱い難くて圧倒的な効力をもつ武器を一つだけ持つていて。

一か八かの賭けをもう一度だけ、もう一度だけ未来の事象を観測する。

そしてその結果を、この何も知らないテロリストに伝えてやる。

「それに僕には觀えますから。反抗しようとしたお前が僕に脇腹を撃たれてのた打ち回っている姿が」

逆転観測（後書き）

よつは虎杖君の勝ち。

文章が雑なのは毎度のこと。本当にすいませんでした。

「虎杖君って案外過激なんだね」
たかがアサルトライフルを撃つた程度でそんな事を言われてたら、
今時の軍隊とかはどうなるんだよ。

それに相手だつて防弾チョッキを着ていたのも知つていたから僕は
情け容赦なく銃弾をぶつ放したんだし。
そこまで過激ではないと思うんだけどなあ…………。

テロリスト二人をカー・テンを使って縛り上げた後、僕は千秋先輩に
問う。

「それより、敵がどこにいるかもう分かつたんですか？」

「あ、うん。しつかり調べておいたけど……案外、無意味かも」

「……銃声に群がつてきるって事ですか？」

校内は静寂しきっている。そんな中で銃なんて発砲したら、よく響
いてしまう。

つまり敵に自分の居場所を知らせてはいるようなものなのだ。
敵の詮索部隊が複数に別れてこっちを探しているのなら、当然銃声
のした方へと向かうはずだ。

「そういう事だね……ねえ、虎杖君。こっちも一手に別れない？」

「こっちも……？」

敵の詮索部隊が複数に別れてるから、こっちも一人ずつに別れたつ
て……大して意味は無いと思う。

むしろ今この状況で別れでもしたら、どちらかが捕まつた時、その
捕まつた方を人質にされる可能性すらあるわけだ。

それにこの先輩ならあれよこれよという間に捕まつて人質にされて
しまうと思う。とういかされる。

僕が反対しようと口を開こうとした時に、千秋先輩はそれを封じる
ように自分から喋り始める。

「細かい事は気にしちゃいけないよ。私が言葉を封じるコードを狩

るから、虎杖君はその間にテロリストやらもう一人のコード使用者やらを引き付けておけないかな？」

「でも僕にそんな事……」

「さつきの部分観測だつて？ それを使えばある程度の間は引付けておけるでしょ？ その少しの間でケリをつけるよ」

「は、はあ……？」

「あれ？ 千秋先輩つてこんな人だつたっけ？」

「ガンガン指示を飛ばしてきて、それに狩るなんて言葉遣い。まるで一輝先輩みたいな物言いだけど……」

「いや、つていうかちょっと待て。さつきもう一人のコード使用者つて言つたか？」

「何で、そんな事が分かるんだ？」一輝先輩もメールでコード使用者と協力してるともしないとは言つていたけど、必ず学校にもう一人コード使用者がいるとは言つていない。

「なのに、何で？ 覗き見しただけでそんな事が分かるつていうのか？」

「ただ視界を共有しただけで？」

「一応『非観理論』で言葉を封じるコードの方の居場所を探していくれないかな？」

「でも制限が……」

「大丈夫。今この瞬間の居場所を部分観測してくれるだけでいいから。あとは気付かれずに近付くよ」

「おかしい。……

この不思議な容姿をした先輩は、頭の中も不思議ちゃんだと思つていた。一輝先輩もそんな感じでバカにしたような対応ばかりとつていた気がする。

こんな風に自ら敵を倒すような行動をわざわざ起こさうとする人だとは思えなかつた。千秋先輩は温厚な人間だから。

「なら今、僕の目の前にいるこの銀髪でオッドアイの少女は……誰だ？」「ほら早く。私のことなんて考えないでさ」

「ツ……お前、誰だ？」

思わず、そう言葉に出してしまつ。

心を読まれたから。あの先輩に。今この日の前の人物が、あの不思議ちゃん先輩には見えないから。

思わず、そんな言葉を出してしまつ。

「酷いなあ……私は私だよ。濁川千秋。濁川是無の養子で濁川一輝の義妹にあたる人物。忘れちゃったの？」

それに対応した千秋先輩の言い様はまるでわざと言つてゐるのかと思うほどに不気味な言い様だつた。

とにかく唯一、僕に分かるのは、今いるこの濁川千秋は僕や鋼凪が知つてゐる濁川千秋でないということ。

それ以外は分からぬ。本当は一輝先輩のような人間で今まで僕らにそんな姿を晒して無かつただけなかもしれないし、もしかしたらこのテロ騒動が始まる前に何者かの手によつて他の誰かにすり替えられたのかもしれない。

もつとも、そんな行動をして利益を得る人間が居るかどうかが分からぬが。

「……応接室。そこに言葉を封じるコードを持つた人間が居ます」

「ああ、だから見た事のない景色だつたのか」

何かを納得したように咳き、千秋先輩は教室を出て行く前に紙を渡してきた。

「一応それ、逃走経路。できるだけ敵を引き付けて逃げ惑つてね」

そう言って、教室を出て行つた千秋先輩。

囮役としてせいぜい精進してくれ。一輝先輩の言い方にするらんなこんな感じだろうか？

千秋先輩の突然の変化について行けずに、しばらく出て行つた扉を見ていると、ひょっこりと千秋先輩は顔を出してきて一言。無邪気な笑顔でただ一言。

「くれぐれも、この事は一輝には他言無用でね」

「あア！ 本当、なんで学校に監視カメラの一つも置かないのかなあ！」

応接室にて、ソファに座り足を組んでいる《禁思用語》……宇津木陽菜はそう喚きながら携帯を弄つていた。

「知るか。叫ぶな。うるさいんだよ」
それに対し、《結論反転》……衣笠海翔は壁に背をあずけ顔をしかめながらそう返した。

「知るかつてね……無線に確保した報告が入つてないの。これ、殺しちやつたか倒されちゃつたかのどっちかなの。もしも倒されちゃつた場合、もう一度と《非観理論》の姿を拝む事なんて無理。こつちの作戦大失敗になっちゃうの」

「確かもう一人コード使用者もいただろ？ そいつを捕まえて人質として使えばいい。それともそいつも姿を隠せるコードなのか？」
「別にそうじやないけど、相手と視界を共有できるコードなの。そしてここは見知った場所。身長による高低差があるとはいえ、どこにこつちの駒がいるかはバレバレなの。だから遭遇することは無いと思う」

「両方とも厄介だな。いつその事、お前のコードで使用を禁じればどうだ？」

「どう指定するんだボケえ。このコードは使用者本人にも効果が出るんだぞ」

「ならオレが直接出るしかないか」

そつ言つて壁から離れ、部屋から出て行こうとする衣笠。

「あ、ちょっと… こっちのシナリオちゃんと覚えてるでしょうね！」

「覚えてる。最後にオレが反転させればいいんだろ?」

「覚えてるんならいいんだけど……くれぐれも、《非観理論》に隙を突かれない様に」

「お前こそ。《非観理論》ばかりに目が行ってるが、もう一人のコード使用者に隙を突かれない様にな」

「大丈夫だつて。《異見互換》はただの覗きのコードだから」

「どうだか」

そう言葉を残し、衣笠は応接室を後にした。

「おい、今度はこっちから銃声がしたぞ!」

テロリストの怒号が静寂しきった廊下に響く。

一応は作戦通りだ。《非観理論》で姿を隠し、その上でアサルトライフルを学校の至るところでぶつ放す。

敵を攪乱させることには成功した。そしてこのまま僕は校外へ逃げて一輝先輩たちの合流を待つだけでいい。

それにして千秋先輩は勝手にどつか行つてしまつたが、平気なんだろうか?

よくよく考えれば敵に遭遇しないことだけを考えれば千秋先輩や僕の「コードは最適と言つても良い。

多分、一輝先輩が千秋先輩と一緒に脱出しどと言つたのも、昼寝とかをしていていつの間にか捕まつてたなんてバカな事態を起こさない為だろう。

だから僕たちが別々に行動してもテロリストに捕まる心配は無いはずだけ……。

千秋先輩の様子がおかしかつたのが気になる。

別にいきなり高笑いを上げて踊りだしたわけではない。別にいきなり容赦なく人を殺し始めたわけじゃない。

でも確実におかしかつた。ほんの少しだけだけど、少し口調が変わ

つた。たかがその程度の変化だけども僕には異常としか思えなかつた。

そして一番最後の言葉。一輝先輩には言つた。そういう意味を持つた言葉。

それが一番気がかりだ。それはどういう意味での言葉なんだろうか。一輝先輩にバレると怒られるから? それとも、一輝先輩すらあの千秋先輩を知らないから?

千秋先輩は一輝先輩に何かを隠しているから?

「ちくしょう……何処に居やがる」

近くでしたテロリストの声で我に返り、また階を移動して銃声を響かせようとする。

その時、放送が入った。

『あ、あー。テスティス。マイクのテスト中、マイクのテスト中』

そこからした妙に緊張感がない声は、あからさまに教職員のものは無かつた。

そもそも、わざわざ一人とテロリストしかいない校舎内に放送を掛ける必要はない。というより誰が一人のために自分の命を犠牲にする。

つまりこれは、テロリストの声。それかもう一人、言葉を封じる以外のコード使用者。

『テロリストの皆さん、および『非観理論』にお知らせします。職員室に来てください。繰り返します、職員室に来てください』

……職員室? 其処に何があるつていうんだ?

……まさか、教師共を人質にして僕を迎え撃つ気なのか!?

『そこにオレたちが所有する人質のうちから10人を置いて行きます。助けに来たきや来い。自分の命が大切なら見殺しにしろ。以上、臨時放送でした』

罷だ。率直に僕はそう思った。職員室には少しだけ何度か入った事がある。

あそこは教師たちのために設置された机やら書類やら半透明の仕切

りまである。冬は暖房器具もあるとかないとか。

そんな物がありふれる場所に僕を連れて行こうとするなんて……
完全に相手は何かを仕掛けてきている。

なら、見殺しにするか？

そう問われてしまえば、僕の答えは最初から一つに絞られてしまつ
のだった。

………… いない。

敵の罠だと思つて誘いに乗つたのはいいけども、職員室に入つた瞬間に違和感を感じた。

テロリストが一人たりともいない。何故？

疑問に思いながらも職員室を詮索していると、人質と思われる手足を縛られた集団を発見した。数はちょうど10人。

…………もしかしてこいつら全員が人質ではなくてテロリストで、助けようと姿を現した俺をいつきに襲撃するつもりか？

一応、保険で全員がどうやって職員室に来たのかを部分観測したが、全員が目隠しをされて一切の状況が分からぬままこの職員室に連れて来られたようだ。

テロリストではない。テロリストが一人たりともいない。
さつき放送で、テロリストにも職員室に人質を放置したことは告げていたのに……。

ちょっと待て。何を僕は勘違いしてたんだ？

僕にその事実を伝えるには、放送という手段は一番だ。けど味方のテロリストに伝える手段は他にあるだろ。仲間なんだから連絡手段の一つもあるはずだ。

携帯とか無線とか。

むしろ味方のみに知らせたいことがあつた場合はそっちの手段を使つた方が有効的だ。

例えば、僕のある場所に行かせて……またはある場所から遠ざけて、何か校舎に追加で仕掛けをするとか。

くそつ！ さつき無線があるかどうか確かめておけばよかつた。

『あー、『非観理論』聞いてる？』

先程の放送の声が職員室内に響く。

僕は放送を流すスピーカーを睨みながらそのまま耳を貸す。

『人質を見殺しにしたかどうかは知らないけど、もしも見殺しなんかにしてない心優しい人間だとしたら当然、違和感には気付いてるよな？ これはオレからのプレゼントだ。そこにいる人質10名だけは逃してやるっていうプレゼント』

また無駄に『親切で。あまりにも良い人過ぎて涙が零れてきそうだ。それで、この人質たちを使って何を企んでいるんだ？ このテロリストは？』

『さらに追加でプレゼントで昇降口のカギを人質の一人に持たせる。それでその人質たちは完全に逃げれるはずだ』

本当に何を考へてる？ わざわざ人質を解放する意味があるのか？ テロリストなら、テロリストでなくとも人質は多くいても問題はないはずだ。

この行為には絶対に裏がある。むしろ何もないなんて、絶対にありえない。

……逃がす事で成立するような仕掛けがあるのか？ そんな無茶苦茶な仕掛けが？

あるとすれば、それは当然コードを使った仕掛けになる。言葉を封じる以外で、こんな面倒な仕掛けをようする「コード……」。

ダメだ。思いつかない……いや、多分まだ思いつく事を禁じられている。

思考も発言も阻害するこのコードをどうにかしない限り、相手の裏を読む事なんて無理だ……。

『さて10人を救う事になるヒーローさんに質問だ。今、体育館にはこの学校の全生徒および職員……といつても10人はそこにいるから全体から10引いた数の人間が無理矢理押し込められている。助ける。』「見捨てる？」

ますます相手の考えが分からなくなる。そんな脅しを仕掛けるのなら本当に何故この10人を解放した？

必要無いだろ。解放する意味なんて。最初から体育館に全生徒と職

員がいることを言つて僕を誘き出せばよかつただろ。何で？ 何の意味があるんだ？

『あ、そうそう。助けるんなら早くした方がいいよ。10分経つごとに13人ずつ殺していくから。ちなみに13つて数はオレがもつてるハンドガンの弾倉に入れられる弾の数で、それ以外になんの意味も持たないから』

その後、ピンポンぱんぱーん、と自分の声でわざわざ言つた後に放送は終了した。

何はともあれ、僕に考へている暇は無いわけだ。

「取り敢えず、今の放送聞きましたね？ 僕はすぐ体育館に行くんで貴方たちは勝手に学校から逃げてください」

突如として現れた僕に全員驚いていたが、それについて説明する気も時間も一切なかつたので対応せずに人質たちを束縛から解放した。

「それじゃ

そう言つて僕は人質たちの方を見向きもせずに職員室を後にした。ともかく今は、体育館に行かなければいけないが……。

今度は正直ヤバい。体育館は広くて隠れる場所も無い。銃撃戦にすれば確実に人質に当たる。

だからつて僕が犠牲となるわけにもいかない……いや、その手があるか。

相手はあくまで僕の命じゃなくて僕が大切にしている物を壊したいんだ。でも僕は自身が何を大切にしているか分からない。

だけどその事を相手は知らない。だから僕を直接殺すことはしない……はず。人質を使って脅してきたりはするかもしぬないけど。

だからどうにか僕が時間を稼いで、鋼凧や一輝先輩が来るまで時間を稼げば、人質は救出できる。

でも正直言えば、これは賭けだ。

相手が僕が自身でも大切な物が何かが分からぬ事を知れば、無理にでもコードを使わせるか、殺しに掛かる。

多分、後者を選択するだろう。なんせコードを使つたかどうかなん

て本人にしか分からないだろうから。

だからどうにか、僕は相手にバレずに嘘を吐き続けなければいけない。

この賭け、8割方、僕の負けが決定している。でも今の僕に打てる手はこれしかないんだ。

「…………はあ

応接室にて、陽菜は安堵の溜息を吐いていた。

後は『結論反転』の仕事だ。自分の仕事はもう終わり。一通りの自分の役割を終えたことに陽菜は安堵していた。安堵しきっていた。あまりにもそれは無防備過ぎた。

「溜息するとするだけ幸せが逃げて行くんだよ。知らないの？」応接室のドアが開かれ、外から入った人間に陽菜は驚き臨戦態勢を取る。

長い銀髪。それぞれ色が違う瞳。片方は蒼で、片方は琥珀色。そんな日本人離れした容姿を持った人間。濁川千秋がここまで来てしまつた事に、陽菜は驚きを隠せなかつた。

何故なら自分が行つた事前調査では、四人の中でもつとも危険度が低いコードを持つ人間だつたからだ。

（…………大丈夫。所詮ただの人間相手にコード使用者の方が優勢だつて話じやない…………）

それに自分には言葉を封じるコードもある。いざとなつたら『敵』などの敵対を象徴する言葉を指定して、思わせなくしてしまえば逃げれる。

そう驕つていた。しかしその驕りは彼女の言葉によつて打ち崩されてしまつ。

「安心して。例えどんな言葉で思考を妨害されたとしても、『敵』というワードが浮かべられなくなつたとしても、ちいは絶対にお前を逃がさないから」

笑つていた。笑いながら言つていた。無邪気な笑いを浮かべて楽し

そうな声色で彼女はそう言つていた。

ただの嘘だ。偶然、自分が思っていた言葉を言つただけだ。そんな事は絶対にない。

ただ何となく、その異様な容姿の少女から異常なものを感じた。

「どうしたの？ セリフと自分のコードで指定しないの？」

千秋の言葉通りに設定するのを陽菜は躊躇つた。今、彼女の言つ通りに行動してしまつたら、それこそ彼女の思つ壺のように感じたらだ。

「貴女……何を企んでいるの？」

取り敢えず、この場で何も言葉を発さなかつたら、そのまま場の流れを銀髪少女に捕まれる。

そう思つた陽菜は、まずそう千秋に問いかげた。

それ自体が間違つた。

「ただお前をこの場で始末することしか考えてないよ、陽菜ちゃん」

陽菜の背筋に悪寒が走つた。

自分はこんな銀髪女を調べはしたが、知り合いではない。この日本においてすれ違つただけでも印象に残りそうなこんな容姿をした人間ともしも自分が知り合いならば覚えているはずだ。

なのに相手は自分のことを知つてゐる。相手も同様に、自分のことを調べていたのか？

「ん？ ゲーム開始時に『結論反転』衣笠海翔と結託し、その後、ちいたちが『完全干渉』春永氷雨と対峙した後に『干渉不可』鳴神茜に話を持ち掛け、そして一度断られたが、『無影無踪』濁川一輝との対峙後すぐさま鳴神茜と接触し、またも結託。拳句の果てには『絶対規律』までにも話を持ち掛け、結託した……程度のことならちいは知つてゐるよ？」

悪寒では済まない。自分のコードと同じレベルの最弱コードだと思っていた。だというのにこの銀髪少女は自分がゲーム開始時から今までの概要のほとんどを知つてゐる。

確か、少女のコードは『異見互換』。たかが覗き見する程度のコード。

それなのに、そんな事まで分かるといつのか？

「言っておくけど、覗き見るのはあくまで『おまけ』みたいなものだよ。ちいのコードは本来、異見、……異なった見解、異なった思考、異なるた価値観、異なる感性。それらを理解解析するものなんだよ」

自分と違った考え方を理解するコード。それが《異見互換》。相手と視界を共有するのはあくまで『おまけ』。コードの本来の使い方は相手の思考を理解する事。

「まあ、お前のコードとは相性が良いんじゃないかな？ その言葉を封じるコードは自分にも影響するみたいだし」

「…………ッ」

使用者本人と同じ思考をすれば、コードによる阻害を受ける事はない。千秋の言う通りだ。

つまりそれは陽菜にとつては自分のコードがほとんど通じない相手と現在対峙しているということになる。

（…………護衛の一人でも付けときや良かつた…………）

後悔してももう遅い。対峙してしまったのだから仕様が無い。

「あ、そういうえば当然ちいはお前が懐に隠し持つてる物の事も知ってるよ。それがお前の敗北条件なんでしょう？」

「…………まるで未来予知じゃない、これ」

詰み、というものを実感した陽菜は思わずそう呟く。

今ココで自分が何か手を打とうとしても、それは相手にすぐにバレてしまう。そもそも手を打たせてくれるかどうかも分からない。

「虎杖君みたいに先に起こる事象は観測できないけどね。ちいのは相手の思考に合わせてるだけ」

それがどれだけ恐ろしい事か、本人は自覚しているのか。いや、千秋にとって自分のコードが恐ろしかろうとそんなものはどうでもいい。

彼女がこのコードを本来の意味で使つとしたらその行動原理はただ一つ。

「でもそんな事関係無く、お前のコードは一輝にとって一番厄介になる。だからお前、ここで消えてよ」
ただ無邪気な笑顔で、千秋は陽菜に向かってそう告げた。

「なんだよ、これ……」

体育館に着いた僕は、目の前に晒された光景に思わずそう呟いた。赤かった。床が、壁が、所々疎らに赤く染まっていた。人の血だ。人の。

「早かつたなあー、想定外だ」

ステージの方から聞こえる声に目を向けると、一人の男が立っていた。

聞き覚えのある声。むつきの放送の声の主。

「お前……ッ！」

怒りのあまり思わず拳を握りながら僕はそう吼えていた。

「怒るなよ。時にはこういう演出が必要だろ？」

悠々と平然と何事も無い様に、冷やかすような口調で男は僕に言う。おかしいだろ。大勢の人が血を流してゐるんだぞ。何でそんな冷静でいられるんだよ。

こいつは、人を何だと思つてゐんだ。

「まあ、そこまで純情な心の持ち主だとオレも心が痛んじまうよな。仕方が無い、一つ良い事を教えてやろう」

そう言つて男はステージから降り、僕へと近付きながらこう語る。

「オレのコードは『結論反転』。決定した出来事を引っくり返す事ができるコードなんだ。つまりそれは死者を生き返らせることができるって意味なんだが……取り引きと行かないか？」

「取り引き……？」

「ああ。オレのコードでここにいる全員を助ける。その代りお前はこのゲームから手を引く……よつは敗退する」

「…………ああ、分かった」

敗退するには僕の大切な物を破壊しなければいけない。

でも僕自身にすら大切な物は分からぬ。だから相手にも壊せるわけがない。

大丈夫だ……話を上手く持つていけば、全て成功するはずだ。

「そうか。ならお前の命以上に大切にしてる物を

」

「それより先ず、ここにいる人たちを助ける」

「おいおい、そう焦るなよ。今からこのテロのタネを明かすんだから

ら

「このテロのタネ？」

そんなもの、僕や千秋先輩を捕まえてゲームから敗退をせるために

……。

いや、それだけだったらこんな回りくどい手を使う必要は無いんじやないか？

鋼屈を誘拐したように『干渉不可』に僕らを誘拐させればそれだけで事済んだはずだ。

わざわざ学校を占拠するような回りくどい手を使う必要はまったくない。

なら、どうしてこのテロを行つた？

「まず最初に『非観理論』、お前自身が自分の敗北条件を理解していない……。ようは物がどれなのかを把握していない事はこっちだって気付いてる」

……バレてた……のに、何故取り引きなんて持ち掛けた？

初めから成立しないことを知つてたのに何で？

「だからオレたちは考えた。自身すら分かつてないものをどうやって破壊するかを。物凄く悩んだぜ。なんせ『非観理論』を使われればこちらの命よりも大切な物が何なのかバレちまうからな。他の参加のことなんて忘れて考えた。そしてある発想に辿り着いた

「ある発想……？」

「敗北条件だよ。命と同等に大切にしているものの破壊。それを逆に利用しようと考えた」

どういう事だ……？ どう考えた？ 命と同等に大切にしているものの破壊のどこに利用性がある？

「まあ人間性によるから一か八かの賭けだつたんだけどな。オレたちはこう考えたんだよ。もしも自分の命の危険性を顧みずに入れ助けようとしたらそれはソイツにとつて大切な物になるんじゃないかつて」

自分の命と他人の命を天秤にかけ、その結果、他人の命を優先した場合。それはある意味、命と同等かそれ以上に大切にしたことになるのではないか。

それがコイツの言つてる事。そして僕は人間として正しい方に、コイツの思惑通りに動いてしまった。

よりもよつて、僕は。

もしもコイツの言つている事が正しいとなれば、今現在僕の正しいものは……テロリストたちの人質の命になる。でも……だとしたら……別に僕に取り引きを持ち掛けなくてもいいはずだ。

だつてここに居る人たちがこんな状態になつている時点で僕は敗北しているはずだから。

コイツは一体、誰を殺して僕を敗退させる気だ？

「さて、そこでオレは2度ほどそのチャンスを設定したわけだが……意味分かるか？」

……職員室と体育館。まさか。

もう僕が到着していた時には全員が死んでいた体育館は対象外にされて、職員室で助けた10人が対象とされているのなら……。

コイツのコードを使って、死んでたものを生き返らせ、助かつたものを助からなかつたことに……殺されたことにしてしまえば。

「やめろつ！」

最後まで、その結末まで考えるよりも先に口が動いた。

その一言は、相手に言つたのか自分に言つたのかすら分からない。

「おいおこどりした。多を救うために少を切り捨てる。常識だろ？」

それともお前は少を救うために多を切り捨てるのか？

「とにかく止めろって言つてんだる！」

「お前に考える時間をやつたって、オレの結論は変わらない。諦めろよ

その時だった。

僕に近付いて来ていた男が途中にあつた死体を踏んだ。道端に落ちてるゴミを踏むように、気付かなかつたように。

そして死体が悲鳴を上げた。

死体が悲鳴を上げた。それが意味する事は、今の僕に思いつくとしたらただ一つ。

まだ、ここにいる人間たちは生きているかもしねりない。

まだ、全員を助けられるかもしねりない。

取り引き（後書き）

まあ、俺がそんな主人公っぽい行動を誰かにさせるわけないですよ。
ね。

まったく虎杖君は甘いんだから。

「……チツ」

取り敢えず、救急車。

そう思つて携帯を取り出した僕に対し、男は拳銃を取り出してきた。大丈夫。もう観測した。今から10分以内にあの銃口から弾丸が飛び出すことはない。

だから僕は男と距離すら取ればいい。そうして捕まらなければ僕はみんなを救えるかもしれない。

引き金を引く金属音のみが小さく鳴り、男は少しばかり銃に視線を移して捨てた。

「救急です！ あの学校で皆が血を流して倒れてて 」

僕は僕で、電話のコードが繋がると共に早口で事態を告げるとともに男から田線を離さないでしつかりと距離を取つていた。

人質の多さが男にとつてアダとなつた。

量が多過ぎて……障害物が多過ぎてすぐさまに僕に近付けない。

そして僕は体育館の出入口側にいる。男はまだ体育館の中ほどまでしか辿り着いていない。

走つて距離を詰めるにしたつて、足の踏み場がないくらいに人が横になつてている。

人を踏めば足場が安定しなくなり、結局スピードは出ない。

大丈夫。これならみんな助けられる。

……じつ思つていた時点で気付くべきだった。

そもそも例え千秋先輩が『禁思用語』を敗退させたといふでそのコードが使用不可能になるわけではない。

コードによる思考封じ……思考誘導が行なわれたとしてもゲームのルール上ではなんの問題も無い。

だってゲームのルール上では敗者が物を壊す事、参加者を殺すことを禁止しているだけなんだから。

それ以外の妨害行為をしたところでルール違反にはならない。
いや、そもそも大前提が間違っていた。

この男は、僕が職員室に置いてきた人質を助けたという確証を得て
いない。

僕の言動や行動が演技だった場合を考えれば、そもそも取引自体が
成立しない。

だつて可能性の一つとして僕は、自分の命と職員室にいる人質の命
を天秤にかけて自分の命を優先したかもしれないんだ。
男からしてみれば、僕が体育館に来た理由だつてコード使用者であ
る自分を討ち取るためだけに来たという風に考える事もできる。
確証はないんだ。男にとつて、僕の天秤が人質に傾いたという確証
が。

なら簡単なことで、この場で確定させてしまえばいい。

「最後の演出によくぞ引っ掛かつてくれた」

体育館の中央で男は止まり、そう僕に告げた。
携帯から聞こえてくる声を無視して、思わず僕は男の言葉に耳を貸
す。

「ネタ晴らしをするとな、この虫けらのように地べたに這いつくば
つているゴミ共はまだ助かるんだ」

僕だつてそう思つた。だから救急車を呼ぼうと電話を掛けた。

「救急車を今すぐ呼べば、もれなく全員助かる。そう言つ風に怪我
の具合をわざわざ調節してやつた。何故かといえば、お前にわざわ
ざ助けるチャンスをやるためにだ」

その言葉を聞いて、途端に僕は今までの事に違和感を感じる。

「そもそも出来過ぎちゃいか? 体育館にきたらオレしかいな
くて、人質をたまたま踏んで誤つて悲鳴を上げさせて、拳銃の弾は
一発もなく、その上こんなにお前との距離が遠い。偶然にも程があ
るだろ」

つまり全てはわざと……仕組まれていたことなんだ。
違和感に気付くタイミングならいくらでもあった。でもそれに気付

けなかつた。

原因はコード。思考を封じるとあるコード。

だから違和感に気付けない。違和感に対しても考えることが封じられているから。

「まあ、それでも賭けではあつた。もしかしたらお前が羊の皮を被つた狼かもしぬなかつたからな。でもそれは取り越し苦労だつたみたいだ」

嵌められた。奴らの仕掛けた最後の罠にまんまと嵌つてしまつた。こうなれば未来はコードを使わずとも観測出来てくる。

今すぐ救急車を呼ぶのを止めたら、僕は敗退。人質は死ぬ。

このまま何もしなければ、僕は敗退。人質は全員死ぬ。

今この場で『結論反転』を敗退させれば、奴はゲームのルール上、コードで僕が命と同等以上に大切に思つた人質たちを殺す事はできなくなる。

でも距離が有り過ぎる。部分観測で大切な物が何でどこにあるかが分かつても、素手では時間が掛かり過ぎる距離だ。アサルトライフルの弾も陽動のさいに大方使つてしまつて残り数もほんのわずかしかない。

そもそも素人の腕で標的を射撃できるかどうかが怪しい。ほとんど無理だろ？

形勢逆転。いや、そもそも僕は最初から有利じゃなかつたからこの言葉は合わないか。

ともかく、僕の浅はかな考えでまた誰かを救えずに立ち尽くすことしかできぬいってわけか……。

……くそつ……。

「敗退おめでとう。心の底から祝うよ」

皮肉の言葉かどうかは知らないが、男は僕にそつまつと指を弾きこ

う言つた。

「反転アクセス干渉」

世界の変える力には音はなく、ただ人の知らぬうちに人為的に変えてしまう。

「うわあ患者が一杯で儲かりそうだ」

「なんで棒読みなんだよ。お前医者だろ？ もつと喜べよ。稼ぎ時
だぞ」

「不謹慎、カスはカスらしく黙つとけ」

どこからか影も形もなく突然、三人が姿を現した。

形勢逆転（後書き）

今年最後の更新。よいお年を

第三者の介入

「……チツ」

「舌打ちとは酷いな。俺たちはわざわざ」の演劇に遅れないようこ
急いで来たつてのに」

三人の集団の中から一人の少年……濁川一輝が前に出てきてそう声
を大にして衣笠に告げる。

「……お前らは別会場に招待したはずなんだけどな？」

「ああ、あのクソボロッちいアパートね。あまりにも雑草が多くつ
たから一度燃やしちゃつたらさあ、何か追い出されちゃつて……仕
方が無いからこっちに来たんだよ」

「…………スリヤガツテ、あの野郎」

「つーことはやつぱり、グルになつて『干渉不可』と俺を潰そつと
してたわけね。まあ別にそんなのはどうでもいいんだが」

一輝から視線を逸らし睡を吐くつて呟く衣笠に対し、適当に笑い
を浮かべながら語りうる一輝。

「ところで聞くけど、お前は『結論反転』だよな？」

「…………そういうアンタは『無影無踪』か？」

「残念、ハズレです。違います。俺のコードは『虚実混交』だ

「…………？」

一輝の言葉に疑惑を抱き、探るように衣笠はその姿を睨み付ける。
「まあ、このフィナーレが終わつた後辺りに参加者全員にメールで
送られるだろ。そのメールをお前が受け取る事は無いとは思つけど」

「随分な自信じやねえーか

「そつちも、随分と余裕を振りまいてるが……大丈夫なのか？」
そう言い、首を傾げながら腕に嵌められていない一つの腕時計を見
せつけるように掲げる一輝。

その腕時計を見た途端に、衣笠の表情が変わつた。

「正直、俺自身の『コードは最強でもあるが最弱でもある。だから俺

の基本戦術の一つは【他力本願】なんだ」

一輝のコード『虚実混交』は、相手の真偽の判断で決まる。簡単に言えば、相手を信じさせなければその効果を發揮できないものだ。騙し合いや駆け引きなどの勝負事においては一番不利となる。

その為、一輝は自らのコードを偽つて使用していた。

そうしなければ会話の成立しない相手……自分の言葉の真偽を判断する気の無い相手と対峙することなど一輝には不可能だからだ。そして今、偽つていたものもバレてしまい『無影無踪』を使うことができない。

そして初対面の相手を信用させるほどの嘘など一輝の頭の隅にもない。

故に使えるものは自分ではなく他人の力。

「『否定定義』『干渉不可』『完全干渉』。」の三つのコードすらあれば余裕でお前らを潰せるという算段は最初からついていた。千秋からは『干渉不可』と『完全干渉』が接触していたという話は聞いていたし、鳴神茜から『完全干渉』という言葉を聞いていた時点で三人の協力を得られる状況すら作ればいいという考えだった。そこに都合よく、お前らの保険として仕向けた参加者の一人が来たわけだ。お蔭で鳴神茜と、鳴神茜をバイパスに春永永雨の協力を得ることができた」

あとはそれぞれの学校についた時点での三人のコード使用者を二つに分割する。

思考妨害が効かない鳴神茜を『禁思用語』の元へ、その他の二人をもう一人のコード使用者である『結論反転』のところへ自分と一緒に向かわせる。

あとは春永に『結論反転』の記憶に干渉させ、大切な物の情報を得る。そしてそのまま空間に干渉し、大切な物を奪い取る。

「まあ正直、鋼凧は春永の協力を得られなかつた場合の保険だからここまで付いて来なくても良かつたんだけど……一応、春永が途中で裏切らないとは限らないからな」

もしも春永が途中でなんらかの理由を付けて協力を断つた場合には、虎杖と鋼凪の二人を使って《結論反転》の大切にしている物を調べさせるつもりだった。

そして鋼凪にサポートさせながら自分が無理矢理奪い取れば何の問題もない。

「まあ分かってると思うけど、さつきお前がコードを使用してここにいる全員を殺そうとしたアレ。鋼凪によって否定されてるから意味無いぜ。それに春永がここにいる全員の肉体に干渉して治療済みだ。だから虎杖を敗退させるお前の作戦……もう意味ないよ」

「…………詰みつてわけか」

本来なら、衣笠のコードは自身が追い込まれれば追い込まれるほど一瞬にして有利な状況へと変えることができる一発逆転のコードである。

しかし《否定定義》がいるこの場ではコードを無効化されてしまう。もしかしたら《禁思用語》が『破壊』や『壊す』などという言葉を封じているかもしれないが、《否定定義》がいるなら意味がない。すべてが無効化される。

彼に打てる手など何一つ残されていない。

「…………何故、時計を今すぐ壊さない？」

「残念ながら、今この腕時計を壊せるような器具をもつてなくてな。家に帰つたら即座に」

「絶対規律」

一輝の言葉を遮るようにスピーカーから声が発せられた。

「《否定定義》は《絶対規律》のコードを無効化できなくなる」

「…………なに、この放送？」

鋼凪が自分のコード名が呼ばれた事で反応して、そんな疑問を口に出す。

「…………ヤバい、油断した」

一方、一輝は自分の甘さをに嘆くようにそう呟く。

「絶対規律。衣笠海翔は今すぐに敗退する」

その言葉が終わると共に、一輝が手に持っていた腕時計は爆発するかのように破片を飛び散らせながらいきなり自然崩壊した。

「絶対規律。衣笠海翔は今この場で死」

「春永！スピーカーをぶつ壊せ！！」

一輝の指示と共に、体育館とその傍にあるスピーカーが内側から破裂した。

そしてそれと同時に衣笠は無抵抗に倒れ、そのまま動かなくなつた。放送が收まり、場の空気が白けかけたところで鋼皿が一輝に問う。

「…………おい、カス…………もしかして今の放送」

「俺だけじゃなかつた…………普通に考えれば分かつたはずだ…………」

親指の爪を噛みながら、苦汁を飲まされたように顔をしながら咳く。

「《絶対規律》も宣言系統だつたから、《禁思用語》に従つた…………」

そう考えれば納得がいくし、追撃が弱かつたのは主にそれが理由か

…………

「…………カス。わたしにも分かるように簡潔に」

「《絶対規律》は俺たちを利用していた」

「…………えつ？」

「詳しくは後で言つ。虎杖！」

「…………な、なんですか？」

いきなりの事態について行けず、自分の名前が呼ばれたことに動搖した虎杖は近付いて来る一輝に視線を合わせながら問う。

「千秋のバカはどこに行つた？ さつきから姿が見当たらないんだが？」

「え、えつと……それは…………」

「…………あのバカ、途中でお前とハグれたのか。クソツ」

はつきりとした回答をしない虎杖の態度からそう間違つた推測をした一輝はやや早歩きで体育館を後にしようとする。

「どこに行くんだ？」

「千秋を探しに行く。《絶対規律》が狙つとしたら孤立している参加者だらうからな」

問い合わせた春永に目も合わせず、一輝は体育館を後にする。

第三者的介入（後書き）

はい、非常に読み難いですね。自分でもそう思います。
でもこれでセカンドステージ終了。
あとは『絶対規律』戦を残すのみとなりましたね。さあ大変だ。
チートと外道の戦闘なんてどう書けばいいんだよこのヤロウ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2876y/>

クローバー：コード

2012年1月5日23時45分発行